
気持ちのカタチ

華泥棒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気持ちのカタチ

【Nコード】

N9461A

【作者名】

華泥棒

【あらすじ】

私達9人グループはいつも一緒にいる。9人のうち5人は女子で4人は男子だ。高校生になった私達はみんな同じ高校。高校生にもなつて恋人でもない異性とずっと仲良くするのはおかしいのかもしれない。だけど私達9人の関係は続くと思つてた。9人の中の誰かに恋人ができて9人の友達関係はずっと続くんだ……と、根拠もないくせに信じてた。

ブログ

『気持ち』は常に変化するもので

どんなに私があがいても 気持ちは1日もせず育ったり死んだりする

ついさっきまで好きだったのに

今ではもう冷めきつていたり

仲が良くて ずっと一緒にいたと思ってたのに

『この人と喋ってるってイライラする』

とか思ってしまったたり

常に気持ちは変化する

『こうでありたい』

『こうであるべきだ』

色々考えるのに

気持ちはそれに見向きもしない

それなのに

『どっちを選べばいい?』

『どうしてこんな事になったの?』

そう問いかけても 返事はしない

1人ぼっちの自問自答

まるで自分が自分じゃなくなってくみたい

第1話 変化への1歩

「スカートがチェック スカートがチェック」

4月 入学式。

桜ヶ丘高校を受験 合格 した春日部^{カスカベ}リンです。

中学のスカートは無地の紺で地味だったけど高校からはチェックな
のです！！

ご機嫌スキップをしてると頭をたたかれる。

「いったい！！」

「うるせえバカ キャーキャー騒ぐんじゃなーよ」

低血圧だから朝は不機嫌な幼馴染 島村^{シマムラ} 飛鳥^{アスカ}が鼻で笑いながら言
う。

小学生の時は私のほうが大きかったのに中学生になってからすぐに
身長を抜かれた。

ちなみに私が158cm 飛鳥が164cm。

「飛鳥 暴力はよくないんじゃないのー？可愛い可愛い隣にさー」

整った顔の少年 沖野^{オキノ} 克哉^{カツヤ}が私に抱きつく。

こちらは身長165cmで整った容姿のため女子からモテる。

本人は本人で女好きだからまんざらではなさそう。

しかし社交的で明るい性格 スポーツ万能のため男子からも人気有。
(そして余計女子にモテる)

「克哉？朝からセクハラ行為なの？」

微笑を浮かべたロングヘアの大人しげな美少女(身長155cm)
サクラヅカ ユメノ
は桜塚 夢乃中学校では学年1位の成績を誇る秀才。

将来の夢は医者らしい。

「そーだそーだ！朝から暑っ苦しいだよお前は！！」

こちらの女の子にしては乱暴な口調のショートカットの女の子は神
崎 奈央。(カンザキ ナオ) 身長は163cm

「いつそ骨の1本折ってあげようかなあ・・・」

今ため息まじりに言ったポニーテールの女の子は松坂 明美。(マ
ツザカ アケミ) 家が柔道・空手・合気道すべてを教える道場のた
め本人もすべてやっている。

そのためその辺の男子より強い。
身長も結構高い168cm

「おう そんな事したら慰謝料沙汰になるだろ？抑えときな」

この背の低い男の子は身長157cm 岡崎 新一。(オカザキ
シンイチ)

お金が大好きでかなりのケチ。

「あのねーそういえばねーチラロチヨコの新作が出てねー名前忘れ
たけど美味しかったのー今度みんなにもあげるー」

こちらのロリな雰囲気の身長146cmと小柄な少女は江田 華穂。
(コウダ カホ)

好きなものは甘いお菓子とアイス。

「俺パス 甘いのが嫌いだったってんだろ？」

綺麗な女顔なのに男の子の藤井 要。(フジイ カナメ)

身長は169cm^{びみょー}

これが私の大好きな8人。

ちなみに私の名前は春日部燐。

私達はいつも一緒に9人グループ。

小学校からのつきあいの人もいれば中学からの人もいる

だけど むかし〜からの友達に仲良しな私達は同じ高校を受

験してみんな合格！

夢乃はもつと選択肢があつたけど・・・1人で行きたくないしとみ
んなのレベルに合わせてくれた。

ザアアア・・・ッ

高校の運動場にたくさんある桜が狂つたように花びらを散らせた。

第2話 茶髪蒼瞳の少年

「ねえねえ クラスわけの発表ってどこにあるのー？」

「あー・・・ゲタ箱じゃねえの？」

飛鳥がキョロキョロしながら言う。

ああ よそ見してたら・・・

ドンッ！！

「痛ッ」

「!？」

案の定誰かにぶつかってしまいました

「す、すいません・・・」

飛鳥が不機嫌そうな顔から驚いた顔になる。

「・・・気をつけて」

そう冷たく言い放って飛鳥がぶつかった少年が顔をあげる。

「・・・？」

整った容姿 地毛だろうか？髪は茶色。

ああ、よく見たら目も青い。

声変わり・・・したろうけど少し高い声

愛想笑いもなしに少年はどこかへ行ってしまった。

『誰だっけ？』

すぐにそう思った。

知り合いなはずなのに・・・

小学校中学校でもあんな綺麗な人いなかったはずだし・・・

うーん・・・？

「隣？どうかしたの？」

夢乃が私の肩をたたいてようやくハッと我に返る。

「う　　ううん・・・なんでもない」

誰だっただんだろ・・・

結局ゲタ箱の壁に貼られてるクラス表を見上げる。

「やったー！私等9人共同じクラスー」

思わず大きな声で言って飛び跳ねる。

「うるせえな 恥ずかしい奴め」

そう言って私の頭を軽くたたいた新一軽く背伸びして自分の名前を確認する。

みんなが同じクラスでよかったー・・・

ホッとして周りを見回したとき すぐに目についた茶髪。

さっきの人だ・・・

茶色い髪に青い目はあってないようであつた。

青い目を動かすことなくクラスを確認するところを見た。

「！」

急に目があつて次の反応に困る。

こちらをジッと見つめてもう1度クラスを確認した。

それから首をかしげて人ごみの外へ。

「????」

こんなバカっぽい奴等と同じクラスかと思ったのかな　でも顔じや名前わかんないし……?

『新入生の皆は自分のクラスの教室へ移動してください』

放送がかかりそれを合図に人ごみがばらけていく。

「私等は・・・1 - 3 かあ」

全4クラスの3組

2組の子と4組の子と仲良くなれるって感じかなあ・・・

「隣?どうかしたか?」

奈央が私の頭を撫でた。

「あ、ううん　3組ってどこかなって思ってた!」

「ああ、それならうちの秋兄が教えてくれたよ。」

明美がくすりと笑う。

秋兄っていうのは明美の家の道場に通ってる高校・・・確か3年だかの男の人。

身長が170後半あるとかでそこそこ強いみたい。(柔道専門らしいけど)

「そういえば秋さんもこの高校だったねー」

そんな話をしながら教室へ入った。

第3話 夢乃の事情

すでに教室には何人か生徒がいて、グループで話していた。

不意に1人 机に座ってボーっとしてる人を見つける。

男子の制服に茶髪 さっきの人かな？

近くにいる女子グループのほとんどが顔を赤くしてそちらを見ている。

そつえば綺麗な顔してたっけ・・・

恋愛関連のことを経験したことのない私には縁のない世界だと思った。

告白されたこともしたことも 好きな人ができたことすらない。

『男子』が『男子』 とはわかっていても『恋愛対象』に見れるかどうかはまた別で

まして身近にいる飛鳥とかだつて整った顔立ちだ。(ただ克哉がずば抜けてカッコイイけど)

だから・・・なんていえばいいんだろう 『恋』というものがよくわからない。

「・・・ふうん 今年は1年生・・・男子の方が多いんだ」

夢乃が後ろの壁に貼られた出席番号順の名前表を見る。

実は夢乃は男が嫌い。

『こわい』わけじゃない『嫌い』ならしい。

理由は・・・あんまり大きな声ではいえないんだけどね

夢乃が小学生の時に両親が離婚したのです。

理由は父親の不倫。

父親は結局不倫相手の女の人を選び、夢乃と母親を残しその女の人と結婚してしまったのでした。

夢乃の養育費は毎月払っている点では関心。

それから夢乃は男が嫌いになった。

ありがち　と思う人はいるかもしれないけど夢乃は飛鳥達4人の男子としか喋ったりしない。

他はシカトだったりやけに冷たかったり・・・

それでも美少女なため男は次々寄って来る。

実際　今だって教室の中の男子は夢乃を見ている。

『もったいない』と思う反面

恋人と親友に揺れる夢乃を見たくないから安心する気持ちもある。

いずれにしても夢乃が決めることで 私がとやかく言う筋合いはない
わかってはいるけどそれはとても寂しいことで 私はなんとなく横
で不機嫌な顔をした夢乃の横顔を眺めた。

第4話 みんなの恋愛事情

そつえば視線を集めているのは夢乃だけじゃない。

奈央の横で笑ってる明美

明美も美少女・・・とういうか・・・カッコイイ系の美少女。

明美が男だったら好きになってたかもしれない っていう女子を何人か知ってる。

確かに明美は男前。

スポール万能 その辺の男子よりも強い・・・

筋肉のためスタイルのいい明美は男子の視線を集めている。

今もまだ不機嫌そうな飛鳥もそこそこモテる。

優しいし頭もそこそいいしスポーツもできる。

顔だって整ってる。

まあ、飛鳥が視線を集めるとは思っていない。(中の上程度だし)

飛鳥は昔（小学生）華穂のことが好きだったらしい。

今ではもう華穂のことはなんとも思っていないらしい。

女子の視線を集めてるのはもちろん克哉に決まってる。

整った綺麗な容姿は一緒に歩くと女子が見事にほぼ全員振り返っていく。

小さい女の子なんて緊張して話すのがいやって言う子すらいるんだ。

高校でどうなることやら心配・・・。

そうそう 克哉は夢乃の事が好きなんだった。

ただ 克哉って夢乃以外の女の子が好きなんだから夢乃は特別扱いされてることに気づいてない。（克哉って私にも抱きつくし）

克哉は勘がいいから中学生の頃も同級生の恋愛事情をすべて把握できていた。敵には回せないタイプってやつかな・・・

ちなみに奈央は『男で生まれたかった』っていう意識が高い。

小学校から一緒だけど中学にあがってきた時誰よりもスカートを嫌がったのは奈央だった。

しばらく下にジャージはいてたっけ・・・

ジャージを脱いだと思ったらブルマとかもはかないでパンツ丸見え状態のまま屋上で寝転がってたりした。

高校ではやめてほしいなあ・・・

明美はスタイルいいからモテるし男子の注目を集める。

だけど明美は『男は強くあるべきだ』と常に考えている。

だから告白されたらまずは攻撃。

それからいつも同じセリフ！

「私に殴り合いで勝つたらつきあってあげるけど？」

初めの攻撃がかならず『明美の本気＋不意打ち』だからダメージが大きい。

そのため毎回男子は戦うことなく退散してしまうのだった。

新一はというとこれまた恋愛にさっぱ興味なし！！

人の恋愛の話には口出すくせに自分はなんにもなし。

本人に聞けば必ずこういう。

「え？だつて彼女とかできたらクリスマスとか誕生日とかの行事のたびに金使うじゃん めんどくせーっての。デート代とかこつちもちじゃなきゃ怒るんだろー？」

ああそうですかこの金の亡者め！！

華穂・・・は 可愛いからそこそこモテるけど喋ってみると中身もロリだから『妹』って感じ。

相手も男の子の事は『お兄ちゃん』とかになつてから恋愛関係まったくなし。

前に好きな人が『いた』とは聞いたことがあるけど・・・過去形だしなあ

要は恋愛話聞いたことないなあ・・・

女顔女顔って昔イジメられてたらしいしなあ・・・

あれだけ綺麗な女の顔だとかまっばいってのもあるしね。

しっかり者ってこともあつて私等の保護者って思ってしまう時がるくらいだし。

まあ、それぞれみんなあるってことかなあ・・・

こんなだからこの友達関係は崩れないで続きそうに思ってしまう。

これからずっと・・・ずっと・・・

誰かが恋人をつくっても 誰かが結婚しても 出産を経験したとしても・・・悪い場合は離婚を経験しても・・・

この関係だけは変わらずに続くと思ってた。

第5話 燐の事情：飛鳥視点

俺 飛鳥の目の前にいる俺より目線が下の女 これが春日部燐だ。

俺と燐は小学生の時から一緒だった。

ちなみに知り合ったキツカケってのが俺の体育館シューズをアイツが間違えて持っていたのがキツカケだ。

男の視線を感じる。

視線を集めているのは夢乃・・・と 燐もだ。

本人は自覚ないらしいが夢乃と燐は美少女顔だ。

まあ、俺はそういうのよくわかんないけど夢乃の方が可愛いだとか男子が前に言ってた。

ただ夢乃は男が嫌いだから恋愛関係の話はない。

燐はというと 男子を男子と見てない気が俺はする。

俺とも普通に手つなぐし・・・（中学生の頃の話）

まあ、それはそれで可愛いというか・・・なんていうか いいとは思っけど。

本人は自覚なしでグループの中での美少女は夢乃ぐらいだと思って

いるけど自分も入ってるぞと俺は言いたい。

明るい性格で顔も美少女　頭はまあ・・・中の下なんだけど

それでも性格　顔　その辺を見れば男は寄って来る。

男と意識してないわけだから告白とかされてもおかしくないんだがそれを俺達4人が阻止してる。

別に恋愛感情があるとか　そういうわけではないけど・・・

なんとなくこのグループの5人は『大切』なんだ。

恋愛対象じゃないけどただ大切に守りたい　自分達のそばにおいておきたい。

だからうちのグループの5人の中で告白された事があるのは明美くらい。

明美は強いから告白されても大丈夫だという意識が4人の中である。

まあ、それは女である明美には失礼かもしれないから黙っておくんだけど。

結局燐は恋愛的なものを意識してないっていうのがおおきい。

ただ・・・俺等もいつまで守ってるんだ？

そろそろ高校生

結局俺等は男と女 実際は恋愛対象のはず。

だから いつまでも守ってるわけにはいかない

「・・・隣」

「んー？何？」

微笑を浮かべてこちらを見上げる隣。

「・・・なんでもないよ」

まあ いいか・・・

そばにいたいからいる そばにおくためには男を寄せ付けるわけにはいかない

この理屈は どこか間違ってるか？

第6話 少年の正体

ガラッ

ドアの開く音。

入ってきたのは中年のおじさん・・・じゃない 先生。

「あー、みんなそろってるかー？」

答える人は1人もいなくてみんな黙ったまま席に着く。

「誰も座つてない席はないから全員だな・・・」

その後入学式があり終わったら教科書の入った袋を配られ 下校。

「あー疲れた!!」

飛鳥がため息をついて背伸びをする。

正門をくぐると夢乃もため息。

他のみんなを見てもため息をついてたり疲れた顔をしてた。

「・・・まったく 男ばっかでいやになる・・・」

夢乃はまたため息。

「あのさー」

肩を軽く3回たたかれた。

後ろから聞きなれない声。

男の子の声。

遠慮がちで 気弱そうな・・・

振り返るとあの茶髪&青瞳の少年。

「・・・何か用？」

飛鳥がその人を睨みつける。

いつもこう。

私達女子に話しかけてくる男子は全員睨みつける。

「もしかして・・・燐？」

「へ？」

「俺 覚えてない？カノンだよ!!」

カノン・・・？

茶髪に青い目・・・？

カノン・・・

こんな知り合い・・・・・・・・・・・・・・・・？？

「オイ なんなんだよお前？」

今度は新一が強気に言う。

「ちょっと 新一！えーと・・・・？」

「幼稚園一緒でさ！小学校にあがる時俺が引越しちゃったんだよ
！！」

幼稚園・・・

不意に美しい青い瞳から大粒の涙をこぼす少年が浮かんだ。

「カノンちゃん！？」

「ちゃん・・・ね アハハッ」

そうだ！いたよ！！こんな子！！

そうだそうだ！！なんで覚えてなかったんだろう！？

「高校生になると同時に帰ってきたんだよー よかった！また会えて」

「アハハ！そういえば廉次とかとはまだ連絡とってるよ？」

「そっかー今度みんなで集まりたいなー！」

にっこりと微笑むカノン。

幼稚園の頃を一瞬思い出して安心した。

第7話 俺が・・・ヤキモチ？（飛鳥視点）

「・・・・・・・・」

なんなんだ？

声かけてきた男と親しげに喋ってる隣。

なんか 凄くムカついてきた。

廉次って誰だよ？

・・・俺だって 小学校からのつきあいだけど・・・

って なんなんだよ

アイツとはりあってどうする？

誰と どんな男と 隣がどうなるつと・・・俺には関係ないはずなのに

口出しする権利なんて ないはずなのに

わかってるのに

・・・なんだ俺

黒い気持ちの渦を巻いていく。

「あ、ゴメンね！紹介するねーこの人私の幼稚園での幼馴染のカノ
ン！」

「初めましてー」

「初めましてー」

「ハーフかなんか？」

なんだよ

みんな 何普通に仲良くなろうとしてんだよ？

なんでそんな友好的なんだよ！！

「あ、家 母親が日本人で茶髪なんですけど父親がアメリカ人で青
い目してんだ。遺伝ってやつでー」

「へー綺麗な目だねー」

「ありがとう」

イライライライラ・・・・・・・・・・

俺1人取り残される。

俺1人 会話に入っていない。

入れない 入りたくない 入らない

すっげー・・・ムカつく・・・

殴りてえ・・・・・・・・・・

「・・・飛鳥？どうしたの？」

心配そうに隣が俺の顔を見上げる。

「・・・・・・・・別に なんでもねえよ」

ムカムカする気持ちが抑えられなくて 機嫌の悪そうな顔しかできない。

「ごめんねカノンーコイツ低血圧なもんだから不機嫌なの！」

バカ そんなんじゃねー！

カノンって奴は俺をジーツと見る。

「・・・へえ？」

そう言うてにつこり笑ったそいつは本ツ当にムカついた。

なんでかなんてわからないけど

ソイツがいる間ずっとイライライライラしてて

ずっとそいつのこと殴りたくて

隣に近寄って欲しくない　なんて

俺が思う権利なのに　そんな風に思ってしまった。

・・・あれ？

もしかして俺　『ヤキモチ』ってやつ　妬いてる・・・のか？

第8話 飛鳥の気持ち

カノンとはメアドを交換してわかれた。

元の9人に戻っても飛鳥だけ不機嫌。

「ねー飛鳥？どうかしたの？」

新しい飛鳥の制服 少しかたいシャツをひっぱる。

「別になんでもねえつつつてんじゃん 離せよ」

・・・いつもは離せなんていわないのに 別になんでもないわけないじゃん

「おい飛鳥 なんなんだよさっきから？」

新一がため息まじりに飛鳥に言う。

「だからなんでもないつつてんだろ？」

「なんでもない顔かよそれ。」

そうだそうだ 新一もって言ってやれ！

夢乃達も呆れたようにため息をつく。

「・・・アイツ ムカつく」

「アイツ？カノンって奴の事か？」

カノンがム力つく？なんでさ

「・・・なんか　ム力つく」

飛鳥はそれだけ言って頭をかく。

それから妙に早歩きになって先頭に立つ。

それに走ってついていく。

歩幅が違うから飛鳥が早歩きだところちは走らなきゃいけない。

なかなか追いつけなくて　飛鳥の後姿からじゃ何を考えてるのかなんてわからなかった。

顔が見えれば　少しはわかるんだけどなあ・・・

小学校から一緒だと　朝顔を見ただけで機嫌がいいか悪いかかわかってしまう。

ああ、あの人の事嫌いなんだな　とか・・・

「・・・飛鳥！待ってよ！」

「・・・・・・・・」

飛鳥は返事もしないでスタスタと早歩き。

息が切れてきて後ろを見るとみんなはほっという後ろの方で喋ってる。

「ッ 飛鳥!!なんなの!?!はつきり言えばいいじゃん!!」

「うるせえな!言いたくねえから言わないんだろ!?!」

そう言ってこっちを向いた飛鳥の顔は真っ赤だった。

「????」

なんで怒るの?

なんで顔赤いの?

せっかく顔が見れたのに 疑問が増えただけだった。

飛鳥のこんな顔 初めて見たんだもん

「けっけど・・・カノンはいい人だよ!?優しかったし・・・それに・・・」

「うるせえ!聞きたくねえよ!!」

飛鳥はそういうと家と方向が違うのに曲がり角を曲がって走っていった。

向こうが走ってしまったたらこっちは追いつけない。

歩幅も 元々の速さも 体力も 全部飛鳥が上。

「・・・変なの」

飛鳥の後姿はすぐに見えなくなってしまった。

第9話 キツカケ 見えなかったモノ

「・・・・・・・・」

イライラする

燐 心配してたよな・・・って アイツが悪イんだよ!!

なんでカノンってのかばうんだよ!

アイツのいいトコなんて聞きたかねーよ! 教えんじゃねえ!! 口に出すな!!

・・・って

「・・・わけわっかんねー俺・・・」

何で燐に怒ってたんだよ

何でこっちの道に来てんだよ 家向こうじゃんか

何でイライラすんだろ?

ここまでイライラしたことあったっけ?

覚えがない

「あー! わっかんねえ!!」

思わず怒鳴るとそばにいた親子がこちらを見る。

ハッとしてまたため息をつく。

ポンッ

「あ？」

肩をたたかれてふりむくとそこにはニヤニヤ笑う新一。

どうやら俺を追ってきたらしい。少し汗をかいてる。

「・・・なんだよ新一」

「いやゝお前もわっかりやすい奴だなゝってさー」

何がわかりやすいんだよ？

またイライラが来る。

「はぁ？意味わかんねえ」

「燐にあたるなよ お前がムカついてんのはカノンだろ？」

「・・・燐もムカつく」

「へ？」

「カノンって奴のいいトコ俺に教えやがって 知りたくねーよ かばうんじゃねーよ」

こんな事新一に言っ たつてしょうがないかもしれない
口に出してからやっと恥ずかしくなる。

「べつ別に俺はっ」

「アハハハハッ！！！」

新一が狂ったように大笑いする。

さっきの親子は早歩きで俺等を追い抜く。

「なんだよお前！！アハハッ　そういうことか！！」

「は？そういうことって　どういうことだよ？」

「自覚ねえのがお前らしいけどバツカだなー」

「なんなんだよ！早く説明しろよ！！」

「お前さー燐に惚れてんじゃねーの？」

・・・あ？

「なんだそれ　バツカじゃねーの？んなわけねえじゃん」

燐だろ？

そりゃ可愛いし　性格だって・・・

けど 今さらそんなことあるわけないだろ

「いや、俺も今気づいたけど 考えてみれば一致するよな？ 4人の女に近寄る男を俺も睨むけど お前って燐の時異常に反応するしな
！！」

「は？ そりゃ 仲いいんだし・・・当たり前じゃねえの？」

「バーカ 友達だからってだけで守るかよ。 だったら明美達も同じようなだろ？」

言われてみて頭の中でビデオみたいにまき戻しする。

以前ゲーセンに9人で行った時夢乃がナンパされても男を追い払ったのは新一。

その前に明美が痴漢された時なんて俺はみんなが痴漢した奴を警察につきだすのを見てるだけだった。

確かに 燐の 때가 1番反応するけど・・・

「今まで燐が俺等以外の男と仲良く・・・ってことがなかなか、なかったからな。 気づくキツカケがなかったってことか」

「な・・・ッ！？ けど燐だぞ！？」

「うんうん わかってるよ。 けど 少し考えてみた方がいいと思うぞ？ 俺は」

考えるって・・・何をだよ？

俺が隣を好き？

んなわけあるかよ・・・

意味 わかんねー・・・

「カノンに嫉妬するのはいいけど 隣を怒らせない程度にな。」

「・・・別に 嫉妬なんて・・・」

「ハイハイ 早く気づくこつたなー」

新一が妙にご機嫌に歩き出す。

・・・なんなんだ

第10話 1人ぼっちの家

「まったく 飛鳥なんだったんだろ？」

家に帰って自分の部屋に入る。

自分の部屋・・・っていつでも全部自分の部屋みたいなものなんだけど。

私は1人暮らししてる。

母親と父親は海外に暮らしてるんだ。

父親が仕事で海外に単身赴任したと思ったら母親はすぐに私よりも父親を選び海外へ行ってしまった。

結果私はこのマンションの広い部屋で1人ぼっちになってしまった。

毎月通帳に生活費が入ってくる。

それは高校1年生の女の子が暮らすにはじゅうぶんな金額。

とはいえ 女子高生っていったら・・・流行がどうかでお金使っちゃうイメージがある。

そうならないようにはしておかなくては。

ベッドに寝転んで白く広い天井を眺める。

飛鳥 どうしたんだろうなあ・・・

何か言いたげな顔してたし 怒ってた。

私 何か悪いことしたっけ？

カノンの事・・・とか 聞きたくないだとか

意味わかんないよ・・・

明日気まずい・・・かも

飛鳥とは 仲良くしてたいのになあ・・・・・・・・・・

「あゝ！！飛鳥のバーカ！！」

チャララー

携帯からの着信音。

「うん・・・？」

誰だろ？

グループの9人には全員同じ曲を設定してるから誰から来るのかわからない。

わけようって何度か思ったけど・・・誰にはなんの曲があうのかわからない。

結局 9 人共青春物の曲を設定してる。

携帯を見ると夢乃からだった。

「夢乃お・・・？」

なんだろ？

話したい事なら一緒に帰ったんだから話せたはずなのになぁ・・・

体はもう寝る準備を始めていたみたいで なんだか見にくい。

メールを開いた。

第11話 夢乃と飛鳥からのメール

目をこすって画面を見る。

『飛鳥の事だけど 新一が追いかけていったんだから大丈夫だと思うよ。』

夢乃からのメールはいつもこう。

いつも 私の心配や不安を見透かすような内容を送ってくる。

それを読んで 悲しくなったり 嬉しくなったり 安心したりする。

だから夢乃が好き。

『うん ありがとう!』

返信するとまたすぐ返事が来た。

『気にすることないと思うけど……飛鳥はカノン君の事が嫌いなんじゃなくて、燐と仲良くしてたのが気に入らなかったのかもよ?』

……へ?

どういう意味?

私とカノンが仲良くしてたから機嫌が悪かったの?

なんで？

「????」

『どういう意味？なんで私がカノンと仲良くしたら飛鳥が機嫌悪くするの？』

そうメールを送ったけど 夢乃からの返事はなかった。

しばらくして 意識が遠のいてまた着信音。

「んん・・・」

手を伸ばし 携帯を持つ。

また目をこすってメールを見ると夢乃。

『返事送れてゴメン 自分で気づいたほうがいいと思う。飛鳥は素直じゃないから・・・意味がわかんなかったらそのうちわかるから気にしないでいいと思うよ』

「????」

やっぱりわかんなかった。

そのうちわかる？

そのうちって いつ？

明日？来月？来年？大学生になったら？大人になったら？お年寄り

になつたら？

・・・私が その意味を理解するまで みんなは私の側に いてくれるの・・・？

飛鳥 全部教えてくれればいいのに・・・

チャララー

「！！」

また着信。

見ると今度は飛鳥。

思わず飛び起きてメールを見る。

『さつきは急に怒ってゴメン。ちょっとイライラしてたから・・・
本当になんにもないから。意味なくイライラしてて・・・ 本当ゴメン』

「・・・」

なんとなく ホツと胸が言った気がした。

よかった

飛鳥からメールが来なかったら 明日私学校行きたくなくなってた
かもしれない。

『うつん 謝らなくていいよ？んじゃまた明日ね（＾－＾）ノ
』

送信して携帯をベッドに置く。

寝ようと思ったけど やめて夕飯作りにキッチンへ向かった。

第12話 飛鳥の夢 不安

夕飯食べて お風呂に入って ちょっと勉強して・・・

それから寝た。

久しぶりに夢を見た。

飛鳥が出てきた。

飛鳥はなんでかわからないけど怒ってて 耳まで真っ赤にして怒ってて

私にはそれがどうしても理解出来なかった。

『どうしたの？』と私が聞くと飛鳥は私を睨みつけて 私に背を向けた。

そして どこかへ歩き出す。

まって 飛鳥

お願い 待ってよ

どうして

探しても 飛鳥は見つからなくて

「・・・・・・・・つつ」

突然目が覚める。

・・・よかった 夢で。

「・・・・・・・・・・飛鳥？」

やっぱり いつかはさよならしなくちゃいけないの？

制服を着て 朝ごはん食べて・・・

「行つてきます！」

誰もいない家へ言う。

ガチャンッ

鍵を閉めてエレベーターに乗る。

変な夢だったなあ・・・

飛鳥 何かあったのかな？

誰かの夢を見るのは よく

・その人の事を寝る前考えてたから

・その人と同じにおいのものがあったから

・その人が自分に会いたって 思ってたから

・この後本当にそれが起こるから

って 小さい頃聞いた。

確かに飛鳥の事考えてた。

においは・・・ないなあ

向こうが会いたい？ どうだろう

・・・起こる の？

飛鳥 離れていつちゃうのかな？

ボーッと考えるとガタンッという音。

ああ 1階についてたんだ

マンションを出て学校へ。

『トンッ！』

「へ？」

背中になにかがあたる。

それを拾うとケシゴム。

「????」

後ろを見ると飛鳥。

「あ……すか……」

「おはよ 何ボーツとしてんだよ？」

「なんでもないッ」

飛鳥は『変な奴』と言って私の横に並ぶ。

「……ねえ 飛鳥」

飛鳥を見る。

飛鳥は不思議そうな顔で私を見る。

「……聞いて また変な奴って思われるだろうなあ

「飛鳥 どうか行っちゃったり……しないよね？」

「はあ？」

マヌケな声

ああ 飛鳥が珍しく朝元気だったのに・・・不機嫌なっちゃうのかな？

「何 どうかしたか？」

「・・・」

なんとなく泣きそうになって下を向く。

「・・・燐？」

「やだよ 飛鳥がいなくなっちゃうなんて」

チラリと飛鳥を見ると少し顔が赤くなってた。

何照れてんのコイツ。

「何言ってるんだよ 俺がいなくなるわけねえじゃん？」

「・・・本当に？」

「なんなんだよ 朝から辛気臭え事言っくなよな！」

「・・・飛鳥 大好きだよ」

につこり笑って言うと飛鳥は顔を真っ赤にした。

変なの 熱でもあんの？

鼻歌を歌いながらスキップをして飛鳥を追い抜いた。

飛鳥 いなくなったら ダメだよ

ずっとそばにいてよ・・・？

第13話 燐への気持ち？（飛鳥視点）

「・・・っ」

やばい 俺今絶対に顔真っ赤だ・・・

簡単に 好きとか言ってくんじゃねえよ

そりゃ そういう意味じゃねえってわかってるけど・・・

ああ バカだ俺

なんで嬉しいんだろ

なんで顔赤くしてんだろ

こんな 好きって言葉意識してんのは俺だけのはずなのに・・・

あれ？

本当に俺 燐の事・・・？

教室に入り席に座る。

それからかゆくもない頭をぐしゃぐしゃとかく。

何考えてるんだ！！

んなわけねえだろ！！

新一に催眠術でもかけられたのかよ！？

隣のことが好きなのじゃない好きなのじゃないありえない！！

「・・・ハア」

ため息をついて荷物を机の中に入れた。

「おはよー飛鳥」

声のする方を向くと克哉。

「・・・克哉 おはよう」

「やつぱ不機嫌だな アハハッ」

「お前は朝から元気だな・・・」

俺だって今日は目覚めスッキリで気分よかったさ

「うん この高校の女子おもしれーぞ さっき階段でナンパされた」

「ナンパ・・・？」

「おう 何組の子ー？名前教えて カッコイイねー！ だよ」

「ふーん」

だからご機嫌なのか

女好きの理由がわからない

「ま、可愛かったからメアド教えたけどね」

「・・・お前って バカだよなー」

「バカ？何言ってるんだ！青春してるんだよ！」

何が青春だよバーカ

中学生の時克哉は2度ほどドロドロな関係を繰り広げている。

確かあれは2年の1学期 このバカ3股かけてやがった。

それを3人共に知られて女がギャーギャーわめいて・・・

ありや聞いているこっちがこわかった。

隣たちにはああなってほしくないもんだ。

2度目は3年の2学期。

また浮気がバレたらしい。女が4人ほど教室で口論していた。

結局は克哉が悪いつてことになってさんざん怒られてたけどな。

「お前女をなんだと思っただよ・・・」

「いーじゃん だって女の子って可愛いし楽しいんだよねー」

「・・・よくまあ隣達に手出さないよな」

出したら怒るけどな。

「ああ、俺実際夢乃狙いだから。」

「・・・あ？」

「ゆめぐつ」

『夢乃！？』といおうとして口をふさがれる。

「言つなよー本人は気づいてないし 気づかれたらヤベエじゃん？」

確かに・・・

夢乃はトラウマがあつて男とかかわりたがらない。

俺等4人は別として・・・。

「どっとうすんだよ？アイツ男嫌いだし・・・」

「あーまあね」

「お前みたいな女好きもつての他なんじゃ・・・」

「失礼な 確かに俺は女の子が好きだけどアイツと両思いになれば女遊びはしない!」

「・・・両思いになんなくてもすんなよ 信頼ねえじゃん」

「アハハッ まあいいじゃんいいじゃん」

よくねえよ・・・

人事ながら心配になる。

・・・心配 するのはいいけど・・・

じゃあ 俺は？

隣の方を見る。

登校してきた明美と喋っていた。

なんの話をしてるのか 聞こえなかったが笑っている。

「・・・ッ!」

ハッと我に返り克哉のほうを向く。

・・・何 考えてんだ俺は

変だ・・・ 新一があんなこと言うからだ!!!!!

第14話 タイミング（飛鳥視点）

キンコーンカーンコーン・・・

チャイムが鳴り響く。

みんなまだ席には着かない。

しばらくして先生が入ってきて慌てて座る。

先生がプリントを配りながら話をする。

俺は隣の事が気になってどうしても話が頭に入らなかった。

ああ 俺は漫画でありがちな初恋でもしてんのか？

なわけねえだろ

初恋でもなければ今恋自体してねえって。

1時間目は担任による数学だった。

中学校の復習だから難しくない。

それでもやっぱり頭に入らなくて黒板に書かれた字をノートに写して終わりにしてしまった。

「・・・・・・」

2時間目・・・は 理科か。

入学式に見たハゲた先生を思い出す。

確かあの人がたっけ・・・理科って。

チャイムが鳴り休み時間。

尿意を感じて教室を出る。

学校のトイレは臭かった。

春休みの間掃除してなかったんだろう。

とはいえ我慢しててもしょうがないので中に入る。

できるだけ息を吸わず苦しくなったら口から吸う。

ジャーツ

水を流しすぐに出る。

体においがこびりつかないといいんだけど・・・。

「ああ、君！何組だい？」

「へ？3組ですけど・・・？」

見ると理科のハゲた先生。

「そうか　じゃあこの荷物理科室まで運んでくれないかい？この子と一緒に」

「は？」

見るとそこには何冊か本を両手に持って立ってる燐。

ああ　いやなタイミングで出てきてしまったらしい。

おかしい

漫画で定番なことばかり。

まったく・・・俺は運がいいのか悪いのか。

俺は燐の倍はあろう本を両手に持った。

おい　先生

よくもアンタこれを教室まで運ぼうと思ったもんだ。

「いやゝ授業で使おうと思ったんだけどね　いらなくなっちゃって！」

・・・自分で運べよな

「じゃあ頼むよ！理科室の場所はわかるかい？」

「・・・わかります」

ああ わかるとも。

入学準備の説明会の時に集まったのが理科室だった。

ああ 知っておきたくなかったな

「んじゃ 燐 行くぞ」

「う うん！」

燐がよろよろしながらついてくる。

あれ 何冊だ？

まあ、見た目からして重そうなのはわかる。

まして燐は力がない。

それは小学生の頃からの体育の授業でわかってる。

これは 俺が少し持ってやる・・・べきか？

とはいえ俺だってかなり重い。

「ちよつ 飛鳥 待ってよ！」

燐がかなり後ろからついてくる。

不意に階段で足を止める。

あんなによろよろしてるのに階段を何事もなくおりれるとは思えない。

しかた・・・ないか。

「燐 少し本かせ。持つから」

思い切ってそういうと燐は嬉しそうな顔をした。

「ありがとう！」

「・・・別に」

ハア・・・

ため息をついて燐から1部の本を預かった。

第15話 理科室で（飛鳥視点）

さっさと理科室に行って教室に戻ればいいんだ。

何事もなく・・・。

「ホラ燐 理科室ついたぞ」

「あ、うん！」

少し持ってやったのにそれでも燐は重そうにのろのろ歩いてる。

もつと持ってくれて言ってるつもりか？いや、そこまで賢い奴じゃない。

どちらかといえば・・・

ガラッ

理科室のドアを開けて ある事実気づく。

この教室の中で 俺と燐は2人きりだ。

「・・・っ」

思わず本を1冊落とす。

「え？飛鳥？」

「あ・・・いや なんでもない」

キヨロリと辺りを見回すと大きな棚があつて張り紙。

『資料（主に本）入れ』

ご丁寧なことだ。ここに入ればいいらしい。

棚のそばまで行き開けるとすっからかん。

全部持ってきたのかよ！？

ため息について本を中へ並べる。

すぐ後ろで飛鳥が本を机の上に置く音がした。

棚は理科室の1番奥。

燐　なんでドアを閉めるんだよバカ！

口に出せば意識してることがバレバレだから言わない。

「・・・燐　先に教室戻つてろよ」

「え？でも　1人じゃ教室の場所わかんないし・・・」

なんだよそれ！！

そついやこいつ方向音痴だった・・・

ため息をついてまた本を片付けにかかる。

もちろん1番上の段から。

1番上の段はきつと燐には届かない。

俺の持つて来た分を棚に収めた棚から離れると入れ替わりで燐が来る。

「おい燐 気をつけないと・・・」

遅すぎた。

ドンッ！！！！

「・・・燐ッ！」

バサバサバサバサッ！！！！

燐は棚に頭を打った。

そしてそのいきおいで上の本を落としてしまった。

「・・・って」

俺の頭や肩から本が落ちる。

自画自賛してもいいだろうか？

さすが俺。

「燐 大丈夫か？」

とつさに燐を抱きしめるかたちになって本から守った。

「う．．．ん 飛鳥大丈夫？」

燐が俺の胸の中で言う。

そう 胸の中。

「．．．．．！！！！！！」

かあぁと顔が赤くなるのを感じる。

どんだけ俺は定番を達成していく！？

しかも燐相手に！！

いきおいで座り込んでしまったらしく燐のスカートがめくれている。

いや、もちろん下にはいてるんだが。

変なことを考えそうになって慌てて燐から離れる。

「はっ 早く片付けるぞ！！」

「？ うん飛鳥何怒ってるの？」

「お お前のドジさに呆れてんだよ!」

「だって ぶつかっちゃったんだもん!」

わかってるよ!!

クソ 情けない

顔はきつとまだ赤い。

そして みつともないことに体に燐を抱きしめた柔らかい感触が残
ってる。

心臓がやかましい。

「・・・・・・・・ツッ」

何燐相手にドキドキしてんだよ俺!!!!!!

第16話 飛鳥の怒り

飛鳥がかばってくれたおかげでどこも痛くない。

飛鳥 顔が見れないけど大丈夫かなあ？

本が落ちてくる時 抱きしめて守ってくれた。

私を自分の方に引き寄せた時 ぐいつて・・・

わ 何私赤くなってるの！！？

だつて 飛鳥すごい力強くて・・・なんかドキッとしたんだもん・・・

なんかまだドキドキしてる。

飛鳥の胸の中は凄くあったかくて 安心できた。

男の子 なんだよね

なんか今さら納得。

私とか 夢乃とか・・・明美とか・・・。

それから新一や克哉

みんな同じだと思ってたのに

小学校の頃も あんまり背だつて変わらなかったのに

中学生になって いきなり抜かれて

いつの間にか全部抜かされてた。

なんか・・・今さら 気づいた気がするなあ

本を全部片付けて私達は教室へ戻った。

教室へ戻ると新一達がニヤニヤしてた。

「????」

なんで笑ってるのかわからないまま席に着く。

「ああ、2人共ありがとう。」

先生がにっこりと笑う。

授業中なのに さっきの飛鳥の事が頭から離れない。

ずっと胸がドキドキしてる。

飛鳥の事 ずっと変なのって思ってたけど・・・

今度は 私が変な人になっちゃったみたい・・・

キンコーンカーンコーン

チャイムが鳴って休み時間。

わっとみんながうるさくなる。

話した事もない女子や男子が私の両腕をつかんでひっぱってきた。

「え！？ちよつ なんなの！？」

先生のいない黒板の前に立たされる。

隣には飛鳥。

「え？え？え？何？」

飛鳥はため息をついていた。

不意に飛鳥の顔を見るとすっごい不機嫌。

いままでにないくらい 怒ってる・・・

「理科室で2人で何してたのー？」

「ずいぶん帰ってくるの遅かったじゃん！」

「2人共授業中ボーツとしてたしー！」

喋った事もない 顔も 名前もわからない人達が笑いながら言う。

新一や華穂達もくすくすと笑ってる。

な・・・つつ!?

顔が真っ赤になるのがわかる。

「隣ちゃん顔赤いよー!」

「!」

急に腹が立ってきた。

なんでこの人達にこんな事言われなきゃいけないの!?!?

「2人共つきあってるのー?」

飛鳥と私が!? そんなわけないじゃん!!!

全然知らない人が・・・変な事勝手に言わないでよ!!!

かといって 怒鳴るわけにもいかない。

隣のクラスの子達まで集まってきた。

否定も肯定もできず 顔が赤いのもおさまらなくて

急に泣きたくなった。

「燐！」

夢乃達の声が聞こえた。

ドンツツッ！！！！！！

1番前の 誰かの席を飛鳥が蹴る。

『ガチャンツ ガンツ』

派手な音をたてて机と椅子が倒れ 中身がなだれる。

「あー！俺の机！！何すんだよ！！！」

「ふざけんなよ teme 等！！！！」

飛鳥のひどく怒った大きな声。

ずいぶん 久しぶりに聞いた。

うつん 以前聞いた時よりずっと迫力があって・・・

「ある事ないことギャーギャー言ってるじゃねえよ！！バカ犬みてえに吠えてんじゃねえ！！ふざけんな！！！！！！」

「あ 飛鳥 落ち着いて・・・」

「燐も何か言えよ!!」

「でっでも・・・」

「・・・次言ってみろよ 女だろうと容赦しねえぞ」

飛鳥はみんなを睨みつけると私の手をひいて教室を出た。

廊下にたまつてた人達はさつと道をあける。

「あ 飛鳥! なんなの!? ねえ!」

なんで そんなに怒ってるの?

人気のない階段の踊り場。

「お前も否定しろよな!! 黙ってんじゃねえよ!」

「だっだって・・・なんて言えばいいのかわかんなかったんだもん
!!」

「顔赤くして泣きそうな顔しながって!! あれじゃからかわれて当然じゃねえか!!」

「そっそりや・・・そうだけど・・・」

そんな風に怒られたら 何にもいえないよ・・・

「ッ 少しの間俺に近づくな」

そう言つて飛鳥は階段をかけ上がつてつた。

「・・・・・・・・何さ」

なんでそんなこと言つなの？

近づくな　なんて

離れていかないでよ

お願いだから　どこかに行かないでよ

おいてかないで

「・・・・・・・・つつ」

泣きそうになるのを堪える。

なんで　こんなに心臓が痛いなの？

死んでしまいそう

痛い・・・苦しい

運動もしてないのに　息が切れる。

立つてられなくなつてしゃがみこむ。

「・・・・・・・・ツツ　飛鳥」

私の事 嫌いになったの？

もう 私と関わりたくないの？

離れていつちゃうの・・・？

いなくなっちゃうの？ねえ・・・

「春日部さん？」

担任の先生が下から上がってきた。

「どうした？気分でも悪いのか？」

「・・・・・・・・先生 保健室・・・・行っていいですか？」

「え？う うん・・・・大丈夫か？ついていこうか？」

「・・・・・・・・１人で行けます」

立ち上がって階段を下りる。

教室には 戻りたくなかった。

第17話 飛鳥と燐 カノン（新一視点）

高みの見物をしていた俺は2人の状態をほぼ理解したつもりだった。

飛鳥は完璧燐の事好きになったね。これは。

カノンが来たことで気づくキツカケになって・・・

まあ、俺の言葉が気になってたつてのもある気もするけど。

燐・・・は 微妙だなあの子。

恋愛経験ないしねえ・・・

まあ、飛鳥の事意識してはいるだろうね。

理科室で何があつたかは・・・まあ、大体予想がつくけど。

今度飛鳥から聞くなあ

まあ、思い切ったことはしてないでしょ。

飛鳥何気に賢いから・・・キスとかはないね。うん。

不意に笑いがこみ上げる。

からかうみんなもバカだよ。あれはやりすぎだね。

まあ、飛鳥はキレたように見えてあれは照れ隠しだね。

ガラッ

飛鳥が教室に戻ってくる。

ただでさえ気まずいムードだった教室の中がさらに気まずいムードへとレベルアップする。

俺はそれを見てまた笑いそうになる。

「あーすか」

俺が手をふると飛鳥はすっごく不機嫌な顔でこちらに来了。

「ご気分はいかが？」

「最悪だね」

「燐の事 自覚した？」

「・・・うるせえよ」

あらま 素直じゃないこつた。

うーん・・・どうなるかなあ

「燐は？」

「・・・泣きそうな顔してた」

ああ、それでまだ不機嫌なのか。

飛鳥は大体怒ったら少し機嫌をよくする。

それなのに さっきよりもさらに不機嫌。

「で？どんな気分だった？」

「・・・なんか 情けなかった。あれ泣きそうだったの俺のせいかなあ」

クラスの連中は興味津々に俺等の会話を聞いている。

「どうだろうね？」

「・・・ツツ あーめんどくせえんだよ」

「うん お前って鈍感だし素直じゃないもんな」

「・・・うるせえよ」

ハアーツと飛鳥が大きいため息をついた。

授業が始まっても燐は教室に戻ってこなかった。

「・・・先生 春日部さんはどうしたんですか？」

国語の女の先生に言う。

クラスの間みなも気になってたらしく俺のほうを見た。

そしてすぐに先生のほうを向き 返事を待っていた。

「ああ、春日部さん・・・あの子ねえ 気分が悪いって言って保健室で休んでるわよ？」

・・・ふうん

飛鳥がシャーペンを落とす。

「大丈夫かしらねえ？戻ってこないのかしら・・・」

授業開始からすでに20分。

「先生 俺・・・様子見に行ってもいいですか？」

立ち上がったのはカノン。

しまった アイツを忘れてた！！

飛鳥がカノンを睨む。

「そうねえ・・・すぐに戻ってくるのよ？」

「ハイ じゃあ行ってきます」

カノンはにっこりと先生に微笑む。

「オイ 待てよ！俺が行く！！」

飛鳥が立ち上がる。

「俺が見に行くよ 先に言ったの俺だし 早いもん勝ちってことで」

「~~~~~っ」

カノンの余裕の笑みに比べて飛鳥はかなりイラついてる。

んー・・・カノンねえ・・・

・ 飛鳥が憐への気持ちに気づくいい機会だと思ったけど・・・・・・・・

三角関係・・・ってことにならなきゃいいんだけどなあ

第18 保健室で

保健室のベッドに横になる。

教室で 飛鳥・・・どう思っただろ

でも 飛鳥が悪いんだよ！あんな一方的に怒るから！それに・・・

『少し・・・』

何さ それ。

離れていかないって 言ったくせに

ねえ 飛鳥・・・。

男女の友情って 本当はないの？

今になっと思う。

本当は・・・。

結局は男と女なの？

ねえ 飛鳥・・・。

飛鳥と離れるのが こんなに苦しいって言ったら 困っちゃう？

ねえ・・・

ずっと ずっと一緒にいたい・・・離れてほしくない・・・

それは 私のわがまま・・・なの？

寂しいって 思ったら わがままかなあ？

そんなことを考えてるといつの間にか眠りについてた。

「・・・んっ」

不意に誰かの手が頭に触れたのを感じた。

「・・・・・・・・誰？」

先生？

目を開けるとそこにはにっこりと微笑むカノン。

「カ・・・ノン・・・？」

「ゴメン 目が覚めちゃった？」

「ん・・・大丈夫 少し起きてた」

「そっか 教室戻れる？みんな心配してたよ？」

・・・みんな

みんなって誰？夢乃達？

飛鳥は？

「・・・・・・・・」

「何かあった？」

カノンが私の顔を覗き込む。

カノンに 言っていいこと？

わかんない

「・・・別に・・・なんでも・・・ない」

「なんにもないようには見えないけど？」

「ッ！」

「や、言いたくないならいいんだけどさ！」

私のモロ『凶星です』と言ってる顔にカノンは慌てて首をふる。

「・・・男と 女が・・・ずっと友達なんて無理なの？」

「へ？」

「ずっと 飛鳥つてそばにいるつて思ってた・・・ずっと友達で
きっとずっと隣にいてくれるつて思ってたの・・・」

言い出したらとまらなかつた。

「けど そんなの無理だつてわかつてきて・・・飛鳥に『距離おこ
う』つて・・・言われて・・・ッ」

もう カノンの顔見れない

「そしたらすごい苦しくて 泣きたくなつて・・・やっと気づいた
飛鳥に彼女とかできたらどうなるの？飛鳥は私達よりその子選ぶ

に決まってるもん・・・ッッ！」

また涙が溢れ出す。

とまらない この口が

動いて 本音ばかり吐いて

「そしたら離れてく・・・そんなのやなの!! そう思ったなら寂しくなつて・・・」

お願い

強がらせてよ もう少し・・・

「なんで・・・っ」

なんで今さら 気づいたんだろう

カノンが私を抱きしめる。

カノンの背中につかまる。

「~~~~~っっ」

カノンの制服を 涙で濡らす。

急にカノンが私から離れる。

「・・・燐」

「な・・・に・・・？」

ボロボロと流れる涙で視界がゆがんで・・・顔が見えないよ？

「好き・・・なんだ」

「へ？」

「俺 燐の事・・・好き・・・なんだ」

ホラ また

「本当は 幼稚園の頃も好きだった・・・けど もうないって思ってた・・・んだけど やっぱ好きだ 今の燐も 昔の燐よりずっと！」

「や・・・ッ」

「俺は燐の事好きなんだ!!」

「やめて!!!!」

カノンを突き飛ばして保健室を出た。

なんで？

カノン

なんでそんなこと言うの？

ねえ

カノンと私も友達じゃダメ・・・なんだ

ねえ

言わないでよ そんなこと

「・・・ッッ」

コンクリートでできた灰色の床を涙が濃い色に染めた。

第19 教室 裏門 裏庭 飛鳥 私

しばらくトイレにこもって 落ち着いてきたら教室に戻った。

「ああ、春日部さん・・・大丈夫か？」

4時間目 総合 担任の先生が私に気づいて言う。

「・・・大丈夫です」

席に座る。

横ナナメ前が飛鳥。

ああ 気まずい

後ろから奈央がシャーペンで私の背中をつつく。

『どうかした？』

小さな声でさういう。

「・・・なんで？」

『泣きそうな顔してる』

やっぱり わかるんだ？

「なんでも・・・ない」

不意にこすれた音がする。

見ると白い折りたたまれた紙。

「？」

手紙・・・？

先生の様子を見て机の中に手紙を握ったままの手をつっこむ。

中を見ると飛鳥から。

『カノンだけ1人で帰ってきてたけど　なんかあったのか？』

なんで　心配するわけ？

意味わかんない

どうしてこついう事するの？

距離おくって話は？

ねえ

飛鳥　勝手だよ

私が傷ついてるなんて 全然気づいてないんだよねえ？

手紙をぐしゃりと握る。

『放課後 一緒に帰ろ』

新しい紙に書いて渡す。

『わかった 裏門にいて』

返事はすぐに来た。

「・・・・・・・・」

ねえ 私の思ってること全部話したら飛鳥・・・どんな反応する？

やっぱり 困るよね

放課後 夢乃達に声をかけられる前に裏庭に行く。

しばらくここにいて 夢乃達が諦めて帰るのを待とう。

裏門に行くのは それから・・・

はーっとため息をつく。

がしっ

「へ!？」

後ろから肩をつかまれて振り向くと飛鳥。

「飛鳥？」

「・・・んだよお前 裏門来いよな」

「え？な なんでここいんの？え？」

「教室 早歩きでお前出るから追いかけたんだよ！なんで裏庭にいらんだバカ！」

飛鳥はイラついてらしく それを吐き出すように怒鳴ってる。

「ご ゴメン」

「で？なんで一緒に帰ろうとか言い出した？」

「!」

いえる かな

飛鳥が目の前にいて ジッと私を見下ろしてる。

見下ろすっつていっても ほんの数cmの差だからたいしたことじゃないけど

なんか こわい

全部 見られてるみたいで・・・

「あの・・・ね」

「うん」

あれ 私 何が言いたかったんだっけ？

飛鳥が目の前だと 頭が・・・真っ白になりそう

「不安っていうか・・・寂しいっていうか なんかわかんない・・・」

「は？何が」

「飛鳥が 距離おこっつて言った時 すっごい悲しくて すっごい辛かったの」

「・・・・・・・・・・」

「それで・・・もしも飛鳥に彼女とかできたら？って急に考えたら
すごく寂しくて 凄く・・・嫌で・・・ッッ」

恥ずかしい

何言ってるの？私・・・

「ゴツゴメン 私が・・・そんなこと思っていていいわけないのに」

だけど

「けど 飛鳥が離れてったらやだって すごい・・・思ってる・・・」

頭真っ白 何言おうとしてるのか忘れた 今何言ってるのかわから
ない 口が勝手に動き出す

とまらない

「飛鳥が離れてっちゃうなんて やだ！」

言い終わって 息がきれる。

しばらく沈黙が続いて我にかえる。

「あ えと・・・ え・・・ 私 何言っただろね は・・・ ははははは・・・？」

頭がカーツと熱くなる。

血が駆け足で上へのぼっていくみたい

顔 赤いかも

ぐいっ

「ひゃ!？」

飛鳥が私を抱きしめる。

ドクンッ

胸が大きく揺れた。

ビクリ したから？

それとも・・・

「俺が 離れるわけねえだろ」

ぎゅっと飛鳥の腕に力が入るのがわかった。

「・・・っ!」

飛鳥の胸も 同じようにドクンと鳴ってた。

「なんていうか………驚くなよ？」

「へ？」

「これから言うこと……聞いて 俺の事嫌いになんなよ？」

「え？え？ 何？」

飛鳥の顔が私を離す。

見ると 飛鳥の顔は真っ赤。

私の目を見た後 飛鳥は静かに目をつむって 口を開いた。

「……お前の事 好き……らしい」

第20話 燐への気持ち 自覚

顔を赤くして喋る燐が凄く可愛く見えて

離れたくなかない

むしろ

お前が離れていくかもしれないっていう気持ちのほうがある

この感情の名前を 俺は知ってる

燐を抱きしめる。

理科室で感じた 燐の体温。

肌の感触 筋肉のほとんどないやわらかい体

『ドクンッ』

今 大きくなったのは 俺の胸か？それとも・・・・・・・・？

どっちでもいい

新一 お前に感謝・・・しょうかな わからない

結果による

燐を離す。

燐は不思議そうに俺を見る。

愛しい

「俺の事嫌いに・・・」

こんな事言いたいんじゃないけど

けど 不安だ

言って お前がもしも離れていったら？

俺が離れていくのが不安だといったけど

それは・・・

「好きだ」

言った後 視界がゆがんだ気がした。

緊張のためか？

血が集まっていく。

胸がドクンドクンとやかましく暴れる。

隣は口を少し開けたまま俺を見た。

「お前の事好きなんて ありえないと思った」

「・・・・・・・・」

「幼馴染だし・・・ってそれだけの理由なんだけど 好きなわけないって思った」

だけど

「・・・ッ 可愛く見えてしょうがない」

お前の事が どうしても

「我ながら気色悪い・・・けど どうにもお前を見ると・・・抱きしめたくなる」

ああ 気色悪い

俺は変態か？もしや

だけどそれは真実で

「なんていうか・・・今でも少し抵抗はある・・・けど」

「お前の事好きなのは確か・・・なんだよ」

隣の顔も赤い。

ああ 抱きしめたくなる

もっと もっと近くへ行きたくなる

隣の心の近く

燐の口が動く。

「うっ……めん」

ごめん？

一瞬 視界がまたゆがんだ。

「か 考えさせて……ください」

「……もちろん！！それは！そうだな！驚くよな！……
あはっ あはははっ」

何を動揺しまくってんだ俺は

ああ ふられたかと思った

だってごめんとか言うんだぞ？おい

アアアア ビックリした！！

その後俺は燐を家まで送った。

その間燐はずっと顔を赤くしたままうつむいてて 俺の顔を見よう
としなかった。

「じ じゃあ・・・送ってくれて アリガト」

燐がやっぱりしたを向いて言う。

「・・・ああ 明日学校で。」

「う うん じ・・・じゃあ・・・」

「燐」

「な 何!？」

・・・警戒してほしくないんだけどなあ

「もしもお前が俺をふったとしても俺は離れていかないよ。絶対。
お前の事が好きな俺でもそばにおいてくれるんなら 俺は離れては
行かない」

離れていける わけがない

「だから 正直な気持ち聞かせて欲しい」

カッコつけてるんじゃない

本当にそう思ってる。

「し 正直・・・混乱してる」

「・・・・・・・・」

「全然気づかなかったから そんなこと」

そりゃな 俺だってさっきやっと完璧に自覚したんだから。

「飛鳥の事・・・・・・・・正直 意識してる」

燐はかあつともつと顔を赤くする。

「急に ドキドキしたりするし・・・・・・・・」

「けど これが恋愛感情なのかどうか 今の私にはわからない・・・から」

「・・・・・・・・うん」

「だから 時間をください」

やつと燐が俺の目を見た。

俺はにっこり笑って燐の頭を撫でた。

「待つよ？俺は離れていかないんだから。」

「・・・・・・・・うん」

燐はようやく笑って 家へはいつていった。

パタンッ

ドアが閉まる。

俺はため息をついて家へ向かった。

なんとなく スッキリした。

ホラ なんか 空なんて見上げてる。

なんで今まで 気づかなかったんだろう

こんなにも アイツの事が愛しいことに

第21話 燐の気持ち 夢乃へ

「~~~~ツッ!!!!!!!!!!!!」

言葉にならない叫び。

ドアを閉めた後すぐ座り込む。

意図的じゃない 腰が抜けてしまった。

飛鳥が好き!? 誰を? 私をお!?

「あ・・・ありえん・・・ツッ」

顔が赤いのがハッキリわかる。

ゆっくり起き上がって夢乃に電話をかける。

「ハイもしもしー」

「もしもし夢乃!!?」

「んー 燐?」

「そう!! ねえ! 飛鳥に告白されたあ!!!!!!」

夢乃の返事がない。

「・・・はあ、そう」

そうって・・・そんだけ!?

「なんかもう頭ぐしゃぐしゃで・・・ッ」

「んー・・・燐はどうしたいの?」

「どうって・・・よくわかんない!飛鳥の事とかあー!なんか頭ぐしゃぐしゃしててイラつく!」

「パニック状態なのはいいけど声のポリウム落として。耳痛いから」

ドライな夢乃も好き・・・うう

「そんな状態じゃ話になんないでしょ?明日朝迎えに行くから。行きの道で話そ?」

「う うん・・・ッ」

電話が切れて はーっとため息をつく。

なんとなく落ち着いた。

夢乃の声を聞いたからかも。

それでも胸がドキドキして・・・

これで夜寝れるかな・・・

結局その日はぐっすり眠った。

次の日の朝

寝たらさらに落ち着いた気がした。

けど 飛鳥の顔が頭から離れなくて 心臓はうるさかった。

どうしよう・・・

ピンポン

夢乃だ！！

慌てて玄関に向かいドアを開ける。

「おはよう」

夢乃がにっこりと笑って言う。

「お・・・おはよ・・・」

「落ち着いた？」

「うん・・・寝たらスッキリしたかも」

「ならよかった」

ガチャンッ

鍵を閉めて夢乃の横に行く。

「で どうするの？ 燐は」

「どう・・・って・・・わかんない」

「わかんないって？」

「だって飛鳥の事好きかわかんないんだもん・・・」

「あー・・・そっか・・・」

「飛鳥がなんで私の事好きなのかもよくわかんないし・・・」

「それは本人に聞けばいいよ。問題は燐の気持ちよねえ・・・」

わかんないよ

人を好きになったことなんて・・・

「そうだなあ・・・じゃあ考えてみな？ もしも飛鳥に自分以外の彼女ができたらどうする？」

「や やだ！ そんなのいや！ 絶対や！！」

思わず大きな声で言うのと夢乃はくすくすと笑った。

「ならじゅぶん。」

「へ？」

「燐は飛鳥の事好きなんじゃない？」

「・・・そなの？」

「うん 飛鳥の事考えてみて？」

飛鳥・・・

小学校の頃から一緒に 仲がよくて

第一印象は『可愛い』だったかも。

昔は可愛かったもんなあ・・・

なのに いつの間にかわってた。

『男の子』になってしまってた。

背にしても力にしても

昔は私のほうが上だったのに。

飛鳥の顔が浮かんで 胸がぎゅっとしまった気がした。

夢乃が口を開く。

「胸がドキドキしたりした？」

「う．．．ん．．．」

「．．．私は憐じゃないから 本当の事はわからない。」

「．．．．．」

「だけど 憐の今の様子を見たら 飛鳥の事好きに見えるよ？」

「え？」

「顔真っ赤」

「！！」

手で顔を覆う。

確かに少し熱い。

けど

夢乃にそういわれてもイマイチ実感がわかなかった。

だって 人を好きになったこと あったっけ？

だから どうにもよくわからなかった。

第22話 変わらない教室 だけど変わって見える

昨日と変わっていない校舎

昨日と変わっていない

教室

なのに 入りたくない

ゲタ箱を見て 飛鳥がもう教室にいる事がわかった。

「・・・何してんの 早く入ろうよ」

後ろから夢乃の手が伸びて ドアを開ける。

「！」

入るしかないじゃん

はぁ・・・とため息をついて教室に入る。

教室を見回すと飛鳥と目があう。

飛鳥は克哉たちと話してたらしく窓の隅にたまっていた。

目があった瞬間 心臓が暴れ出した。

「・・・・・・・・っ」

早歩きに席にたどり着き荷物を置く。

そしてすぐ廊下へ出た。

「・・・はあっ」

息が苦しい

おかしいな

ガラッ

教室のドアが後ろで開く。

見ると不機嫌そうな顔をした飛鳥。

「・・・・・・」

「!?!」

慌てて逃げ出そうと右足を前に出すと右腕をつかまれる。

「な・・・っ!?!」

「逃げんなよ」

「・・・ッッ」

「返事は?」

「……………」

ジッとこっちを見てるのがわかる。

だけど 私はそっちを見ることができない。

見られてる と思うだけで心臓の奥がジン……と熱くなる。

溶けてしまいそう

「……別に ふられても平気じゃないけどしょうがないと思ってる」

「そんなこと……!」

慌てて反論しようとした口に力を入れる。

そんなこと……言わないでよ

「……待つって言ったけど そういう態度ばっかだったら待てないんだけど?」

ため息まじりの声。

「しょうがないじゃん!」

「は？」

「わかんないんだもん！飛鳥の事 好きかもしれないけど人好きになつたことなんてないからわかんないし！」

まだ朝早くはないから人が少ない。

しかも 廊下に限っては人がいない。

だから少々大きな声で喋つたつて平気。

「夢乃に相談したらそれは好きだと思ふみたいな事言われたけど実感ないし・・・ッ」

飛鳥の事は大事なんだもん

「いい加減な返事なんてできないんだもん・・・」

言ってるうちに涙が溢れる。

飛鳥の不機嫌そうだけど 違う

今まで見たことない表情

それを視界に入れるたび 胸がつぶれそうになる。

「・・・ゴメン ごめんな？」

飛鳥の手が私の頭に触れる。

「・・・ッッ」

下を向いて目を手でこする。

「隣の気持ちよく考えずにキツイこと言ってゴメン」

「・・・うん・・・」

「あゝゝ泣くなよ 俺が泣かしたみたいじゃん いや実際そうか
あゝもう・・・」

「・・・ッ」

「俺はお前の事が好きだから。それはハッキリわかってる だから
よく考えていいよ?」

「・・・ん アリガト」

飛鳥が優しいのは知ってた

だけど 私は

この優しい人に辛い思いをさせてるのかもしれない

第23話 カノン 宣戦布告？ 返事 対応（飛鳥視点）

ふーっとため息をついて燐と教室に戻る。

見ると新一達がニヤニヤと笑ってる。

・・・コイツ等 聞き耳たててたなこりや・・・

他の奴等は普通に騒いでるから聞き耳たてなきゃ聞こえやしない。

不意にカノンと目があう。

「飛鳥 ちょっと来てよ」

・・・呼び捨てかよ

少しイラつきを覚えたがもう1度廊下へ出る。

「・・・燐に告白したみたいだね」

・・・聞いてたなこいつも。

「・・・そうだけど 文句あるか？」

「燐 なんだつて？」

「・・・お前に言う必要ねえ」

やっぱりコイツ気にいらねえ

「なんで聞いてくんだよ 気になんのか？」

「当たり前だよ バカだなあ」

「はあ！？」

バカだあ！？

カノンはくすりと笑う。

「言つとくけど お前等がたとえ両思いになつたって俺は壊す気あるよ？」

「・・・あ？」

なんだコイツ

黒い 嫌味な笑みを浮かべたままカノンはこちらを見下すように見る。

ぞわりと悪寒を感じた。

「隣の事気に入ってんのはお前だけじゃねえつつってんの。」

口調が変わってやがる・・・

コイツと喋ってるとイラつき理由がようやくわかった気がする。

「だったらなんだよ 俺は・・・」

「ああ、いい事教えてやるよ」

「あん？」

「俺 昨日保健室で燐と2人きりだったよ」

「!!」

あの時か

そういえば あれから帰ってきた時燐は様子がおかしかった。

あれは クラスの連中に騒がれたせいだと思ったけど・・・

「何があつたかは教えない」

「・・・アイツに何した？」

「教えないつつってんじゃない。」

「・・・・・・・・」

「その時俺は燐に告白もしたよ？」

「！」

「燐の事が好きだって キチンと言った」

「へ 返事は？したのか？あいつ」

胸騒ぎがする

「・・・されてないよ。一言も。」

「な・・・っ」

「ああ、これ以上言う気はないよ。けど 燐の事狙ってんのはお前だけじゃないし俺はお前等がつきあっても壊す気にいる」

「お前に燐をやる気はねえよ」

「・・・俺だつて お前にだけはやりたくねえよ」

精一杯強がって睨みつける。

が カノンはそんな事お見通しと言つようにニヤリと黒い笑みを浮かべて教室へ戻った。

燐が俺の事をふるならそれでいい それならそれで納得はする。

だけど アイツにだけはやりたくない

「そりゃ矛盾してるな」

「へ？」

教室で 要のため息まじりに言った一言。

「それはお前ねえだろー」

新一も言う。

克哉がため息をついて言う。

「自分がふられるのは文句ないけど他人にやるのは惜しいんだ？」

「！」

「矛盾してるな」

要がまたため息。

「うう・・・だって思わないか？」

「結局は自分のもんにしたただけだろ？」

「それは・・・だけど俺　アイツにふられても文句は言わねえよ?」
隣はそれが1番いいって思うんなら。

「どうだか?ふられたらキレちゃったりして?」

否定はしないけど・・・

正直そんなことはどうでもよかった。

なんでもいいから返事が聞きたい

昨日から　スッキリしたようでまた新しい鉛が増えたような気がして仕方がないんだ

胸に　鉛がひっかかってる。

たぶん　お前の返事が聞ければこれは取れるんだろうけど・・・。

第24話 飛鳥へとカノンへと

授業が始まって どうしても飛鳥のことが気になって 後ろ姿ばかり見てた。

授業も よく聞けなくて 黒板をノートにうつすだけで

「・・・っ」

どうしても 目を離すことができなかった。

視界が 脳内が 胸の中が

全部に『飛鳥』が侵食していく。

かあぁと顔が赤くなるのを感じた。

飛鳥の事

好き？

やっぱりわからない

わからないままで返事してもしようがないだろうし・・・

次の休み時間だった。

「隣 ちょっと来てくんない？」

「へ？」

新一に腕をつかまれる。

「どーかしたの？」

聞いても新一は答えることなく腕をひっぱり廊下へ出る。

廊下は人が少なかった。

1組と・・・もう1クラスが移動教室らしい。からっぽの教室があった。

「どうしたの？」

「・・・あのさ 飛鳥の事なんだけど」

新一が私を少し上目遣いで見る。

気を使ってるつもりだろうか？

「うん・・・どうかしたの？」

「や、その・・・返事 どうするのかなーって」

「・・・新一が心配することじゃないよ」

まあ、心配してるのは 飛鳥の事なんだろうけど。

「早く・・・返事出したほうがいいと思う」

「へ？どうしたわけ？」

「・・・なんとなく いい予感がしない」

新一は目をそらして教室へ戻っていった。

呼び出しておいて1人で先に帰るのか 身勝手な・・・

身勝手なところは知ってたけど。

新一にも いつか大切な人可以るのだろう。

夢乃にも 奈央にも 明美にも 要にも・・・

私は どうなるんだろう

私にとっての大事な人って 飛鳥なのかな？

その日の昼休憩

「春日部！この荷物職員室まで運んでくれないか？」

担任の先生が私を呼び止めた。

見ると本が詰まれてた。

またか・・・私はこういう用件を黙って聞くように見えるってことなのかな？

「先生ーこれ私1人じゃ無理ですよ？」

軽く先生を睨む。

先生は困ったように笑って男子を見る。

「カノン 春日部と荷物運んでくれ！」

「はい！」

カノンがにこにこしながらこっちに駆け寄る。

ああ よりによってカノン・・・

・ 飛鳥のことが頭の中でいっぱいになっててカノンのこと忘れてた・・・

この違いも やっぱり・・・飛鳥の事が好きだからなの？

・・・それにしても 気まずい・・・かも。

まあ、職員室だし・・・2人になることはないけど。

「失礼しました」

職員室を出る。

うん 何もなかった。

「隣！」

カノンに腕をつかまれる。

あ・・・

「こないだの返事 どうなったわけ？」

「・・・・・・」

「ダメならダメで言うてくれない？」

「えと・・・」

どうしよう

たぶん・・・ほとんどの確率でカノンのことは好きじゃない。

カノン相手にドキドキしたこともなければ男で意識したこともない
カノンの後姿を見つめたり・・・って 飛鳥へのことと比べること

もないんだけど。

けど ない・・・と思う。カノンは。

「ゴ・・・ゴメン 私は・・・カノンの好きじゃないと・・・思う」

階段を上りたいけど・・・階段は背中。目の前にカノン

まして腕をつかまれてるから・・・なんていうか 逃げられない状況。

「・・・」

カノンが一瞬少し上を見てくすりと笑った。

「？」

不意にカノンの顔が近づく。

「へ・・・やつ!？」

次に起こることならわかった。

避けようとしたけど後ろは階段でへたに動けなかった。

「・・・っ!」

目をつむるが何も起こらない。

目を開けると　すぐ目の前にカノンの顔があるだけだった。

「・・・?」

トンッ

後ろで音がしてふりむく。

いたのは　飛鳥だった。

「飛鳥・・・?」

飛鳥は私の腕をつかむと乱暴に歩き出す。

「へ?どっどっしたの?」

「どうしたのじゃねえ!!」

飛鳥はそう怒鳴って廊下を歩き続ける。

渡り廊下を過ぎて　旧校舎に。

移動教室はもう終わってるはずで　誰もいない。

後ろを見るとカノンはいなかった。

「ねえ　飛鳥?何・・・」

飛鳥はこっちも見ずに立ち止まった。

しんと静まりかえった校舎は奇妙な空間だった。

第25話 カノンと燐（飛鳥視点）

カノンと燐が荷物を運びに行った直後

「・・・あれ 燐は？」

席についてボーッとしてる夢乃に聞く。

「んー？ああ、カノンと一緒に職員室へ荷物運びに行ったよ」

「カノンと2人？」

それだけで俺の心臓は異変を起こした。

「・・・そっか アリガト」

まあ、気にする事もないか

職員室なわけだから・・・うん 別に何も無いはずだし。

と思うはずなのに

足は廊下へ向かう。

廊下を過ぎて階段を駆け下りる。

考えてる事と してる事が違う。

わかってるのに 止まらない。

トントン・・・

もうすぐ1階 職員室のある階。

「・・・！」

燐の声

トンッ

1階の見える踊り場。

カノンと目があうとカノンはくすりと黒い笑みを浮かべた。

「？」

するとカノンは燐に顔を近づける。

あれ・・・って・・・まるで

目の前で すぐそこで起きてることなのに なにが起きてるのか把握できなかった。

不意に燐とカノンが離れる。

俺はわけがわからないまま燐の腕をつかむ。

「え？」

燐の戸惑う声 カノンは何も言わない 追ってもこない

キス してた？

なんでだよ？

カノンとつきあう気が？

だったら だったら・・・

どうせ ふられて アイツにとられるくらいなら・・・

静まりかえった校舎

不意に足を止める。

燐は少し怯えた目

そんな燐を白い 少し汚れた壁に押し付ける。

この光景 何も知らない奴が見たら どう思い どうするだろうっ

燐は逃げない だけど怯えてる

「言えよ 何してた!？」

「へ? な・・・何？」

震える声

何をされるか わかってるのか? だったら逃げればいい

「カノンと! ついさっき!」

「え? 何って・・・」

「俺が来た時! 何してた! ? アイツと! !」

頭に血がのぼる

コイツを怒鳴ったってしょうがないけど

「飛鳥? 何言ってるの? 私何もしてなかったよ?」

「はあ?」

急にマヌケな声になる。

何も してなかった?

「でもお前・・・アイツと近くで・・・」

「ああ、あれはカノンが顔近づけてきたんだよ。なんでか知らないけど。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はああ!!?」

じゃあ アイツわざと・・・・・・・・!!

あの野郎!!

アイツのすかした顔が浮かんだ。

第26話 変わるもの

「え？結局・・・なんなの？」

「何・・・って いいやもう」

変な勘違いして勝手に誰もいない校舎に連れ出して

そんなカッコ悪いこと正直に言ってたまるか！

キンコーンカーンコーン

休憩時間の終わりを知らせるチャイムが鳴り響く。

「あ・・・ヤッベ 授業どうする？」

「・・・戻る・・・か？」

隣がため息まじりに言う。

『戻りたくない』が本音。

教室になんて戻りたくない ずっとこうしてたい。

隣がいて 俺がいて 周りには誰もいなくて

こうしてたい・・・けど

「・・・次なんだっけ？」

「えーと・・・総合・・・だったかな？」

「じゃあ・・・サボる？」

『サボる』の一言なんて 小学生の時要達にいくらでも言ってきた。

夢乃や奈央 女子に言うことだってあつたはず。

なんか 違う

隣が口を少し開けたまま俺を見つめる。

「や・・・えと 別に・・・戻りたいならそれで・・・」

なんとなく気まずくなったのがわかって口調をかえると隣は俺の腕をつかんでにつこり笑った。

「サボっちゃおっか」

「・・・ッ」

この笑顔だけで 不安がすべて消えてしまつて言ったら 嘘に聞こえてしまうだろうか？

この幼馴染のハッキリ言つて色気もなんもない女の子供っぽい笑顔だけで

かすかに幸せを感じてしまつてゐる俺は バカですか？

サボる・・・なんて簡単に口に出してしまったけど 実際この校舎は俺等2人だけなんていう証拠はない。

静かだけど・・・たぶん人がいる。

ハッキリ言ってしまうとこの学校は評判がいいわけじゃない。

頭がいいかと聞かれても・・・まあ、真ん中あたりだろう。

だから当然拍子抜けな生徒が存在する。

そんなの どんなに優秀な学校にも存在すると思うが。

だからうかつに外に出れば不良な2年3年に会う可能性がある。

て となるとやっぱり危ないのは燐？ いや 俺？

顔の可愛い燐はもしかしたら連れまわされるかもしれない。

俺は 男だから手荒なことができるから・・・それはそれで危ないし

・・・まあ、結局ここから動かないほうがいいわけだ。

トンッ

階段を1段下りて1番上の段に座る。

トンッ

燐が隣に座る。

たぶん燐から来る シャンプーとリンスと・・・よく女子がしてる脇にかけてるスプレー？

のにおいが全部まざったいいにおいで頭がクラリとした。

他の女子からすると不快なおいなのに。

「・・・あのさー燐」

「んー？」

『警戒』とか『意識』とか

そんな言葉の意味も知らないというような顔で燐が言う。

「俺の告白 本気にしてる？」

燐の顔が固まる。

『ああ そうだった』みたいな顔。

「本気に・・・してる よ？」

じゃあなんでそんなめちゃくちや動揺した 震えてる声してんだ？

「のわりには 前と変わんないよね？」

変えたいから言った っていうのは100%正解じゃないけどほぼ正解に近い。

燐は困ったような顔をする。

全部知ってるつもりだ。

昔から 見てたんだから 単純なことなら 全部 君の事なら

けど これは予想外。

「飛鳥の事・・・は 好き・・・かもしれない」

この答えは 予想外。

少し困らせてやりたくて

燐は困った顔さえも可愛いと 知ってたから 見たくて

なのに 足元をすくわれしまった気分。

顔が赤くなるのさえ感じる。

「その・・・えと 飛鳥にこんな話するの間違ってるかもしれないけど・・・カノンにも告白されてるの」

「・・・知ってる」

「ッ で・・・ね それで・・・カノンの事もビックリしたけど
あの時はいやだったの好きって言われた時・・・気持ち悪かった
ゾツとしてだから逃げたの」

この言葉を聞いて ひどくイラつくのはどうしてだろう？

かゆくもない頭をくしゃりとかく。

「けっけど・・・飛鳥の場合違って・・・」

燐の顔が赤く染まる。

「なんていうか・・・その・・・えと・・・ッッ」

赤みは頬だけじゃなく 顔のほぼ全体に広がり 耳も赤くなる。

「飛鳥の時は 飛鳥のことすっごい意識して・・・なんか・・・変
な感じだったの」

燐がぎゅっと目をつむる。

「飛鳥の事 好き」

その瞬間 俺は頭がぐらりと揺れて 視界が天井へ向く。

どすっ！

「・・・って」

後頭部に激痛が走る。

階段の横にある壁にぶついたらしい。

「え！？ちよつ大丈夫！？」

不安そうな顔をして燐が立ち上がる。

パサッ

頬にやわらかな燐の髪が触れる。

その髪をあくまでやさしくつかんで俺のほっぺに寄せる。

抱きしめると燐の鼓動に気づく。

少し震える手を見てくすくすと笑ってしまった。

「へっ な 何！？」

裏返りそうな声で燐が言う。

「・・・いや かわいいなあと思って」

そういうと燐は顔を真っ赤にした。

赤い頬に唇を寄せると燐は口を開けて言葉にならない何かを発した。

「な・・・なな・・・にして・・・っっ」

そんな顔も可愛くて笑いをこらえる。

「そっか 両思いつてことはこういうこととしてもいいんだっけ？」

「な・・・な!!!?」

幼馴染で 恋愛対象外とか考えてたのがうそみたいだ。

見事にはまってく

第27話 お祭り

みんなに変化を教えたのは次の日のことで

教室の片隅にいつものグループを集めて 2人で言った。

「隣・・・なんで飛鳥なわけえ？」

明美がため息まじりに言う。

「へ なんて？」

「カノン君のが絶対いいじゃん！顔とか！」

「うるせえよ明美・・・」

飛鳥がむすつと不機嫌そうな顔で言う。

「そりゃ顔のこと言ったら俺なんて・・・だけどさあー」

「何ぶつぶつ言ってるの？」

ニヤニヤ笑いながら言うとき飛鳥は顔を赤くした。

「私はカノンより飛鳥のがかっこいいと思うけど？」

そういうとき飛鳥は顔をさらに赤くした。

みんなはため息を漏らす。

「なっなんだよお前ら！ため息なんて！！」

「いや・・・ついこの間まで恋心を否定してた奴がバカップルにな
ってやがると思ってさぁ・・・」

「イチャつくのはいいけど・・・今燃えるとさめるの早いぞ」

新一達が口々に言う。

「うるせえな！バカップル言うな！冷めたりしねえよ！俺は！！」

俺は・・・？

「・・・そりゃ 燐が冷めたら・・・あれだけど・・・」

なんか飛鳥 昨日から可愛いんだけど？

「私が飛鳥のこと嫌いになるわけないじゃん」

そついうと飛鳥は目をそらした。

「・・・お前ら バカップルだな本当に」

要があきれたように言う。

「あーつきあってらんね 話題変えよー」

新一も「飽きた」というようにみんなにそう言った。

「あ、ねえねえ　今度神社でお祭りあるらしいけど　どうする？」

「あー・・・この辺祭り多いよな。」

私達の住んでるところでは春１回夏２回秋１回お祭りがある。

その度みんなで行ってるんだけど・・・

「どうする？今年・・・みんな一緒で行く？」

明美が明らかに私と飛鳥を見ながら言う。

「・・・まあ、燐と飛鳥は２人で行くだろう？」

新一が口のはしをわずかにつりあげて言う。

チラッと隣にいる飛鳥を見ると何か考えてるみたいだった。

「・・・いや　みんなと行くよ」

飛鳥が言うともみんな目を丸くして口をわずかに開けた。

「なあ？」

飛鳥はこちらを見て同意を求めてくる。

そんな・・・同意を求められても困るよ

本当のところ できれば2人で行きたい っと思ってる。

だってせっかく両思いになったんだし・・・いい機会じゃない？お祭りなんて。

なのに みんなと一緒になんて・・・

せっかく一緒にいるのに話したりできないじゃん どうせ飛鳥男子
というんだもん！！

「え・・・燐 一緒にいいの？」

「え・・・」

飛鳥がキツパリ言うんだもん・・・いやだっていえるわけないじゃん？

「う・・・うん みんな一緒にのほうが楽しいだろうし・・・」

そう言うと新一と要が2人同時に大きなため息をついた。

キンコーンカーンコーン・・・

チャイムが鳴り響くとみんな席に戻る。

前の方の席にいる飛鳥の背中に問いかける。

『なんでみんな一緒にいいなんて言ったの？』

ずっとそれが気になって 授業どころじゃなかったよ・・・

だけど本人にも聞けなくて 休み時間はずっと夢乃達といた。

第28話 祭りと燐（飛鳥視点）

「おい飛鳥あ！！！！！」

休み時間になるとすぐに新一が俺のところに来た。

「・・・何」

「お前来いよ！！！」

「・・・なんなんだよ」

ため息をつくとな新一は俺の腕を強くつかんだ。

そのまま教室を出て廊下へ。

「・・・おい 新一 痛えよ・・・離せ」

「お前さーなんでみんなと一緒にいくとか言うわけ？」

「・・・ああ やっぱりそのことか」

「やっぱりじゃねえよ！わかってんじゃねえかおかしいことだって！！」

なんでお前がそんな興奮してんだよ ほっとけ

「・・・しょうがねえじゃん」

「何がだよ!」

「どうすりゃいいかわかんねえし」

「・・・はあ?」

新一はまぬけな顔と声。

「・・・両思いになって 2人でどっか行くなんてできるわけねえだろ・・・俺何するかわかんねえよ?」

「・・・あーなるほどね そっちの意味か・・・」

「ほかに何があんだよ?」

「や、燐と2人ででかけたくないってことかなーと・・・」

「違うよ 燐に嫌われるようなことしたくねえし・・・それに・・・」

「それに?」

「あ、いや・・・なんでもない」

祭りって毎年燐は楽しそうにはしゃいでる。

そんな燐と2人?ふざけるな

何するかわかったもんじゃねえよ・・・

まして今両思い・・・って・・・

頬にキスであいつあんな顔すんだぞ？

祭りで2人になったら頬どころじゃねえだろうし・・・

あ~~~~!!!!変態か！？俺!!

こんなんで隣といていいのかよ！？ああ!!？

・・・それに

わかんねえし 女の扱いなんて。

夢乃達のこと『女』って見てなかった気がする・・・

だから 祭りとかで2人で何を話せばいい？何をすればいい？

わっかんねえ・・・

俺は女好きでもなければ頭もよくない。

もう少し頭がよけりや何すりゃいいかとか思いつくんだろうけど・・・
・無理だ

「けどさーあれは隣傷ついたんじゃないの？」

「へ？」

「お前の言い方 明らかに2人になりたくないって感じたし。」

「・・・なんだよそれ」

「不安になつてんじゃないの？つきあいはじめなわけだし。」

「・・・んなこと言つたつて・・・」

不安なのは俺も同じだよ。どうすればいいのかわからない

自分を抑えられる自信がないんだ

「お前さ 幸せで忘れてるかもしれないけど ライバル多いんだぞ？」

新一はそう言つて教室へ入つていった。

ライバル・・・ああ そうだ

カノン・・・がいたんだつた

『お前等が両思いになつても・・・』

あれが本気なら これで安心してられない。

それに 燐・・・だから ライバルいるだろ他にも・・・

けど 荷が重い・・・

どうすりゃいいかわかんねえような状況なのに・・・

あー！！いらする！

第29話（無題）

「・・・・・・・・・・」

やっぱり ハッキリさせたほうがいいよなあ

教室に戻り女子にかこまれたカノンの元へ行く。

「カノン 話したいことあるから放課後裏庭来いよ」

「・・・・ああ 別にいいけど？」

なんの話されるかわかってるかのような表情だった。

それに軽くイラつきを感じる。

余裕がない・・・・なあ

「あ 飛鳥！」

この声は・・・

「隣・・・・？」

「あの ね ちょっと来て！」

「・・・・どうかしたか？」

燐が教室を出る。

また廊下かよ・・・

なんて 燐に呼ばれてんだから思ったらだめか・・・

「燐？どうしたんだよ」

「あ あのさ・・・」

燐は上目遣いに俺を見る。

無意識なのかしんねえけど・・・内心ドキッとすんだよなあ
この表情。

「お祭り・・・2人で・・・行きたいんだけど」

言い終わると燐はぎゅっと目をつむる。

「・・・や・・・その・・・2人ではちょっと・・・」

そついうと燐は泣きそうな顔をした。

「え・・・？燐？」

「・・・わかった もういい」

「おい 燐？なんでなきそうなんだよ？」

「泣きそうじゃないもん!!ほっといてよ!」

隣は涙目でそう言って教室へ入っていった。

「・・・意味わかんね」

勝手に泣きそうになって　その上逆ギレエ?

意味わかんねえ　アイツ・・・

俺　何か悪いことしたっけ?

なんで泣きそうになるんだよ?

あんな顔　もう見たくないのに・・・

第29話 (無題) (後書き)

無題にしてすいません；；

題名ってつけるの苦手ですて・・・；；

たまにこういうことがあるかもしれませんができるだけ考えます！
本当にすいません！！

第30話 バカ飛鳥

教室に戻ってため息をつく。

飛鳥のバーカ!!!

私、勇気出していったのに!!

あんな返事が 返ってくるなんて思わなかったんだもん・・・

私と2人がいやなの？

ねえ なんで不安にさせるの？

頭の中と胸の中がぐしゃぐしゃして・・・

「・・・燐？どうしたの？」

「・・・・・・・・カノン」

後ろを振り向くと微笑むカノンがいた。

そういえば 告白・・・されたんだっけ？

どうしょ・・・

「カ カノン！あのね 私ね・・・」

「ん？何？」

がしっ

途端後ろから右腕をつかまれる。

「燐！」

・・・飛鳥

なんなわけ？

カノンと私がしゃべるのがいけないの？

変なところで意見がハッキリしてる

1番 不思議なことには答えてくれないくせに・・・

「カノンとしゃべるな カノン放課後話あるつつたよな？悪いけどそれまで・・・」

「・・・っ」

イラッときて 思わずつかまれた腕をふりまわして手を離させる。

「・・・燐？」

飛鳥の驚いた声 顔は見ない

顔を見たら・・・私・・・

「カノンと喋るなって・・・なんで喋る人まで飛鳥に決められなきゃいけないの？もう・・・全部わかんない」

飛鳥の言いたいこと　したいこと　気持ち

全部わかんないよ

言ってくれなきゃ・・・

『いや・・・ちよつと・・・』

そんなせりふではぐらかすくせに

ああもう　なんかやだ

「飛鳥なんて知らない！カノン　行こ！！」

そう言つてカノンの腕をつかんで廊下へ出た。

後ろから視線を感じたけど　振り向かなかつた。

もうやだ

なんか　面倒になつてきた

なんで悩まなきゃいけないの？

なんでいい加減なの？

そんなのがいっぱい浮かんだけど

1つ1つ考えたくもなかった。

だって 行き着く答えがわかってたから。

飛鳥は 私のこと いい加減な気持ちだったの？

おかしいな

飛鳥から告白してきたはずなのに・・・

それなのに なんで私がこんな不安なの？

なんで 私が・・・

第31話 初めて・・・の相手

「・・・隣？どうしたんだ？」

1階の廊下は授業前だから誰も通らない。

授業 またサボっちゃおうかなあ・・・

なんかもう 全部どうでもよくなってきた・・・

「あ・・・ご ごめんね 連れだしちゃって・・・えと・・・」

「別に 隣ならいいけど？」

・・・あ

忘れてた・・・

そうだ カノンに告・・・

「飛鳥と何かあったんだ？」

「！」

トンッ

後ずさりするとすぐ後ろに壁があった。

背中がぶつかって 後ろを見なくても『これ以上逃げられない』と

わかった。

すぐ前にカノン。

誰も通らない廊下

『逃げろ』と脳が危険信号を送ってくる。

でも どうやって？

「飛鳥と ケンカでもした？」

「べ．．．別に．．．」

「隠すことないじゃん」

「でっでも．．．えと．．．その．．．ケンカってほどのことじゃ．．．」

「俺としては 2人がケンカしてくれたらラッキーなんだけど？」

カノンが私の首筋を指でなぞる。

「や．．．何!？」

カノンの手をつかんでどかせるとカノンはくすくすとわらった。

「ラッキーって．．．なんで？ひどい!私と飛鳥がケンカしたらうれしいの!？」

「うん 嬉しいよ？俺は。」

「なんで・・・」

「俺 言っただよね？燐のことが好きだって。」

「う・・・うん・・・でも私・・・」

「だから 飛鳥はライバルだよ？俺にとっては邪魔な存在なんだよ」

邪魔？飛鳥が？

なんでそんな ひどいこというの？

「だから 俺にとって飛鳥と燐がケンカしてくれたほうが 楽なんだよ」

「楽・・・って 何が？」

「ん？決まってるじゃん 燐のこと奪えるでしょ？飛鳥がいなければ」

「な・・・ッ!？」

「・・・燐はさ そういう無知なところが可愛いけど・・・致命傷だね」

「へ？」

カノンの顔が近づいてきて 私の耳に口付ける。

「や・・・やだッ 離して!!」

離してくれることなく カノンが今度は頬に口付けてくる。

「やだ・・・ッ やめてっ カノン・・・やめて!」

逃れようとして動こうとすると足がすべって座り込む。

そんな私を覆うように後ろに手をおいてカノンはまた近づいてくる。

口から くすくすと笑い声を漏らして。

気持ち悪い

やだ こわい・・・

「や・・・本当に・・・離して!!お願い・・・離してよ!」

「・・・燐」

耳元で名前を呼んで カノンはにっこりと満足げに微笑んだ。

じんわりと視界がゆがむ。

涙が目にとまる。

「ねえ 燐・・・飛鳥とはもうキスしたの?」

「な・・・っ!?!」

かあつと顔が赤くなるのを感じる。

キス・・・って □と□？

そんなの・・・したことあるわけないじゃん！

「・・・腹立つなあ」

カノンはそうつぶやいて私の肩を壁に押し付ける。

「や・・・痛・・・ッ」

次の瞬間 唇にやわらかいものが押し当てられる。

「ん・・・っ・・・っ」

目の前には目をつむるカノンの顔。

されてることを自覚して 目の前が真っ白になる。

「・・・んっ」

離してと 喋りたいのに喋れない

「や・・・ッッ」

ぱたぱたと腕を動かすけどそれは宙を仰ぐだけ。

突然 □の中に何か入ってきて・・・

「う．．．．．ッ！」

ドカッ！！！ ドサ．．．

何かがぶつかった音がして その少し後に何かが落ちた音がする。

目を開けると カノンの顔はなかった。

恐る恐る顔をあげると そこにはかなり怒った飛鳥。

「あす．．．」

「テメエ燐！！何してんだよバカ！！！！」

「な．．．バカ．．．って．．．」

「なんで カノンなんかとキスしてんだよ！！っーか 俺以外の男と．．．．．ッッ」

飛鳥はそこまで言うため息をついて私のすぐ前にしゃがみこんだ。

「お前 何考えてんだよ．．．取り返しのつかないことになったら．．．」

「．．．．．」

急に足と手と腕 うっん 体全身がガクガクと震えだした。

「・・・隣？」

「こわか・・・ッッ」

涙をぼろぼろと落とす。

飛鳥が私を強く抱きしめる。

唇に残る違和感

どうして・・・

初めて・・・だったのに

さっきまであふれてた飛鳥へのもどかしさが どこかへすっ飛んでしまっていた。

「・・・飛鳥・・・飛鳥・・・ッ」

ぎゅっと飛鳥の服をつかむ。

「・・・隣 カノンに何されてたんだ？」

「そういえば・・・カノンは？」

答えられないよ

その質問には

だって 何されたか・・・言っちゃったら・・・

「・・・どっか行つた」

飛鳥は私のことを抱きしめたまま 強い口調で言つ。

「・・・言えよ 何されてたんだよ？」

「・・・い いえない」

「は？」

「言えない・・・ッ」

だって 飛鳥以外の男の子と・・・私・・・

思い出したら また涙が流れた。

第32話 嫌いになるわけ

本当はわかってた。

カノンに 何されたかくらい 後ろから見たってわかる。

座り込む燐

そのすぐ前に座り込むカノン

燐の声

わかってるけど・・・

なんでかわからない 燐から言っただけだった。

だけど燐は泣くばかりで 何度聞いても答えてくれない。

どうしてだよ？

「・・・燐？」

腕をつかんでこちらを向かせると燐はぎゅっと目をつむりそのまま立ち上がった。

「え？」

驚く俺をほっという燐は逃げ出した。

キンコーンカーンコーン・・・

ああ またサボらなきゃいけないみたいだ

はーっとため息をついて俺は燐の進行方向へ向かった。

燐のいる場所は 大体見当がついてたんだ。

タンタンタンタン・・・・・・

旧館の階段を1段1段ゆっくり上がる。

昨日の場所にいるんだろうし・・・

だんだん近づくと泣き声が聞こえた。

その場所につく頃には泣き声はすぐそばに聞こえた。

やっぱりここか・・・

「・・・燐？」

階段の手すりを持って燐のほうを見ると燐はこちらに今気がついたらしく驚いた顔をする。

「なんで逃げるんだよ」

ため息まじりに言つと燐はしたを向いてしまった。

「おい燐・・・？」

燐のほうへ腕を伸ばすと燐は震えた声を吐き出す。

「や・・・触らないで・・・ッ」

「はあ？」

触るな？

なんでだよ　なんで触っちゃいけねえんだよ

なんだか腹が立って燐の腕を力強く握る。

そのままその手を階段の壁に押し付けた。

これで逃げられないだろう。

燐はそれでも俺から目をそらしたまま涙を流す。

つかんだ腕のシャツは濡れていて　燐の目も真っ赤だった。

「おい　燐・・・頼むから話してくれよ」

「・・・や・・・だ・・・ッ」

「なんで」

「だって 飛鳥・・・絶対私のこと嫌いになる」

「はぁ？」

カノンにキスされて 確かにいやだったよ。

俺以外の男が燐に触るなんて そんなの耐えられない

だけど あれはお前からしたわけじゃないし 悪いのは100%カノン。

だったら 嫌いになんて・・・

「絶対 嫌いになるの・・・私・・・だって・・・ッ」

そこで燐の涙の量が増した。

「・・・・・・・・」

燐の罪悪感の意味がわからなかった。

「・・・燐 こっち向いて」

「や・・・なんで？」

「いいから 怒らないから 絶対嫌いにならないから。」

「・・・・・・・・」

燐はゆっくりこちらを向いた。

どれだけ泣いたんだろう

やっぱり目は真っ赤で涙は耐えない。

頬にも乾いた涙の跡があって 首筋も少し濡れてる。

腕も 手も濡れていた。

「・・・飛鳥？」

唇は震えてて かすかに赤い内出血の跡があった。

震えた燐の唇に口付ける。

「・・・ッ」

燐の腕に力が入る。

抵抗するつもりだろうけど そんなのたいした力じゃない。

燐の唇に吸い付くと燐の体が小さく跳ねる。

しばらくして唇を離すと燐は真っ赤で そのまままた下を向いてしまった。

「燐？大丈夫か？」

「・・・ごめん・・・なさい」

⌋
^
?
⌊

「わた．．．し．．．ツ　飛鳥．．．う」

「**隣** 落ち着いて話せよ どうした？」

「カノンに……私……キス……された……の……」

ようやく燐が言った。

「初めて・・・なのに・・・飛鳥じゃなくて・・・カノンに・・・無理矢理・・・う・・・ッ」

「
燐
・
・
・
」

「だから……飛鳥に嫌わ……ると……おも……ツツ」

「……それぐらいで俺が隣のことに嫌いだと思っただけだ？」

そういうと燐は驚いたように顔を上げる。

その隣の頬に手を添えて親指で涙をふき取る。

くすくすと笑ってまた燐に口付ける。

唇を離すと燐は目を大きく見開く。

「初めての相手は……そりゃ俺のがよかったけどさ……」

正直 それに関しての怒りは大きい。

「・・・けどさ 初めてが俺じゃなくてもカノンにされたのはあくまで1回だろ？」

「・・・う・・・ん・・・」

「だったら 俺がこれから先何回でも 何十回でも 何百回でもしてやるよ」

「・・・」

「・・・だから そんなに気にするなよ」

「・・・う」

また燐が泣き出す。

「燐？どうした？いやだったか？ごめん！」

「違・・・飛鳥 やさしいから・・・絶対 怒られると・・・ッ」

「・・・だから 俺が燐のこと嫌いになるわけない。悪いのはカノンなんだよ？それなのに燐を責めるわけないだろ？」

両手で燐の頬をつつむと燐はこくと頷いた。

・ ・ ・ さて カノン

あの野郎ぶっ潰す!!!!!! (燐は許せても奴は許せん)

第3話 裏庭 放課後 カノン

放課後になって裏庭に来る。

燐には下駄箱で待つよう言っている。

しばらく待つとようやくカノンがへらへらしながら来た。

「いやゝゴメンゴメン！女の子をまくのが大変でさー！」

何が女の子だ馬鹿が・・・

「飛鳥と違ってモテるから。」

につこりと微笑みながら言う。

「別に・・・女にモテなくても燐がいるからいいんだよ」

「あつそ 寂しいね」

いやみが通じたのか通じてないのか知らないが余裕な表情は崩れていない。

でも ここで焦ったら絶対足元すくわれる。

「わかったかもしれないけど 俺燐とつきあうことになったんだよ」

「・・・ふーん」

ふーんじゃなくて!!

「だから ちょっかい出すのやめてくんないかな？」

「・・・ちょっかいつて？」

「ふざけんな！お前が隣に何したか知ってんだよ!!」

「つたく 心が狭いなあ」

「はあ!？」

「ちよつとほかの男に触られただけでそれかよ・・・」

ため息まじりにカノンが言う。

「キスはちよつとじゃねえだろ!!」

「初めてだから？んなのつととしなかったお前が悪い」

なんだコイツー!!

ここまで性格悪かったか!？ああ!!？

「あのさー言つたよね？俺。お前らがくつついても邪魔する気あるつて。」

「・・・ああ 言つたな。」

「くつついた以上 遠慮なく邪魔させてもらうつもりだから」

カノンが満足げに微笑む。

ブン殴ってやりたいけど・・・そうもいかないか・・・

「そういうことを言うのは勝手だけだな。今日の時点で燐はお前のこと嫌いになったはずだ。もうつかつに触れねえぞ？」

「うーん そうかぁ・・・それは考えてなかったなぁ・・・」

ふざけるような口調にイラつく。

「考えたかどうかなんて知らねえし興味ねえけど！邪魔すんなよ！それに・・・次燐に触ってみる 病院行かすぞ」

そう言っでカノンを睨みつける。

が カノンはくすくすと笑うだけ。

「知るかよ 俺はいくら時間がかかったっていい。お前から燐を奪ってやるよ」

「・・・・・・・・」

絶対 奪わせてやんねーよ

第34話 名無しの手紙 ラブレター？

「・・・隣」

「あ、飛鳥！どうしたの？」

下駄箱で待ってた隣は俺に気づくとばあっと明るい顔をした。

それがどうも可愛くて口が持ち上がってしまう。

「や、別に？ゴメン 暇だったろ？寒かったか？」

「ううん 大丈夫！あー最近寒いよね」

そつと隣の頬に触れるとひんやりと冷たかった。

「冷たッ ゴメンな・・・早く終わらせるつもりだったんだけど・・・」

「ううん 大丈夫だよ？ね、帰ろ？」

「ん・・・そーだな ちょっと待って」

靴を履こうと上履きを脱ぐ。

パサッ

「・・・あ？」

靴から小さな紙が落ちた。

よく女子がおりがみみたいにしておってる手紙の形。

「なんだこりゃ？誰かと間違えたのか？」

が裏返してみると確かに『島村君へ』と書いてある。

うちにクラスに俺と同じ『島村』はいない。

ってなると・・・なんだ？

「不幸の手紙かあ？」

ため息まじりに言うとなんが手紙を奪う。

「？燐　どうかしたか？」

燐は返事をせず手紙を開く。

小さな紙に小さな女の子の文字が書かれていた。

『突然のお手紙すいません

私は貴方と同じクラスの者です。

入学式の時から貴方と見ていました。

貴方のことが好きです。

きつとふられるけどふられるのが怖いので名前はかけません。

私のことを見つけて　返事をしてくれたらうれしいです』

「・・・はあ？」

俺のことが好きイ？

同じクラスの女子で？

誰だこりゃ

「誰だかわかるか？」

「わっわかるわけないじゃん・・・」

燐はかなり動揺してるみたいで声が震えてた。

「燐？どうした？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「燐？」

「だ・・・って 誰だろ・・・私・・・だって・・・」

「落ち着けよ 俺が燐以外の奴好きになるわけないじゃん。まして
そんな名前も名乗れねえような奴・・・」

「・・・本当に？」

不安そうに 俺を覗きこむ。

「本当だよ？」

そんな燐に顔を近づけると燐は俺の肩をつかんで拒んだ。

「へ？燐？」

「げっ下駄箱なんて誰が来るかわかんないでしょ！」

「あ・・・ああ 悪い」

まあ なあ・・・

そりゃ 誰からか気になるのが本音だけど・・・

今のところうちのクラスで『可愛い』とか思うのは燐ぐらいだし・・・

誰でもいい気はする。

だけど 返事もせずに放置もなあ・・・

まあ、これがからかっているとかなら別だけど

本気なら・・・悪いよなあ・・・

なんて言ったら 燐が不安になるからやーめた

まだ不安そうな顔をしてる燐の手を握る。

「ホラ燐 帰ろ？」

「え・・・」

「燐 好きだよ」

顔は見ずに 燐の前を歩いて言う。

顔なんて見ながら言ったら 赤面でカッコ悪いから。

言った後でやっぱり血が顔に集まってく感じがする。

つかんだ燐の手に力が入るのを感じた。

第35話 克哉 報酬 2500円

「・・・無記名ラブレター・・・ねえ」

朝 燐がないことを確認済の教室で俺はすぐに克哉に相談した。

女好きのコイツなら・・・と思ったから。

本当は本人の気持ちを考えたら他人に見せたりするべきじゃないんだろっけど・・・

手紙を見た克哉はため息をついて俺を見た。

「何 お前こんなので悩んでんの？」

「だ・・・っだってさ 誰かわかんねえじゃんそれじゃ・・・」

「お前なー燐がいるんだからこんなもんどつでもいいんじゃないの？」

そう言つて克哉は手紙をゴミ箱へ捨ててしまった。

「あー！何すんだよ！ー！」

俺はあわてて手紙をゴミ箱から拾う。

「・・・なんで ゴミ箱の中からわざわざ拾うんだよ？」

「はあ？だって・・・」

「まんざらでもねえんだろ。その様子じゃ」

「な・・・っ」

「ったく・・・燐も苦労するな」

「しょうがねえだろ！そりゃ・・・誰かに好きって言われていやな気する奴・・・多くねえじゃん」

「おいおい 彼女持の言うことがよそれが」

「う・・・」

確かに

俺はこの手紙の子が誰であろうとつきあう気なんてない。

だって どう考えても燐がいいし・・・

だけど・・・これが罰ゲームとかじゃない 本気なら・・・

「お前な お人好しは悪いことじゃねえと思う。けどな そのせいで傷つく人間がいること忘れんじゃねーぞ」

克哉はそう言っただけから手紙を奪ってしまった。

「克哉 それ・・・誰かわかんねえかな？」

「・・・忘れんなったよな俺」

「忘れてねえよ でも・・・燐のこと考えても スッキリさせたほうがいいと思う」

昨日の燐の動揺とか考えたら・・・

『ちゃんと断ったよ』

とか

『もう大丈夫』

とか

何か 言ってやらなきゃいけない気がしてならないんだ

「・・・俺 お前が後悔しても慰める気ねえから」

「ヘッ 俺だって慰めてもらう気ねえよー!」

「あっそ んじゃ軽く調べておいてやるよ」

「ああ 頼むよ」

「んー、お礼はどうしよっかなー」

「・・・金とんのかよ 友達だろーが……」

「友達だつてな たまにはメリットがねえとな」

「・・・ったく 何がなんだよ」

「そーだなー ま、今回は1週間パン注おごりでいーや」

「テメエ・・・『でいーや』じゃねえだろ！テメエ1日いくつつ食ってんだ！1日いくらかかってんだ！」

「1日・・・んー500円くらいか？」

「・・・土日は休みだから・・・2500円か・・・高エ」

「アハハッ 毎日500円じゃねえよ！」

「・・・くそっ

けど しょうがねえか・・・

俺じゃ女に話しかけたりしにくいもんなあ・・・

へたに話しかけて隣が勘違いするとか・・・

・・・しょうがねえ 2500円出すか

第36話 手紙の主

んで あれから2日がたった。

その間俺と燐は何にもなかったし 手紙に関しての話題も出なかった。

カノンも別にちょっかい出してこなかったし・・・うん。

が 今日になって克哉がニヤニヤ笑いながらこちらに来た。

「おい飛鳥あ！！わかったぞ！！」

「あん？何がだよ」

燐と昼食を食べていたところに克哉はご機嫌な様子で割り込んできた。

そして俺にそつと耳打ちしてくる。

『お前へのラブレターの主がわかってぞ』

「！！！！」

思わず俺は立ち上がる。

そんな俺を燐は不思議そうに見上げてきた。

「わ・・・悪い燐！夢乃達と食べててくんねえか！？きゅっ急用が

できて・・・」

「え・・・う・・・ん・・・わかった」

「ゴメン！ごめんな憐！けどお前のためでもあるんだああああ！
！！！！！」

廊下に出て俺は克哉の肩をつかむ。

「で、誰だよ！」

「うちのクラスの竹中美緒って知ってるか？」

・・・竹中？

・・・美緒？

誰だそれ？

「目立たないからそうでもないが顔はかなり可愛い感じだ。身長が
150ないらしくかなりのロリだね 運動音痴で・・・ああ、成績
は中の上だ」

「・・・あそ」

「ちなみにお前が小学校の時70点だったテスト アイツは100
点はなまるだ」

「！！なんでそこまでわかった！」

「俺の情報網を甘く見るな。ただの女好きだと思ってただろ」

克哉は満足気に微笑む。

「まったく 何が たまたまだろ？」

「・・・で 本人・・・どれ」

「お前女に興味ねえもんなあ・・・名前じゃわかんねえか」

「そりゃわかんねえって・・・まだ男子の名前だって全員は・・・」

「あ、いたいた！あれだよ！！」

克哉がそいつった瞬間 ドキッとした自分がにくい。

克哉の指差すほうを見ると小柄すぎる女の子が立ってた。

女友達と仲良く喋る彼女は可愛く見えた。

あ、いやいや 燐ほどじゃねえぞ！？

「な？可愛いだろ？」

「まあ・・・燐ほどじゃねえけど」

「・・・ハイハイ」

確かに可愛い。

なるほど あの手紙の丸っこい字にピッタリな子ではあるな。

とはいえ 喋ったことはないし入学してからこれまでまったく眼中になかった。

その子はこちらの視線に気づいたらしく俺のほうを見て顔を赤く染めた。

なんだよ こっちまで恥ずかしくなるじゃねえか！

「お おい・・・克哉・・・」

「何 返事でもすんの？」

「そっそっじゃなくて・・・えーとえーと・・・」

「あ あの！島村君！」

「！」

後ろからする高い かわいらしい声。

これは・・・

振り向くとやはりさっきの女の子。

「え・・・えっと・・・竹中・・・だっけ？」

「はっはい!!」

「な・・・なになぞ？」

「気づいてますよね!あの手紙私だって!!」

「いやいやいやいや!!」

「気づいてたけど!!確かに!!」

「けっけどさ!!」

「そんなでかい声じゃ・・・隣に聞こえるじゃねえかあ!!」

「あ・・・ああ・・・気づいた・・・けど・・・」

「へっ返事は!?!」

「そっそんな真剣に詰め寄られたら・・・;;」

「ごっごめんね・・・急に・・・ッ」

「本当だよ・・・」

「俺は心の中で静かにため息をつく。」

「わ・・・悪いけど俺・・・彼女いるんだ」

「か・・・のじょ?」

「そ・・・うちのクラスの・・・春日部・・・って知ってる？」

「あ・・・燐ちゃん・・・」

知り合いか？

「だから・・・」

「飛鳥ー？何してるの！？燐が待ってるんだからね！ほかの子とイチヤついてんじゃないわよ！！」

明美が教室から出てきて俺の肩をつかむ。

ひょこつと教室から燐も顔を出す。

「あつ明美・・・別に・・・」

「もう！燐が遠慮がちだからって調子にのってんじゃないわよ？」

「別に調子になんか・・・あ、えーと 竹中・・・」

ぐいっ

なんだかひっぱられる感じがある。

「え？」

そちらを見ると上目遣いにこちらを見ながら俺の服をつかんでる燐。

うわ 可愛・・・！

「わ 悪いけど竹中！そういうことだし・・・ごめんな！！」

「え・・・う うん・・・」

あ~~~~泣きそうな顔してる・・・けど・・・あー！！

ゴメン竹中！！お前のことが嫌いなんじゃない！

っーかほぼ初対面で嫌いもなにもねえけど！

とにかくごめんな！！！！

「んじゃ飛鳥 パン注よろしく」

「・・・おお わかったよ・・・2500円・・・」

まあ・・・めでたしめでたし・・・か？

第37話 燐とのケンカ チョコバナナとりんご飴

「あ……あのさ 燐……さっきの……子のことなんだけど」

「……何？」

教室の隅の机4つ

後ろ2人が夢乃 燐で前2人が俺と克哉。

夢乃が厳しい目つきでこっちを見てくる。

「こないだの手紙の子……らしいんだ」

ぼちゃっ

「へ？」

間抜けな声

見ると燐が手から飲んでいたパック牛乳を床に落としてしまっていた。

それを拾って渡す。

「あ、けどその もちろん断るよ!! ない?」

「……ん」

燐は微笑を浮かべた。

それで心底ホッとする。

やっぱり不安は残ってる表情だけど　まあ、ひと段落・・・だろうな。

「そついやさー祭り　どうすんの？」

その言葉に俺も燐も固まる。

「・・・！！」

「・・・え？みんな一緒に行くんでしょ？」

夢乃が明らかにこちらを睨みながら言う。

なんか最近・・・夢乃　俺に対しての態度がキツイと思うんだけど・

「・・・」

燐が牛乳パックのストローを加える。

「夢乃　2人で行くかー？」

「ふざけんな　アンタにはいくらでも女がいるでしょーが」

「えゝひつどー俺夢乃と一緒に行くなら誰とも行かない」

「行かない どうぞ女の子達と。」

この2人は進歩なさげだな・・・

「・・・飛鳥 みんな一緒に行くの？」

「へ？」

燐が何か言いたげにこちらを見る。

いや 正直・・・何が言いたいのかは大体わかるんだけどさ。

「え・・・いやだ？」

「・・・・・・」

燐がうつむく。

「・・・2人で行きたい？」

聞くが返事はない。

「燐？」

「・・・飛鳥が 一緒に行きたくないならいい」

「いや、一緒に行きたくないわけじゃない！！全然！！」

「じゃあなんで一緒に行かないなんていうのさ！」

あ この顔は・・・

キレかけの顔。

顔を真っ赤にして 潤目で 急に声を荒くする。

「怒るなよ だって・・・」

「怒ってないよ!!」

「おい 待てよ・・・だから」

「そうやって言い訳しようとするんなら聞きたくない! 行きたくないならそういえばいい!」

「っだから! 聞けよ!!」

「・・・ツツ 何さ」

走ったわけでもないのにお互いハアハアと息が荒い。

「・・・しょうがねえだろ 2人でなんて・・・行きたくても行けねえよ」

「・・・なん・・・ケホツ でさ」

「だから・・・その・・・正直 今まで通りじゃないわけだから・・・よくわかんねえんだよ」

「何がわかんないのさ?」

「だから・・・2人でツ行つたと・・・して どうすればいいのか・・・」

「・・・・・・・・」

「今まではただの友達だったじゃん・・・だからなともなかったけど・・・やっぱ 違うよ・・・」

「・・・やっぱ言い訳なんじゃん」

「は？」

「だったら何年先なら2人で行けるわけ？しなきゃわかんないじゃん！してもないくせにわかんないなんていわないでよ！！」

また・・・

「っただけど！お互い気い使ってんじやしょうがねえだろ！！」

「何それ！だったら今まで通りでいいじゃん！今まで通りでも2人じゃいけない理由なんてないはずでしょ！？」

「だからー！」

「両思いになって 気持ちに通じて！！変わったのはそれだけじゃん！私は変わってないし！飛鳥だって変わってないでしょ！今までと同じ人でしょ！！？」

隣の目から涙がこぼれた。

俺も反論しない。

「なのになんで無理矢理変えようとすんのさ！！変える必要なんてないじゃんか！」

そういうと隣ははーっと息をついて下を向いてしまった。

いつの間にか俺も隣も立ち上がっていて 隣はすっと座り 俺は乱暴にどすんと座った。

「・・・隣の圧勝だな」

隣で克哉がつぶやく。

夢乃も同意と目で言う。

目で会話すんじゃないよ・・・

自分のせいだけど 俺のせいだけど！

泣いてる隣

しーんとした教室

夢乃と克哉

俺は胸のそこがイライラする。

同時に 不安が広がった。

後ろを見るとカノンがニヤついていた。

俺はそんなカノンを睨みつけて視線を戻す。

テメエにチャンスが来たわけじゃねえ 勘違いすんな！

「・・・隣 悪かったよ」

「・・・」

「・・・祭り 2人で行こう。」

「・・・」

「・・・許してくんねえの？」

「・・・」

返事がない『許さない』ということらしい。

「・・・祭りの時 いや、いつでもいいや・・・お前の言うこと1
回聞くよ。だから機嫌直してくれよ」

隣が顔をあげる。

やっぱり涙目だったけど・・・。

「・・・それから！・・・・・・チョコバナナ・・・とりん
ご飴・・・おこる」

「・・・飛鳥好き」

燐が涙目のままにつこりと笑う。

俺はため息をついた。

チョコバナナとりんご飴

毎年祭りで燐が食べる２つだ。

「・・・たく チョコバナナとりんご飴で仲直りかよ・・・くだらねえな」

「いいじゃん 飛鳥好き」

冗談で言ってるんだろうに 少しでも胸が熱くなる自分が情けない。

恋というものは 素敵なのだか 面倒なのだか

イマイチ俺には理解できそうにない。

第38話 胸の違和感 恋と雲 恋の雲

「・・・ねえ 飛鳥ア」

休み時間 不安になった私はすぐに飛鳥の元へ行く。

「ん、何？」

「明日のお祭りなんだけど・・・」

「あー どうかした？」

「本当に 2人で行くの？」

「・・・は？」

わかってるよ 私から言っただから・・・こんなの私が聞くの
おかしいよねえ

でも・・・

「だって飛鳥・・・あれからずっと機嫌悪いっぱいんだもん・・・」
わかつちやうんだよ

隠してるつもりかもしれないけど どこか機嫌悪げ・・・。

「・・・急に何言い出すかと思ったら・・・疲れてるだけ。隣のせ

「いじゃないよ」

そう言つて飛鳥は微笑んだ。

「・・・本当に？」

じつと飛鳥の目を見る。

「本当だよ？ゴメン・・・顔に出てたか」

「・・・なら よかつたけど・・・」

変わつてないとかいったのは私。

だけど やっぱり何か変わってしまった。

飛鳥は今までよりやさしい。

いいことだし・・・嬉しいけど

なんか・・・変。

胸の奥に違和感が生まれてる。

いつそのこと・・・

指を入れて えぐりつけてしまいたい

恋ってなんだか 難しい。

もやもやして 雲みたい

見た感じはふわふわして やわらかそうで 触れてみたくて 楽し
そうで。

だけど実際は

ハッキリした形のない

ふわふわというより ぼやけた感じ・・・

どうすればいいのか わからない

『こつしたい』と願うのに

そうする方法を私は知らないの。

結局 曖昧なまま 私はお祭りの日を迎えた。

やっぱりなんだか胸の奥に違和感があつて

なんだか もどかしかった。

「飛鳥！」

待ち合わせのお店の前で飛鳥を見つけて声をかける。

振り返った飛鳥は　なんだかご機嫌で　楽しそうで

私に気づくのにっこりと笑った。

それがなんだか嬉しくて

違和感の雲は　風で流された。

第39話 お祭り りんご飴編

人ごみ 独特の香り 横笛の音 はっぴを着た人達 たくさん並んだ屋台 交通整理をしてるおまわりさん

たくさんさんの香り 人がまざってる。

そんな中 飛鳥のすぐ横にいる それがなんとなく嬉しかった。

「ね 飛鳥！りんご飴とバナナチョコおごってくれるって言ったよねえ」

「あー・・・んなこと言っただな・・・いいけど？」

「やったあ まずはりんご飴！！」

すぐそのりんご飴の屋台へ飛鳥と行く。

「りんご飴1つください！」

「はいよ」

飛鳥が100円玉何枚か渡す。

キレイで真っ赤に光るりんご飴が小さい頃から大好きだった。

舐めたら甘くて・・・

まあ、口とか歯が赤くなるのが難点なんだけれども・・・。

「やったあ 飛鳥ありがとー」

「うん」

ドンッ

浮かれてて 目の前の人にぶつかる。

「ごっごめんなさい！」

「あ・・・いーえー」

そちらはカップルで私は女の人にぶつかってしまった。

そのカップルは腕を組んでてなんだか他の人達と違って見えてしまった。

「おい 気をつけろよ」

そう言つて飛鳥が私の腕をつかんで自分のほうへ引き寄せる。

「う、うん・・・」

「ホラ 食べ終わったらチョコバナナだろ？」

そういつた瞬間 手があたたかいものにつつまれる。

自分の右手を見ると飛鳥の左手が握られていた。

「・・・ッ」

飛鳥の耳がかすかに赤い。

それを見てくすぐすと笑う。

右手に好きな人のあたたかい手

左手に大好きなりんご飴

周りは知らない『え？いつも近所に人がこんなにいたの？』ってくらいな人数の人達。

だから手をつないでも恥ずかしくなんてない。

ずっと このままでいればいいのに

ずっと 変わらなければいいのに

ずっと このまま ずっと・・・

第40話 お祭り お化け屋敷編

かなり歩いて 神社に着く。

神社の石段にハンカチを敷いてそこに座る。

他にも何人か石段に座っていて 上る人が迷惑そうに見てた。

だから2人は1番はじっこに座ってる。

ここなら邪魔じゃないだろうし・・・

「ホラ 早く食べるよ」

「え？うん・・・なんで？」

「やっぱり祭りといったらあれに行かなきゃだめ・・・だろ？」

にやりと笑う飛鳥。

この時点でいやな予感はしてた。

りんご飴は胃袋の中

りんご飴の棒はその辺においてあった大きなゴミ箱の中

隣には嬉しそうな顔の飛鳥

そして私は・・・ため息。

「やっぱさー祭りつつたらこれ・・・だろ？」

目の前には・・・

私の大大大大大・・・大嫌い！！な お化け屋敷。

暗いのかこわいのとか・・・急に脅かされたりとか

そついうのが苦手な私にとってお化け屋敷っていうのはまさに天敵だった。

毎年いつものグループで来る。

まあ、毎年私と夢乃は外で待ってるんだけど。

今年・・・そっか 忘れてた

「ね・・・ねえ 飛鳥ア・・・やめない？」

「えー？なんでだよ！学生2人ね！」

飛鳥は私の分まですでにお化け屋敷入り口の人に渡していた。

「だっだって・・・私　こういうの本当だめなの・・・飛鳥だって知ってるでしょ？」

「そりゃ・・・いいじゃん　俺がいるし！な？これがないや祭りに来た感じしねえよ！」

そっそんな・・・

そりゃ　１人で行ってらっしやいななんていえないけど・・・うう・・・

中に入ると後ろで鈍い音をたててドアが閉まる。

周りは・・・きつと木かダンボール。

だけど中は真っ暗で少し寒い。

夏なのに・・・。

「や・・・ねえ　飛鳥・・・私　もうこわいんだけど・・・」

涙目　震える手足

脳が『やめときな　早く出ちゃえ』と信号を送ってくる。

「ホラ　大丈夫だよ！」

飛鳥の明るい声

その声とともにまた手が握られる。

そりゃ・・・飛鳥がいるならって・・・思えないこともないけど・・・でも・・・でも・・・

「わあああああ！！！！！！！」

「きゃあああああああああああああああ……！！！」

お化け役の人が急に出てきて
私はのどがつぶれそうな声をあげる。

「おい、おい、」

「いやああああ……！……来ないでええええ……！！きやあああああ
ああああ……！！……！」

涙がぼろぼろと流れ出す。

その時は私 無我夢中で覚えてないけど飛鳥の話によるとお化け役の人も困ってたらしい。

「おい
燐！」

飛鳥が私の手をひっぱり走る。

少しすると誰もいないところになる。

「大丈夫か？ゴメン　ここまでだと思わなくて・・・」

立ってられなくなった私を飛鳥が抱きしめる。

じんわりと体中にぬくもりが広がる。

毎日　こんな風なお祭りだったらいいのにかしうがないことを
考えてしまった。

第41話 お祭り 飲み物編

なんとかお化け屋敷を出る。

ぐずぐずと泣く私を見て飛鳥は困った顔をする。

「のっ飲み物でも買ってくるから待ってるよ！知らない男に話しかけられたらすぐに俺呼べ！」

飛鳥はそう言って人ごみの中へ消えてしまった。

こま犬のよりかかって泣いていると誰かが肩をたたいてくる。

「え？」

振り返るとおじさん。

「お嬢ちゃんどうしたの？迷子かい？その迷子案内センターの者なんだけど・・・」

おじさんの指差すほうを見ると確かに迷子センターがある。

「あ・・・いえ 迷子じゃないです！」

「そうかい？ならいいんだけど・・・ホラ飲み物。」

「あ・・・りがとうございます」

もらっても・・・平気だよねえ。

迷子案内センターには人がいない。きっとこのおじさんがここに
いるから。

いい人そうだし・・・私に飲み物を渡すと手をふって迷子センター
に戻っていった。

うん 確かに迷子センターの人。

渡された紙コップに入った飲み物はコーラっぽい。

黒くて・・・小さな泡。

私はそれをごくごくと飲み干した。

のどが渴いていて、体は水分を歓迎した。

が

ごく・・・ん・・・

飲み物がのどを通り、少しすると・・・

カアアアアツツ

「・・・え？」

体中があつくなる。

だんだん視界がゆがみ、頭がぐらりと揺れた。

向こうにこちらへ歩いてくる飛鳥が見える。

「・・・はれえええ？」

みんなが 回ってる・・・

地面が 人が 屋台が こま犬が・・・

瞬間 目の前は真っ青な空になった。

が すぐに暗闇へと変わる。

「・・・ん」

頬に何かが触れるのを感じて目を開ける。

目の前にはあきれた顔の飛鳥。

「あす・・・かあ？」

「お前何してんだよ！！」

「へえ？」

まだ頭はくらくらしてたけど起き上がる。

周りを見るとそこは誰もいない近所の公園。

ベンチに座って・・・どうやら飛鳥のひざ（もも？）を借りていたらしい。

「ごっごめん!!」

「いいよ・・・それより お前酒・・・飲んだ？」

「・・・へ？」

「酒くせえ・・・」

「・・・あれえ？」

「そっついや お前紙コップ持ってたよな・・・」

「迷子センターのおじさんにもらったんだけど・・・」

「・・・酒 飲まれた？もしかしてそれで氣イ失ったお前をどっかつれてくつもりだったとか・・・」

「かつ考えすぎ！自分が飲んでたの間違えて渡しちゃったんじゃないかい!?」

大きな声を出すと頭がガンガン痛む。

「・・・起きなくていいよ」

飛鳥がそういつと頬にあたたたかいものが触れる。

次の瞬間視界が横に傾いた。

頬から

こめかみから

飛鳥の肩のぬくもりを感じる。

うわー！うわああ！！

頭がくらくらしてるのは 恥ずかしさか お酒のせいか・・・

「あ！バナナチョコ！」

「・・・後でもう1回行こうか 祭り。」

「うん！あ・・・そういえば飛鳥ここまで運んでくれたの？」

「あー まあ一応・・・」

「ありがとね！」

「・・・うん」

飛鳥の顔が目の前に来る。

「ちよつ　ここ外・・・」

「誰もいないから・・・」

「や・・・飛鳥　待・・・っ」

「待つてたら日が暮れる」

「・・・ッッッ」

ぎゅっと目をつむると　口があたりたかくなる。

クラ・・・ッ

お酒のせいかな　恥ずかしさのせいかな　わかんない

第42話 お祭り チョコバナナ編

その後しばらく2人で公園にいて喋ってた。

「・・・燐 そろそろ祭り戻るか？」

「・・・んー」

なんだか眠くなってきた目をこすり飛鳥から離れる。

「チョコバナナ食うだろ？」

「うん 飛鳥も食べよ？」

「俺甘いの無理・・・からあげ食う」

お祭りに戻りチョコバナナを買ってもらう。

「美味しい」

「そうやってりゃ可愛いんだけどなあ・・・」

「ん？何があ？」

「いや？知らない男信じるのは問題だなーと思って」

ニヤリと飛鳥がいじわるく笑う。

「だっだって いい人だっと思ってたんだもん！」

「・・・まあ、ついてかなかっただけいーけどさ」

「？ あ、からあげあつたよ！」

「あーうん・・・」

キヨロリと辺りを見ると迷子センターがあつた。

「ホラ あそこに座ってるおじさん！」

さっきのおじさんを指差して飛鳥に言う。

「んー？」

飛鳥は目を細めておじさんを見た。

「ね？ いい感じの人でしょ！？」

「まあ・・・いい人気ではあるな・・・まー外見じゃわかんねえかな」

そついいながら飛鳥は私をおいて迷子センターに行く。

慌ててついていくと飛鳥はおじさんに向かってさつきすぐにたいらげてしまったからあげの紙コップを投げつけた。

「なっなんだ君は！！！」

「燐に酒飲ませてんじゃねーよジジイ」

「ちよつ 飛鳥!？」

「君は・・・」

おじさんが私を見る。

「あ・・・すつすいません!飛鳥 ホラ行こ?」

「悪いのはコイツだろ!?未成年の・・・しかも人の女に!目エ離したスキに酒なんて飲ません!」

「飛鳥・・・」

警察官だつてうろついてる。

もしもこんな光景見られたらどうなるかわからない。

周りの人はじろじろ見てくるし・・・

すでに警察官のところへ行った人がいるかもしれない。

それなのに

普通 あせるべきで 不安になるべきで

それなのに 嬉しいと思ってしまい 口がゆるむ私がここにいた。

「あのジジイムカつく!!」

あの後私がなんとか飛鳥を宥め、あそこからかなり離れた場所で人気もあんまりない通りに連れてきたところで飛鳥が言った。

みんなお祭りに行つてるせいか、少し神社の道筋を離れば人はほとんどいなかった。

「ったくさーこっちは本気で怒つてんのに何も知らねーみたいな顔して・・・ムツカつく!」

「まあまあ飛鳥・・・」

「お前も怒れよ!」

「だって・・・別に私は・・・」

飛鳥が怒つてくれただけでじゅうぶんだったし・・・

「ったく・・・」

ぶつぶつ言いながら飛鳥がうつむく。

「？」

「・・・悪い」

「なんで飛鳥が謝るの？」

顔を覗き込むと飛鳥は顔を真っ赤にした。

「や・・・その・・・なんていうか・・・目離して・・・ゴメン」

「そんな子供じゃないのに 何言ってるの？」

「そうじゃなくて・・・なんでもない」

飛鳥は『はーッ』と大きくため息をついた。

「飛鳥 疲れた？」

「ん、そういうわけじゃないよ」

「あ、これ捨ててくるね」

バナナチヨコをさしてた棒を見ながら言う。

1歩飛鳥から離れると飛鳥の手が目の前に来る。

「ふえ？」

ぐいっとひっぱられる。

飛鳥の腕が首輪のような感じで、私がいくら暴れても離れることはできなかった。

「ちよつ飛鳥！恥ずかしいから！」

「・・・離れんな 人多いんだから」

飛鳥はそう言っただけ息をつく。

「心配性！」

「・・・バカ」

「へ？」

「いいから・・・そばにいろよ 目の届くところにいてくんねえと・・・
なんか不安」

「そんなの・・・」

「さっきみたいに酒飲まされると困るしな」

「・・・っ!!」

そっぴいわれると もう反論できなかった。

「ねえ だったら・・・一緒にごみ捨てに行こうよ」

そう言っただけ離れようとする飛鳥はくすりと笑った。

「人前で恥ずかしい？」

「あつ当たり前でしょ！」

「ふーん 帰り・・・俺の家来てよ」

「へ？なんで？」

「なんとなく 来なよ」

「わ・・・わかったよ・・・」

「いつちばん最近・・・来たのいつだっけ？」

私が飛鳥に背を向けて歩き出すと飛鳥も着いてきた。

「中・・・１の時かなあ？」

さすがに中学生にもなると世間でいう『お年頃』というやつなわけで

男の子の家に女の子が行く・・・なんて やっぱり・・・おかしい
というか 今までとは違う感じになってしまっただ。

冷やかされたりはしたくなかったし 何より飛鳥がもう私達女を部屋に入れたがらなくなってしまうのだった。

「どついつ風の吹き回し？自分から部屋に入れようなんてさ」

「・・・別に 彼女なんだから彼氏の部屋に入るくらい普通かなー

つて。」

・・・そうだった

なんだか 忘れてたものを思い出すような感覚。

忘れちゃだめだね・・・

心の中で苦笑した。

「言つとくけど やらしいことはしないけどね」

「な・・・ツツ 当たり前でしょ！」

「ま、親いないから何してもいいんだけど？」

「バツカじゃないの？」

「あははははっ」

「あははははっ」

こうやって 笑ってればいままでと変わらない。

だけど 変わったものはある。

こうやって2人でお祭りに出かけて

手なんてつないで

キスして……

変わったものは確かに存在した。

それでも 『今まで通り』を望んでしまう。

私は 飛鳥とどうなりたいんだろう？

考えなければなんでもないことを どうしても考えてしまった。

第43話 お祭り 飛鳥の部屋編

正直 緊張してしまってた。

「何じつとしてんの？」

冷たくいわれて はつと我にかえる。

チヨコバナナのごみを捨てた後 そのまま飛鳥の家へ。

家の中に入ると飛鳥のにおいでいっぱい なんだかすぐに緊張してしまった。

だからなんとなく玄関でじっとしてた。

「あ・・・べ 別に・・・」

「緊張でもしてんの？」

「なっ!!」

「別に何もしないよ たぶんね」

たぶん・・・って 何がさ

心の中でぶつぶつ言いながらも靴を脱いで中に入った。

部屋に入ってまた動きを止めた。

「・・・きつたなー!!?」

昔はもう少し片付いていたのに飛鳥の部屋はごっちゃごちゃで汚かった。

漫画が床に散らばり勉強机の上には消しゴムのカスの山もあり・・・

CDやMDもケースに入れずそのまんま。

くしゃくしゃに丸めたティッシュや紙くずなんかも落ちてる。

「あー掃除めんどくて・・・」

「ちよつと・・・まさか掃除しろとか言わないよね?」

「言わねーよ 触られたら困るモンだってあるし」

「じゃあつれてくるな!」

そう言つて笑うと飛鳥もくすくす笑った。

「しっかし・・・ゴミ箱はどこ?」

足元の黒いシミのついたティッシュを見ながら言つ。

「あー・・・それ たぶん昨日コーラこぼしてふいたやつだ。ゴミ箱・・・どこだったかな」

「アンタ・・・そのうち病気になるよ?」

「別に 大丈夫だよ」

部屋の奥にあるベッドにも漫画が散らばってた。

その横にあるタンスも半開きばかり。服がはみ出てるし・・・

「あー お茶とか持ってくるから その辺座って待ってて」

「あ、うん・・・」

ぱたんっ

ドアが閉まる。

・・・座るも何も どこに!?

勉強機の椅子をそつと覗き込むとクッションがあるだけでごみは無い。

すぐにそこに座ってまた部屋を見回す。

不意に勉強機の引き出しを開けると・・・

ガチャッ

「ウーロン茶でいい?」

「・・・・・・・・・・」

「隣?」

飛鳥がいることに気がつかなかった。

そんだけ 驚いた

「お お前！勝手に人の机の中見てんじゃねえ！！！！！」

「え！？あ・・・飛鳥・・・」

引き出しの中はごちゃごちゃで たくさんの物があつた。

はき終わったものかどうかわからないぐしゃぐしゃの下着

小さい頃の写真の山

中学の頃使ったと思われる高校入試の参考書・高校のパンフレット達

「そこには・・・人に見られたくねえもんばっか入ってんだよ・・・」

「

飛鳥が顔を赤らめながら言う。

「へー エッチな本とかはないんだー」

「バツバカ！んなもん興味ねえよ！！！」

「えー？どーだかー」

「べつ別に 女には・・・お前ぐらいしか興味ねえし！」

そついうと飛鳥の顔は真っ赤になった。

「も もついいだろ！ホラ茶！！ウーロン茶しかねえぞ！！」

くすくすと笑うと飛鳥は小さくうなって床へ乱暴に座った。

第44話 気づいてたら気づいてなかったら

それからしばらく飛鳥と喋ってて・・・

不意に勉強机の上にある時計の存在に気づく。

見るともう5時30分強。

「うあ もう帰らなきゃ！」

「え？そんな時間？」

「うん じゃあ私帰るね！」

「待てよ！送るから・・・」

「え？そんなに離れてないんだから平気だってば！」

「・・・そろそろ 暗くなるし・・・危ないだろ」

「えー？」

「だー！素直にはいっていえよ！！別に送りたくて言ってんじゃねえよ！もう少しお前といたいただけだ！！」

そう怒鳴ると飛鳥は耳まで真っ赤になった。

「あ・・・うあ・・・ぐ・・・い 今のは・・・別に・・・」

くすりと笑うと飛鳥はため息をついた。

「じゃあ 送っててもらおうかな」

そついうと飛鳥は満足気に鼻で大きく息を吐く。

ガチャンッ！

ドアを閉めて 鍵も閉めて。

「うゝ結構寒イな」

そう言つて飛鳥は私の手を握る。

「そ？私はこれぐらいのがちょうどいいなー」

「へえ？俺寒い嫌い・・・」

「ふーん 私暑いより寒いほうが好き。だって寒いなら着れば寒くなくなるでしょ？」

「・・・そんなもんかね 夏のが身が軽いけど？」

「ふーん」

向こうのほうから何人かのグループが歩いてくる。

小学校の・・・3年生くらいだろうか？

女の子3人 男の子3人のグループだった。

仲良さげに喋って 楽しそうで・・・

昔の私達みたいで。

お祭り帰りらしく、女の子3人はりんご飴 男の子3人はフランクフルトを食べていた。

「・・・なんか 昔の俺等みてえ」

同じことを考えていたらしく、飛鳥はぼそりとつぶやいた。

「・・・そーだね」

「あの頃は まさか憐とこうなるなんて思ってた」

そういう飛鳥の手に力がこもるのがわかった。

「・・・うん 私も思わなかった」

「ずっと あんなふうにつるんで・・・ずっと一緒にいるもんだとばっか思ってた」

その言い方が なんだか気に入らなくて口をはさむ。

「・・・あのままの方がよかった？私と こうならないほうがよかった？」

返事が 20秒以内に出来なかったら この手を離そう

そう思ったけど 答えは即答だった。

「いいや？こうなってよかったよ」

「・・・ふうん」

「でなきゃ カノンにとられてた」

「・・・」

「こうならなきゃ 燐が俺から離れてった」

「べつ別に 飛鳥とこうならなくてもカノンとは何にもなんないよ
！！」

「・・・まあ、別にこうなったからいんだけどさ どっちでも。」

「・・・・・・」

「それに俺は元々燐のことが好きだったと思う。今のガキ達の年齢
の頃からかもしれない。どんくらいかわからないけど昔から 燐の
ことは好きだったよ」

こんな その辺に人も通りそうな道で 堂々といわれたら・・・

「気づかなかっただけ。いまさら気づいたから・・・戸惑ったけど
どんなに時間がたっててもこうなってたと思うし」

「・・・そっか」

「とにかく！今は俺幸せだからいいんだ！！」

「アハハッ 何それ！」

笑つてるとすぐ家に着いた。

「んじゃ・・・ありがとね」

「ん 明日、学校でな」

「うん！じゃ・・・」

言いかけて口をふさがれた。

「・・・ッ！！」

「じゃあな」

微笑を浮かべて飛鳥が手をふる。

「じ・・・じゃあ・・・」

手をふって すぐに家に入る。

玄関でへなへなと座り込んでしまった。

第45話 お祭り 夢乃達編（夢乃視点）

実は 燐と飛鳥バカップルモード発動の間 みんなの間では亀裂が・・・

「ふっざけんな！……！」

「お おい夢乃・・・」

珍しく夢乃が声を荒げて怒鳴った。

それは ほんの数秒前の克哉の行動のせいだった。

「夢乃！夢乃！りんご飴食べよ……！」

華穂が私を手招きする。

「あー・・・私ぶどうにする。」

「私はりんご飴ー」

ぶどう飴とりんご飴をそれぞれ受け取って舐める。

口の中に濃い甘い味が広がる。

「あー・・・ぶどう飴久しぶり・・・去年はいちご飴だったし・・・」

「夢乃が持つとそういう飴って可愛く見えるよな」

克哉がにつこり微笑んで言う。

「ハイハイ アンタのそういう系の冗談は聞き飽きた」

「冗談じゃねえのになー」

「あーはいはい」

「・・・ホント夢乃って体で教えないとわかんないよなー」

「は？」

頭を力強くつかまれる。

と すぐに目の前が真っ暗になった。

唇にあたったもの 目の前には目をつむる克哉の顔

しばらくして唇から「それ」が離れる。

「な・・・な・・・っ」

「こんぐらいすればわかってくれる？」

バシンッ！！！！！！！！！！

騒がしいお祭りの人ごみの中 私が克哉の頬を思い切りたたたく音が響いた。

「いつてええ・・・」

「なっ何すんのよ！！！」

克哉が赤い自分の頬をなでる。

「何・・・って キス」

「そういう意味じゃない！！なんでこういうことするかなあ！？ア
ンタは！！ホント！！」

「好きな奴にキスしちやいけねんだ？初めて聞いた」

「ツツ 女なら誰でもいいくせに！！女好きの最低男！！」

「誰でもじゃねえ！お前が全然俺のこと見ねえからしょうがなく他
の女の相手してただけだ！女好きでもねえ！！最低はどっちだ！！
この鈍感女！！！！！」

「ふっざけんな！！！！！！！！！！」

「お おい夢乃・・・」

要があせって私の右肩をつかむ。

「アンタなんて・・・大イイツツツ嫌い!!!!!!!!!!!!!!」

第46話 夢乃と克哉

昨日は飛鳥とお祭りで楽しかったし!!

あゝ！なんてすばらしい!!!（ゲンキン）

「おっはよー!!」

我ながらかなり上機嫌で教室のドアを開けた。

・・・のに

シイイイン・・・・・・・・

「・・・・はりやああ？」

思わずマヌケな声をあげた。

なんで　なんでみんなこんな重い空気・・・？

見ると夢乃がかなり不機嫌な顔で席に座ってる。

「ゆ・・・・めの？」

「・・・・ああ・・・・隣　おはよう・・・・昨日は楽しかった？」

「うん!!！すごく楽しかったあ」

「そ・・・・よかったね・・・・」

「・・・夢乃？何かあったの？」

「・・・うん あった。私のきつとこれからも含めて人生最大最低の出来事が・・・」

「へ？」

「おい夢乃・・・克哉も悪気があったんじゃないやねえだろうしさあ・・・」

要があきれた声で夢乃に言う。

「要！夢乃、何があったの！？」

要はチラリと夢乃を見てから私のほうを見た。

「それが・・・克哉が夢乃に・・・キス したんだよ」

その言葉を待つてましたとばかりに教室にいた人達が騒ぎ出した。

「マジで！？克哉やるなあぁ！！！！」

「うつそ！！！！夢乃かわいそ・・・」

同情？期待？からかい？

いや、全部だよね・・・

どうであれ人事でみんな高みの見物気分だ。

「・・・で？克哉は？」

「知らねえ　まだ来てないみたいだけど・・・」

「あんのくそ男・・・来たら窓から落としてやる・・・」

夢乃　ここ　4階だよ・・・？

夢乃がここまで怒ってるのは初めて見た・・・かしんないなあ

今まで女の子　男の子　どちらにからかわれても平然としてた夢乃が・・・

よおっぽど　克哉にキスされたのがいやだったんだろうなあ・・・

「おはよ」

何事もないように

今までと変わらず笑顔で克哉は教室へ入った。

もちろんみんな挨拶の返事はせずしんとしてる。

夢乃はため息をついて克哉を睨みつける。

わー・・・こわあ・・・

「なんだよーみんな俺のこと無視ー？おはよー夢乃」

「・・・・・・・・」

夢乃は返事をせず席を立つ。

「おい夢乃 どこ行くんだよ？」

「・・・アンタのいないところよ」

また夢乃は克哉を睨んで教室を出ようとする。

「えー？なんで？なんで？」

「アンタのいる場所になんていたくない 同じ部屋の空気吸ってると思うだけで嫌」

夢乃はよく通るいつもと変わらない声でペラペラ喋る。

自分のいいたいことだけ吐き出すように。

「なんでだよーひどくないか？」

「ひどいのはどっちよー！」

夢乃は少し怒鳴って教室を出た。

夢乃のいないしんと静まり返った教室の中を見て克哉はため息をついた。

「なーをあそこまで怒ってるのかなあ・・・」

「アンタがしたことが許せなかったんでしょ？」

私が言うと克哉は少しうなる。

「うー・・・けどさ 好きだったらしたくなんない？ 燐と飛鳥だつてキスぐらいしてんだろ？」

飛鳥の顔がぼつといっきに赤くなる。

「お・・・前！何聞く！！」

「ホラしてんじゃん 好きならしたくなるよ」

「向こうは好きじゃないんだよ？それでもしていいと思う？」

一人で焦ってる飛鳥はかまわず克哉に言う。

「・・・別に アイツがいつまでも俺のことごまかすからだよ」

「は？」

「昔っから！俺が好きだとかいうとアイツは冗談だとかふざけんなだとか言う！！本気なのにずっとそうだ！だったらどうやって信じてもらえってんだ！！」

克哉が声を荒げる。

思わず1歩克哉から離れた。

「そっそれでも！無理やり感情を押し付けるようなことすることな

いでしょ!？」

「ツツだったら!?!どうすればよかったんだ!?!? 言えよ! ホラ!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ツツ」

いえるわけない

そんなの わかんない

だって知らないもん そんなの

恋愛に関してなんて 全然わかんないのに

そんな 自分のことでもないのに・・・

いえるわけない

「ツ いえないだろ!?! だったら偉そうなこと言ってんじゃねえよ!」

「・・・・・・・・ツツ」

「いい加減なこと言わないでくれ! 俺だって・・・色々考えてたんだから! 余計なお世話だ!?! 黙ってる!?!」

「本気で言ってる?」

「は?」

「余計なお世話 黙ってる それ本気で言ってる?」

思い切り 目に力を入れて

少しでも克哉を困らせるように睨む。

どうしても克哉を見上げることになるから・・・そりゃ迫力ないかもしれないけど

「・・・本気で言ってるけど? だから? なんだよ」

「だったら アンタのことなんてもう知らない!」

そう言って私は教室を出た。

後ろから誰かついてくる。

振り返ると飛鳥がいた。

「・・・なんでついてくるの?」

「ああいう言い方ないんじゃないの?」

「・・・だって」

「アイツだって色々考えたんだしさー」

「だって 夢乃傷つけた」

あんな夢乃は初めて見た

それなのに悪いことしたなんて思っ
てなくて

それが克哉で

いろんなことを考えて・・・

「・・・夢乃 泣く」

夢乃は人前で泣いたことがない

夢乃は 人前で泣くことができない

だけどあれは泣きそうな顔してた

教室に出る前の夢乃

だから・・・教室から出たんだ

きつと 今泣いてる

「夢乃・・・」

「・・・なんでお前が泣くの」

飛鳥が私の頭を撫でる。

目から涙が流れる。

「だ・・・って・・・」

「お前が泣くことじゃない お前の問題じゃないよ？夢乃と克哉がどうにかしなきゃいけない問題なんだよ。お前は何も言っちゃいけない」

何も言っちゃいけない

本当に？

私は 何もしちゃいけないの？

夢乃と克哉はずっと一緒に

仲が良かった

そんな私でも 何も言っちゃいけないことなの？

第47話 バラバラ

教室に戻ると克哉が要を喋ってた。

「・・・新一ってさ 夢乃達のこと一言も言わねえよな 昨日もボ
ーッと見てただけで・・・」

要が少しイラついた様子でいう。

「・・・別に」

なんで要が急にそんなことを言うのか一瞬不思議に思ったけど・・・

やっぱり 要も私と同じ。

何か 私達がしなきゃと思ってしまうんだ。

ずっと一緒にいるから

お互いのことが わかっているから

わかってる私達がどうにかしなきゃいけないと思う。

それなのに 同じ条件の中 新一が黙ってるのは確かに気になる。

「・・・なんで俺等がいちいち言わなきゃいけないの？」

そういえば 飛鳥は私と考えが違ってた。

やっぱり 人間というものが複数いれば 考えが違ってくるものなのかな？

「なんでって・・・アイツ等2人が暗かったら俺達だって・・・」

「んなこと言うのはいいけどさ 仲良しこよしすんのも勝手だよ。だけどさ それがなんになるわけ？いつまでも・・・もうそろそろ離れていんじゃないの？」

その言葉に 衝撃を受けたのは私だけだろうか？

「どうせ人間なんてバラバラにうまれて 偶然接点が生まれて 結局バラバラに死んでくんだよ。そろそろバラバラになる準備したっていいんじゃないの？」

新一の言ってる意味が わかるけどわかりたくなかった。

何がしたいのか わかってしまうこの頭を憎んでしまう。

「お前・・・何言い出すんだよ！」

「燐と飛鳥がいいきっかけだよ！どんなに仲良くしてたって所詮男女なんだよ。そういうのもそろそろ考えるべきだと思うね」

私と飛鳥が付き合い始めたことで 確かに始まった。

私達の関係が 崩れていく準備が。

あのままずっと みんな仲良しで

男女 関係なくて

あのままでしたら・・・どうなった？

周りを寄せ付けず『わたしたち』というグループですっと通してきて・・・

将来離れ離れになって どうするの？

男嫌いで冷静沈着 他人の意見を聞かない夢乃は？

結婚はきつとできない 他人から見れば感じ悪いひと きつと職場で嫌われる。

そんな夢乃でもいいところはいっぱいあって

それは たくさん私達は知ってて

それでも知ってるのはあくまで『私達』というグループの中で

その外にいったら？

考えたくもなかった。

だからこれまで考えなかった

「・・・別に夢乃と克哉は・・・ほっときゃいいんじゃないの?」

新一がボソリとつぶやいた。

「・・・」

要はため息をついた。

第48話 静かな教室 崩壊

カチ・・・カチ・・・

授業になり 席に座る。

ボーッとしながら無意味にシャーペンを押し続ける。

芯が少しずつ出て 数センチ出て止まる。

止まるとため息をつく。

先生が数学の問題を黒板に書き続ける。

クラス中がしんと静まり返っていた。

先生 なんとも思わないの？

夢乃は戻ってきたけど不機嫌で

克哉も不機嫌。

要はよくため息をつく。

他のみんなは普段通り・・・じゃなくて 静か。

別に特に異変はないけど・・・誰も一言も喋らないとなると気味が悪い。

飛鳥も平然としてて、普通に授業受けてる。

ため息もつかない。

なんだかそれが 無神経・・・とは違うな

なんだか 無関心に見えてしまつて寂しくなる。

今まで私達が一緒にいたのはどうしてだろう？

どうしようもないことを考える。

新一の言葉を思い出す。

新一は 本気でそう思つてるのだろうか

それは いつ思ったことなのだろうか

私達と遊んでて 一緒にいて 笑いあつてて

そうしてる間も新一は1人で考えていたのだろうか？

『離れる準備をいつかしなければいけない』

『ずっと一緒にいてもしょうがない』

そう 考えてたのだろうか？

そう思うと寂しくて 涙が出そうになった。

結局 私の独りよがり？

休み時間 誰も教室内で騒がなかった。

他のクラス 廊下で騒ぐ人はいたけど。

夢乃はむすーっと不機嫌な顔をして座ってた。

克哉は鼻歌を歌って ずっと一人で座ってる。

まるで わざと夢乃のそばにいるように。

要や新一はボーッと空を眺めてる。

奈央 明美 華穂は静かにしてるのが性に合わないといいながら廊下へ出て行ってしまった。

夢乃と克哉についてはなんとも言わない。

「ね・・・飛鳥」

飛鳥の服のはしっこをひっぱる。

「んー？」

「なんかやだ・・・」

「・・・あー」

「みんな静か 無関心 他人事」

思い浮かぶ単語を並べると飛鳥も教室内を見回す。

「まあ・・・黙って終わるのを待とう？」

「・・・本当に 私達は何もしちゃいけないの？」

「ん？」

「だって・・・ずっと一緒にいて・・・」

「一緒にいても 結局は他人で・・・こういつたら冷たく聞こえるかもしれないけど、違う人間なんだよ。1人で色々考えたい 他人に何も口出しされたくない あるだろ？そんなこと」

「・・・うん」

確かにある。

そうになると 夢乃達の言葉をウザったく感じてしまって つい八つ当たりする。

「そういう状況だと思うよ。あの2人は。克哉なんかは元々男限定に短気だから・・・あんまりかわらないほうがいいかも。」

飛鳥の言ってることは正しいのだろうか

どうしても　すべてを否定的に見てしまう。

何が正しいのか　わからない。

ずっと　みんな同じ気持ちだと信じていたのに

急にそれがすべて壊れてしまった気がした。

第49話 ゴチャゴチャ

飛鳥達はほっとけっていうし・・・

夢乃と克哉には関わらないよう、休み時間のたびに私は明美達と廊下へ出た。

そのままずっと そのまま 本当にそのまま同じように時間は流れていった。

静まり返った教室

不機嫌な人

関わらないようにと近寄らない人

何も気づかない様子の先生

放課後になると私はすぐに飛鳥のところへ行く。

「飛鳥~~~~~」

飛鳥はくすくすと笑って私の頭を撫でる。

「ハイハイ 帰ろうか」

「うん~~~~」

「だから！なんでお前が泣きそうになんだよ」

荷物を背負って飛鳥がまた笑う。

「だって・・・みんな静かで変　ずっとこのままなの？やだ・・・」

「このまま・・・ってことはないだろ。さすがに・・・まあ、今は黙ってた方がいいよ」

「本当に？そうなの？」

「うん　ホラ燐　帰ろ？」

頷いて教室を出る飛鳥についていく。

階段を降りると途中で囲まれる。

クラスの人たち・・・というより　同じ学年の人？

「ねえ！！夢乃達がいたから聞けなかったんだけどさー！！」

えーと・・・横山さん・・・だっけ？が言う。

「2人ってつきあってたの！！？」

「へ？」

「はあ？」

私と飛鳥は同時にまぬけな声をあげて顔を見合わせる。

つきあってる・・・んだよねえ　まあ・・・

けどなんか・・・こんなみんながいるところでは言いにくいって
うか・・・

「そうなのか！？飛鳥！！」

「お前等一緒にいるし！そーいや祭りいなかったか？」

うつわ・・・ウザ・・・

私がため息をついてさっさと行こうとすると腕をつかまれる。

「へ？」

ふりむいた瞬間　唇に飛鳥の唇が触れる。

「な・・・っ！？」

唇が離れて　私はビックリして目を丸くした。

「ま、そーゆーことで　燐に手エ出すなよ野郎共」

飛鳥はそう言っただけでこりと微笑んで私の手を握る。

「え・・・ちょ・・・飛鳥！？」

「いいか！！燐に手出すとかしたらツブス！！！！！！！！」

飛鳥はもう一度言っただけで階段を下りる。

「え・・・飛鳥！ちょ・・・待・・・っ！！」

「・・・」

飛鳥は私の手を握ったまま階段を下りる。

1階に着くと手を離す。

顔を見ると飛鳥は満足気に笑ってた。

「・・・飛鳥　なんでああいうことするの？恥ずかしかったあ・・・」

「だって　ハッキリさせないと中途半端な奴等が集まるだろ？」

「どういう意味？」

「お前に俺以外の悪い虫がつくってこと！」

「????」

「自覚ないけど　お前何気にモテんだからな！！そこんとこ気をつけろよ！」

「モテる？私が？夢乃じゃなくて？」

「あー・・・まあ、夢乃もそうだけど！お前だって可愛いんだからな！」

「えゝ？何それえゝ」

「ハイハイ・・・自覚ないってのは知ってるよ・・・」

飛鳥はあきれたようにため息をついた。

下駄箱を開けて靴を出す。

「あーあ・・・本当 夢乃とかどうなっちゃうんだろ・・・」

「だから 今はほっとけつてば！」

「そりゃ・・・けどさあああ・・・」

胸の奥からじわじわと浮き出てくる感情

『どうにかしたい』

『何かしてあげたい』

そんな風に思ってしまう

やっぱりずっと一緒にいたんだし・・・

でも それは表向きだけで？

結局はバラバラで？

でも心配で？

頭の中がいまいち整理できてなかった。

「もう・・・ホント 色々ごちゃごちゃ・・・」

たくさんのが いつきに起こりすぎてた。

だって ずっと 小さい頃から一緒に

当たり前で

これからもそうだと 信じていたのに

急なカノン 飛鳥からの告白

カノンと飛鳥関係のごちゃごちゃ

夢乃と克哉

新一の発言

たくさんのが起こりすぎてた。

「今日は早く寝ろよ。な？」

飛鳥が私の頭を撫でる。

飛鳥の手のぬくもりが頭からじんわりと広がる。

「・・・ん」

私はそう言って小さく頷いた。

第49話 ゴチャゴチャ（後書き）

祝50ページ目！ということで（関係ないか）

私の年齢教えちゃいます・・・別に知りたくないよーとか言わないで下さい！！

中学1年生です・・・（ボソリ

ガキかよ！中坊かよ！とか言われると思いいえませんでした

というわけで・・・これからよろしくお願いします！

第50話 文化祭 白雪姫の配役

「そういえば、今月の最後に文化祭をしている」

「ええええええええええええええええええええええええ！！！！！！！！！！」

しんとした朝の教室に響き渡った　　なんだかかなり懐かしい騒がしい声。

「うちの学校は1年に2度文化祭をしていることになっていて、1度目は各クラスごとに劇や合唱　合奏の出し物をするんだ」

ふーん めんどくさー・・・

「で、今日は何がいいかみんなで話し合ってください！評議委員は前に出てきて進めてくれ」

委員の人が前に出てぺらぺら喋り始めたけどどうでもよかった。

だって先生、それどころじゃないよ？

少しは気づいてよ……うちのクラスの異変にさあ……

そんなことを考えてる間に多数決で劇に決まってしまうていた。

「じゃあ……劇はどうしますか？何をしますか」

「ハイ！やっぱ定番のかぐや姫とかシンデレラで！！」

「あ、白雪姫とかもいいよねー」

「あ、白雪姫いいね！森とか・・・いいねいいね！！！！」

みんな白雪姫でわっと盛り上がる。

今頃白雪姫か・・・小学生みたい・・・

心の中でため息をつく。

「じゃあ・・・白雪姫で決定します　いいですか？意見のある人は？」

誰も何も言わないため白雪姫で決定。

「じゃあ・・・王子様　白雪姫　小人等を決めます。まず・・・王子様と白雪姫　立候補者は？」

もちろんいない。

さすがにそんな恥ずかしい役を自らみんなの前で『やる！』なんていう人はいない。

よっぽどの目立ちたがり屋。

みんなこれがいいあれがいいといいながらもいざ自分がするとなると拒否するものだ。

「じゃあ推薦は？」

「ハイ！白雪姫は桜塚夢乃さんで！王子様は沖野克哉君がいいと思います！」

その意見にため息をつく人

からかいの言葉を放つ人

くすくすと笑う人

「いいじゃん 美男美女ー」

誰かがそんなことを言う。

「っていうかアイツ等本当にお姫様と王子様の関係じゃん 本当にくつついちゃえよ」

「あ、そうだ！白雪姫と王子様でキスシーンいれようぜ！本当にしちゃうやつー！」

「いいねそれー！」

ぎやはははと下品に笑うバカな男子共。

イラつく・・・

夢乃もかなり不機嫌。

克哉はボーツと窓の外を眺めてる。

本人達は無関心　って感じた。

「なあ！桜塚！いいだろ！？キスくらい！！」

その言葉に夢乃が男子を睨みつける。

「な・・・なんだよ　こわいかおすんなよ」

「アンタ達　ふざけてんじゃないわよ？いい加減にしてよね・・・」

「ふざけてねーよ！お前等がいつまでもぐだぐだしてるから・・・」

「うるせえな！！！」

克哉が怒鳴る。

「お前等おとなしくしてろよ　夢乃泣かせたらテメエ等全員血祭りだ」

その言葉に男子はしんと静かになる。

くすくす笑ってた女子も静かになった。

「・・・言っとくけど　俺王子様なんてしねえから。夢乃が姫さんのは勝手だけど　俺は誰があいてでも王子はしねえ！！」

克哉はそう言って乱暴に椅子に腰掛けた。

委員はおどおどせずに話を続ける。

「では・・・他に推薦者は？」

「ハイ！白雪姫で・・・春日部さんがいいと思います」

「え？私？」

縁のない話だと思って聞き逃すところだった。

確かに今 春日部といった。

「隣かーいいよね！可愛いし！！お姫様って感じ！」

「相手は・・・飛鳥だよなあ やっぱり。」

「え？私・・・お姫様なんて・・・」

「他の推薦者がいないのなら春日部さんで決まりますけど？」

「異議なし！！！」

クラスの半分以上が言ったため委員は黒板に私の名前を書く。

こうなったら・・・やりたくないなんていえないじゃないか

飛鳥が王子様ならいいけど・・・

と思うともわもわと空想の世界が広がる。

そういえば最後に結婚するんだっけ あの人・・・

ってことは劇でうそだけど飛鳥と結婚式!!?

したい!劇だとしてもしてみたい!

と 思っていたけど・・・

「じゃあ・・・王子様は島村君がいいと思います!」

「えー、けど飛鳥じゃはまりすぎてなんかなあ・・・」

「だって 隣ちゃんときあってんだろ?あいつ・・・」

「本人でもつまんねえよなあ」

夢乃と克哉の時とえらく態度が違うな・・・

「な・・・っけど俺・・・」

飛鳥が何か言おうとしてある女子が声をさえぎる。

「ハイ 王子様役・・・カノン君がいいと思います」

「・・・美緒ちゃん」

カノンの名前を出したのは美緒ちゃんだった。

前に 飛鳥のラブレターを出した女の子。

「な・・・竹中!？」

飛鳥が言つと美緒ちゃんは無言で席に着く。

「俺やりたいなー」

カノンが言つ。

「カノン君いいかも!カッコイイし・・・王子様って感じ!」

「うんうん いいね!」

「え・・・おい ちょっと待てよ・・・」

飛鳥がうるたえるがみんな気にしない。

「じゃあ・・・王子はカノン君でいいと思う人!」

ほぼ全員が手をあげた。

「じゃあ・・・王子はカノン君で・・・」

「な・・・ふざけんなよ・・・ッ」

飛鳥が言つが話はどんどん進んでいつてしまった。

うそ・・・

よりによつてカノン!?

やだ・・・なんか・・・やだ・・・

「おい　ちよつと待てよ!!」

飛鳥がついにきれた。

「ふざけんなよ!!俺以外の男が燐の相手役なんて・・・冗談じゃねえ!!!!」

「おい飛鳥ーやめろよー」

「カノンが王子なら燐　姫やめろよ!!姫を燐がやるなら俺が王子する!!!!!!」

「もう多数決で決まっちゃったじゃんかよー飛鳥ー」

「島村君　うるさい」

「~~~~~つつ」

飛鳥は怒りがおさまらないらしくぷるぷると震えていた。

「飛鳥！」

私が名前を呼ぶと飛鳥が振りむく。

「大丈夫だよ 心配しなくても・・・なんにもないから。」

「・・・けど 隣・・・」

「いいから 黙ってよ？」

につこり笑って言うと言つと飛鳥はぼりぼりと頭をかいて目をそらす。

「・・・騒いで すいませんでした」

ボソリとそう言って飛鳥は静かになった。

それからしばらく飛鳥はむすーつと不機嫌そうな顔をしてた。

第51話 白雪姫の配役2

結局配役は・・・

白雪姫 燐

王子様 カノン

継母（妃） 要（女顔のためウケ狙い女装）

獵師 新一

小人^{ドワーフ} 夢乃 華穂 その他クラスの小さい女子男子5人

白雪姫母 明美

家来 克哉 奈央（ウケ狙い男装） クラスの男子2名

鏡（声のみ） 竹中美緒

馬など動物 クラスの数名男子

小道具 衣装 残りのクラス女子

大道具等 残りのクラスの男子（飛鳥）

脚本・監督 先生と委員

「男装とか女装とか・・・お約束だよね」

「いいじゃん！おもしれー！」

「奈央ちゃんとか・・・いいの？」

クラスの女子が言う。

「えー？別に？私は平気だよ？」

そりゃ・・・奈央 私服も男前だしね・・・

それよりも 要だよ要！！継母・・・ってフリフリドレス！？

「要ヤッベー！！どうすんだよ？」

「まー要って女顔だし・・・意外とアリ？」

「ふっ お前等俺の女装はやばいぜ？惚れんなよ」

・・・要 その自信、むなしくはないですか？

「白雪姫って・・・残酷版と童話版とあるけど どっちにする？」

委員が口を開く。

「あー、本当はこわいグリム童話・・・みたいな小学生の頃読んだっけな」

「あれだろ？肝臓だとか胸紐だとかだろ？」

「あーあつたあつた！！」

「童話って意外と残酷なんだよね・・・」

「あれ 最後の妃が踊り狂うってやつはおもしろそうだなー！」

「あー、表向きハッピーエンドなのに後ろでくるくる踊ってるとかよくねえか？」

あーあー・・・人事だと思って・・・。

「隣ー がんばろうな」

カノンがご機嫌でこっちに話しかける。

・・・別に もう友好的にする必要ないんだよね

だってひどいことしてきたし 私は飛鳥とつきあってるんだし・・・

「・・・別に アンタと一緒にじゃやる気でない」

「えー？冷たくないかー？そういえば王子と白雪姫はキスシーンあるんだっけー？楽しみだなー！そういえば放課後練習とかあんのか

な？」

ドンッ！！！！

私の机をいつの間にかこちらに来た飛鳥がたたく。

「テメエ・・・燐に必要以上近寄んな キスも演技だ！寸止めだ！」

「えー？別に1回しちゃったしよくない？」

「テメエ・・・！！」

「飛鳥！！」

私が慌てて止めると2人は今にも殴りそうな体制はやめたけどにらみ合ったままだった。

「あのな 燐は俺の彼女なんだよ！奪おうたって無理だからな！」

「あつそ 大口たたいてるわりに余裕ないよねー」

「な・・・ッテメエ いい加減にしろよ！！おい委員！！俺とカノン入れ替わらせろ！！」

「委員さーん 入れ替えなくていいよ 俺王子やりたーい」

カノンもカノンで・・・ふざけてるし・・・

なんか ム力つくなあ・・・

私は一人で小さくため息をつく。

「じゃあ・・・春日部さん　２人のうちどっちとしたい？」

「え・・・えーと・・・」

そりゃ　飛鳥・・・っていうべきだよな？

けど　さっきから感じてんだよね・・・

女の子達の視線

あはははは　そっかあ　カノンって女子に人気あるんだっけ？（し
かも気の強い子ばっか

そうだよねえゝあゝそっかー

だったらカノンが王子するの反対意見言えいいのにー

頭の中でふざけたように色々考えるけど無駄。

どうしよう・・・かなあ・・・

「おい燐！何悩んでんだよ！！」

「えー？燐 俺のほうがやる気あるし顔いいし演技力あるよー？」

そりゃ・・・確かに・・・

ぱつと見た感じ 『王子様』って感じはカノン・・・

けど 私、飛鳥以外の男の子と恋人やっていいのかなあ？

「えつと・・・うん・・・」

「燐！？」

「えつとお・・・カノンってあんまり器用じゃないから・・・大道具無理そうだし・・・」

「はあ！？」

「やつぱ・・・カノンのが雰囲気あっていいかも？」

私にこーと笑って言うともみんなが頷いた。

「じゃあやつぱりカノン君で・・・」

「お おい待てよ！！燐！！なんなんだよお前！はあ！？俺よりカノンのがいいってのかよ！！」

「誰もそんなこと言ってないよ！ただ！カノンのが王子様って感じがするって話なの！！」

「はああ！？テメエ俺以外の男と恋人同士でいいってのか！ふざけんよ！！」

「うつさいなー！だったらアンタ女装して白雪しなさいよ！！」

「無理だ！！いいから俺を王子に推薦しろよ！！」

「い・や・だー！わがまま！」

「ふざけんな！！テメエ俺のこと好きなんじゃねえのかよ！！！」

「好きだけどそれとこれとは別でしょお！！？」

「別なもんか！！テメエ別れんぞ！！」

別れる！？

ふっざけてる・・・

そんな簡単に口走れる言葉！？

その程度なわけ！？

すっごい腹立ってきた・・・

「ああ別れてやるわよ！！こんなぐちぐち言う男私だって限界だね！！束縛しすぎ！自意識過剰！！自己中！！」

「な・・・本気で別れんぞ！」

「ええ別れてやるけど？ハイさようならああ！！」

「ムツカつく・・・絶対俺は謝らねえ！！」

「あつそ 謝らなきゃいいわよ！！！！」

ムツカつく・・・！！

私達のやりとりをみんな口を開けてみてた。

克哉たちはあきれたようにため息をついていて カノンはここにこ
と笑ってた。

第52話 白雪姫3

「じゃあ・・・春日部とカノンは放課後残って打ち合わせするか！」

先生が立ち上がって急に仕切り始める。

あーあ・・・とめに入ってよね・・・

飛鳥は心底不機嫌な顔をしている。

けど 飛鳥が悪いよ!!

劇なんだから・・・演技なんだからさ・・・

放課後になると飛鳥はさっさと教室から出て行ってしまった。

何さ あれ!!

私は悪くないもんね!!

結局先生と委員 カノンとの4人で大体の流れや衣装等の打ち合わせをして帰る。

「隣ー 俺送ってくよ」

カノンがにこにこしながら言う。

「結構 アンタと帰ったって不審者に会ってるのと変わらないしー」
につこりと愛想笑いを浮かべるとカノンはため息をついた。

下駄箱に行くで見慣れた人影。

「・・・なんで いんのさ 帰ったんじゃないの？」

思い切り動揺しながら言うと飛鳥は視線をそらす。

「・・・お前 ホント白雪姫・・・やめろよ」

「はあ？」

「夢乃がさ、かわってもいいって言ってた。かわれよ」

「やだよ なんでいまさら？ 第一なんで飛鳥が言うわけ？ 関係ないじゃん」

「関係あるだろ！」

「・・・なんなのさ」

態度でかくて 『別れる』 あんて軽々しく口に出して

今度はなんなわけ？

私にどうしろと？

「・・・頼むから やめてくれよ」

「意味わかんない 理由は？」

「・・・お前が他の男といるとこ見たくない」

わがまま

すぐにその言葉が浮かんた。

「・・・飛鳥 わがままだよね」

「え？」

「なんなの？あーだこーだ・・・うるさい 彼氏だったら彼女の全部を縛っていいんだ？私は他の男の子といちゃいけないんだ？おかしくない？それって」

飛鳥のことは好きだ。

だけど だから他の男の子とは喋らないとか

そっいうのはおかしいと思う。

「演技だよ？劇だよ？それでもだめなの？私がカノンとつきあうとでも思うわけ？そんなことあるわけないじゃん！」

「わ・・・わかってるけど！！」

「わかってるならなんなわけ？」

「とにかく！夢乃と変われ！！」

「やだ！！飛鳥のわがままをなんで聞かなきゃいけないの！？私は飛鳥とよりカノンとしたいよ！！」

飛鳥としたって こういう風にあーだこーだ言われるんなら にご笑ってるカノンのほうがいい。

カノンのことは嫌い 正直こわい。

だけど あーだこーだ言われるよりはずっとマシ。

にこにこ愛想笑い浮かべてる人のほうが ずっとずっといい。

私は飛鳥の横はさっさと通り過ぎて、1人で帰った。

寒い

冷えた手はとても冷たくて 震えてきた。

後ろを見ても飛鳥はいない。

この寒さの中 1人で静かな下駄箱で待つてくれた

やさしい

だけど いちいち口出しするのはおかしいよ

はーっと冷えた手に息を吹きかけた。

第53話 白雪姫4

家に帰って着替えて 私はすぐに夢乃の家に行った。

「夢乃おおおお〜」

「・・・私に泣きつかれても困る」

そっついながらも自分の部屋に私を入れる夢乃は大好き・・・

「だってさ！ひどいと思わない！？」

一通り説明すると夢乃はあきたようにため息をつく。

「まったく バカップルほど冷めるのが早いってのはホントだね」

「バカップルじゃないもん！！」

「まあいいけど・・・それはアンタが間違ってるでしょ・・・」

「なんで！？私悪くないもん！！」

「普通彼氏以外の子を選ぶ？あれは私もあれ？って思ったよ・・・」

う・・・

「だって！カノンのが王子様じゃない！？」

「そりゃそうかもしれないけど 飛鳥でもいーじゃん別に。」

「うう・・・」

「私が飛鳥でもさすがに怒るね」

「いじわるくやさしくない」

「同情するだけが友達じゃないでしょ？」

夢乃はにっこりと微笑む。

それでも・・・同情の一言は欲しいんですよ奥さん・・・

「ホラ メールでもして謝っちゃいなよ。ごめんなさいって。それでホラ 仲直り！」

夢乃が私の携帯をつかんで私に握らせる。

そりゃあ・・・

私が一言ごめんなさいって謝っちゃえば

きっと飛鳥は笑って許してくれる。

いっつもそうだったもん。

でっでもさ！！

「でも！別れるとか言うのはどうかと思わない！？」

「そりゃあ・・・まあ・・・」

「ホラね!!」

「でも 燐がしたことがショック度は高いね」

「・・・・・・・・」

「ホラ!!見栄張ってないで!謝りな!!」

「・・・ハアイ」

「んじゃ帰れ ホレ!!」

夢乃はそう言って私を追い出す。

「う・・・バイバイ・・・」

「ハイ バイバイ!」

「・・・・・・・・」

とぼとぼと家へと向かう。

謝っちゃおうかな・・・やっぱし・・・

けど あんな偉そうなこと言っというて今日のうちに謝っちゃおう?

それは・・・なんか悔しいっていうか・・・・・・・・

けどこのままケンカもいやだし・・・

「もお 飛鳥のバカ！！！」

「誰がバカだ ちび！！！」

「！！！！」

後ろからの声にふりむくと飛鳥。

「なななな・・・なんっなんっ なんで・・・いんの！？」

動揺丸出しの声。

「文房具屋行ってたんだよ 悪イか」

「わ・・・悪くはないけど・・・」

「・・・んじゃ」

「ちよっ待って！！」

やっぱ謝ろ！！

なんかやっぱ飛鳥怒ってるっばいし！！

慌てて飛鳥の腕をつかむと飛鳥は私を見下ろす。

「・・・何」

「あ・・・あのね!! 今日・・・」

「さっさと言えよ なんなわけ？」

そんな 冷たい目で見ることはないじゃん・・・

せっかく謝ろうとしてんのに!!

「別に!! なんでもない!!」

フンツとそっぽを向いて走り出す。

しばらく走って後ろを見たけど飛鳥はいなかった。

「・・・フン 追いかけてくれたっていいじゃんか」

ボソツとつぶやいて家に入った。

第54話 白雪姫5

あれから1週間くらいたった

白雪姫の衣装はできてるのとできてないのがあるくらい。

台本はできあがっててもう練習に入ってる。

小道具もそこそこできてるらしい。

大道具も男子が遅くまで残って作ってるみたい。

色々運んだりしてうるうるしてる飛鳥をたまに見かける。

そう あれから1週間

私は飛鳥と一言も口をきいてない。

だって飛鳥 私と目もあわせようとしないんだもん・・・

「なんと美しい娘だろう 死体でもいい」

カノンは台詞をもう全部暗記してるみたいで、ペラペラ喋る。

死体でもいいって 理解できねー・・・

心の中で思わずつぶやく。

で、私が目え覚ますんだっけ？

んで・・・あーそうだ

王子様がキスすんだっけ？

「なあ委員 このキスってホントにするの？」

「あー・・・どうしょっかー」

「まあ、寸止めじゃねえ？」

「けどさー本当にしたらおもしろいよなー!!」

「燐 どっちがいい？」

委員が私に言う。

その瞬間飛鳥と目が合う。

「・・・別に どっちでもいい！」

「じゃあ本当にしちゃおっかー？」

みんながあははっと笑う。

「いや、寸止めにしようっよ」

カノンがにこつと笑って言う。

「そりゃそうだよな！」

みんなもまた笑う。

そりゃそうって・・・思ってたでしょ

で、キスして・・・目え覚めて・・・

「白雪姫 愛しています 私と結婚してくれますか？」

「ハイ・・・」

ていうかさ 白雪姫も助けてくれたくらいで王子様好きになるなよ
簡単に恋に落ちすぎなんだってば・・・

「結婚のシーンのドレスは安物だしフリルとかほとんどないけど白い布でそれっぽく作ってるよー！」

衣装係が言う。

「あ・・・うん そっかあ・・・」

「男役の衣装は持つてる奴いたみたいだからそれサイズあうかなあ

「？」

あーあ・・・どうせ結婚式のシーンやるなら飛鳥のほうが・・・

そこまで考えて首をふる。

そんなことないもん！！別に誰だっていいよーだ！！

第55話 白雪姫 最終回

そして 本番前日

「白雪姫・・・愛してます」

「王子様・・・」

台本の手直しとかも入って なかなか忙しい。

ゴンッ!!--!

カノンの頭に王子様の王冠が当たる。

「いつて・・・ッ」

「手がすべった」

棒読みで飛鳥が言う。

「何 やきもちでも妬いてんの?」

「誰が妬くかよ いっそ本当にくつつきやいいだろ」

「な・・・ッ」

何アイツ!!意味わっかんない

本当にやきもち妬いてくれたら嬉しいのに・・・

飛鳥は私^が他の子とくっついてても平気なわけ!?

そして 本番当日

うわーホント 緊張するんだけど!!

白い 本当に安っぽい生地で作られたドレスを着る。

「燐 緊張してない?」

カノンがにこにこしながら言う。

「え?べつ別に?」

「そう?」

カノンはくすくす笑う。

そして 劇が始まった。

「生まれた女の子は白い肌に・・・」

あー緊張する！！あーどうしよう！！！！

バクバクと暴れる心臓

「白雪姫 白雪姫ー！」

女装した要が私を呼ぶ。

うわぁ・・・本当に美少女・・・要　なんで女じゃないわけえ？

「ハイ お母様」

たたたと走り出す。

で、森に行って・・・小人に会って・・・

どんどん物語は進んでく。

そして　毒林檎を食べて倒れた白雪姫

王子様

目をつむってるから顔は見えない。

ナレーション役が言う

「王子は家来に姫を運ばせました。すると途中、家来がつまづいて

しまい その時姫の口から林檎が出てきました」

目を開ける。

ずっと目つむってたから視界がぼやけてる。

ん？

あれ？カノンってあんな髪型だったっけ？

目をこすることもできなくて王子様と手を握り合う。

「白雪姫・・・」

・・・あれ？

この声って・・・

「愛しています 私と結婚してくれますか？」

・・・飛鳥？

「あす・・・んっ」

飛鳥 と思わず言おうとする口をふさがれた。

で 混乱する頭のまま舞台裏に運ばれてドレスに着替えさせられる。

結婚式の場面

作り物の教会　安いドレス　これだけは本物のタキシード

顔を見るとやっぱり飛鳥。

なんで飛鳥？と聞くヒマもない。

「姫　愛しています」

王子様がそう台詞を言って　またキス。

「・・・・・・・・・・」

いや、本当にキスしてるし・・・

それよりも　何が気になるって・・・

チラリと後ろを見るとそこには踊りまくってる要。

やばい・・・笑う・・・ッ

「・・・ツツツ！！」

本当に笑いそうになると幕が下りた。

「~~~~っ」

口を押さえて座り込む。

「燐？」

飛鳥もしかんで私の背中に手をおく。

「ってゆーか　なんで飛鳥！？カノンは！？本当にキスすんな！恥ずッ！」

「え？あー　アハハッ　カノンと入れ替わっちゃった　いいじゃん　キスしたってさ」

ごまかし笑いの飛鳥の後ろを見るとカノンがにっこりと微笑んで手を振ってる。

アイツ！！？

意味わっかんない！！

第56話 白雪姫 カノン（要視点）

「なんであんなことしたんだ？」

ヅラを取ってタオルで汗をふきながら言う。

制服姿のカノンがこちらを向く。

「お前 燐狙いじゃなかったのか？」

なのに なんで飛鳥を助けるようなまねをしたのか

「・・・別に？」

「は？」

「燐のことは好きだけど・・・彼女にしようとは思わない」

カノンは微笑を浮かべてる。

「はあ？」

「俺以外の男が燐を彼女にするのは気に入らない だけど俺は彼女にしようとは思わない」

「・・・意味わかんねーそれ」

「わかんない？アイツの横に男がいるのなんて似合わないんだよ」

なんだそれ

どんだけ自己中・・・というか わがままというか・・・

とにかく 意味わっかんねえ・・・

カノンはくすくす笑う。

「俺が隣のことで好きってのは人間の女としてじゃねえよ おもちゃとして」

「・・・はああ!!!?」

おもちゃあ？

「アイツで遊ぶの楽しいだろ？」

「お前なあ・・・」

「お気に入りのオモチャを野郎なんかにやりたくねえんだよ」

カノンはそう言うてくすくす笑いながら体育館から出て行った。

・・・アイツ 性格悪イ・・・

頭をがりがりかいて体育館を出るとクラスの野郎達。

「お前女装似合いすぎだよ！！なんでそんな似合うんだよ！！」

「あー？なんだお前等・・・」

「ホント　お前女として生きろ！やばい！似合いすぎだ！！」

「・・・お前　俺にカマになれってのかぁ？」

バカ共が騒ぐ中キョロキョロと辺りを見てカノンを探すがいなかった。

それから少しため息をついてみる。

・・・燐もやつかいなのにつかまったもんだよまったく

第57話 打ち上げ

「アハハハハハッ」

高校生が来ていいの？って感じの居酒屋風のお店。

クラスの男子の家族がしてるお店らしい。

今日はそこを貸しきって打ち上げ……って聞かされて来てみれば

「1番！！竜崎！イッキ行きます！！」

クラスの竜崎君がお酒を飲む。

高校生のくせに……とあきれてため息をつく。

「春日部も飲むか？」

酔っ払った顔でクラスの男子が言う。

「いない……」

ため息まじりに言うと男子は『あっそ』と言ってまた飲みだす。

早死にするぞ……

心の中でつぶやく。

チラッと飛鳥の方を見ると焼き鳥を食べてる飛鳥と目が合う。

手招きしてくるからそちらに行くと言もいた。

「おー燐 白雪姫よかったんじゃねえの？」

要は少し酔ってる様子。

あーあ・・・そついや要って飲んだことあるって言ってたっけ・・・

要 飛鳥と並んでるから飛鳥の横に座る。

「アハハッ 俺もしかしていないほうがいい？」

要がヘラヘラしながら言うから

「うん お酒臭いの嫌い」

とハッキリ言うと言はフラフラとクラスの男子のかたまりへと向かう。

「・・・なんで カノンと入れ替わったの？」

「んー？カノンがさ 急に腹痛えって言うからすぐに入れ替わったんだ」

「・・・ふーん」

「仲直り？」

「はあ？意味わかんない 別に・・・」

そんな 率直に聞かれるとなんて答えればいいのかわからない。

目をそらすと飛鳥はくすくすと笑った。

「仲直りのチューする?」

「な・・・こんなとこでするわけないでしょ! 第一今日はもうしたじゃん! 2回も!」

「アハハッ そつかそつか!」

「・・・飛鳥 飲んだ?」

だつて飛鳥そんなこと言うはず・・・

「あー? うん ちょっと飲んだー」

「な・・・ッ なんで飲むの!? バカ!」

「初めてだよーそれにほんのちょこつとだしー」

「もーバツカじゃないの?」

あきれて言うと飛鳥はまた笑う。

「大丈夫だよー」

お酒のにおいと焼き鳥のにおいが充満した室内は頭がクラクラしそ
うなくらいだった。

「あ、おい隣!!」

新一の声に振り向くと何か飲み物の入ったコップを渡される。

「水! 飲めよ! のど渴いたろ?」

「え・・・うん　アリガト」

何一つ疑うことなくコップの口をつける。

横で飛鳥の声がする。

「あ・・・隣! 待て!」

けどもう遅かった。

ごくんっ

ごく・・・ん・・・

2口　飲んだ。

のどが焼けるように熱くて　穴でも開くかと思った。

ガタンッ!!

「・・・はれえ?」

立ち上がるとぐらりと体が崩れた。

そのまま床に倒れる。

「わー！ 燐！？」

「春日部！？ 大丈夫か！！」

「あははははは~~~~」

視界がゆがんで 体がぐるぐるまわってるような感覚

世界が 回ってる・・・

「おい燐！ 大丈夫か！？」

目の前には心配してる飛鳥の顔。

「飛鳥ア～？」

「おい！ しっかりしろよ！！ ホラ！」

「んー・・・？」

そこで 意識が途切れた。

第58話 打ち上げ2

「……ん」

意識が戻ると ゆれてた。

ゆさゆさと ゆっくり 小さく揺れてた。

誰かにおんぶされてるらしい。

まだ目を開けることはできない

において誰だか確認して安心する

飛鳥だ

少しお酒と焼き鳥のまじったにおい

だけどわかる

飛鳥のにおいだ

「……飛鳥」

小さな声で名前を呼ぶとゆれが止まる。

「……んん」

小さくうなって目を開ける。

同時にどこかに座られる。

「・・・ん？」

目をこすると視界がだんだんハッキリする。

そこにはやっぱり飛鳥がいた。

「ここ・・・どこお？」

少し寒くて 暗いからどこかわからない場所

「公園 お前酔ってぶっ倒れたんだ。覚えてる？」

「ん・・・ちよつと」

新一になんか飲まされて・・・それでクラクラして・・・っただけ。

「・・・飛鳥 お酒くさあい」

「お前もちよつとくさいよ」

「そお？」

「うん ちよつとただけだね」

飛鳥がよっこらせと言いながら横に座る。

そんな飛鳥によりかかる。

「まだ少しクラクラするう・・・」

飛鳥はくすりと笑った。

私も笑う。

自分と同じようなにおいのする口に口付けると飛鳥はびっくりした顔をする。

「・・・燐からすんの初めてだね」

「そーだっけえ？」

「・・・酔ってんだな こりゃ」

「んー・・・」

そのまま飛鳥の胸に倒れこむ。

体が言うことを利かないんだ

なんだか だるくて 体に力はいらない

頭はくらくらしてて 視界もなんだか怪しい。

「飛鳥ア・・・好き・・・」

そついうと上から飛鳥のくすくす笑いが聞こえる。

頭にあつたかい何かがあたる。

飛鳥の手

私のほうが大きかったのに

いつの間にか飛鳥の手のほうがずっと大きくなってて

だけど あつたかくてやさしいその手は 小さい頃と変わらない

「大好き・・・」

また言つと飛鳥の手が頬に触れる。

唇が重なる。

「・・・んっ」

いつもより長いそのキスは 頭をもつとクラクラさせた。

「・・・はあっ」

「・・・ゴメン 苦しかった？」

「ん・・・ちよつと」

飛鳥の首元に顔を埋める。

「・・・お酒くさあい」

「だから燐も少しにおいするってば」

「んー・・・」

何も考えられない

ただ頭がぼーっとする

それからしばらく飛鳥の体温とやさしい声を感じてた。

第59話 お泊り

ドサッ

「・・・んー」

「・・・はぁ 疲れた・・・」

あのまま燐はまた眠ってしまい、俺はまたおんぶして運ぶことになった。

燐の家へとは思ったが・・・かぎないし・・・

燐は持つてるだろうけどポケットとかかばんとかあさられたく・・・ないよなあ普通。

だから俺の家に連れてきてベッドに寝かせてる。

今日は両親はいない。

なんか・・・どっかに旅行に行くとか行ってた。

結婚記念日が昨日だから、昨日からどこかに行ってた。

俺も学校休んで来いって言われたけど文化祭あるしっつって断った。

トポポポポ・・・

コップにミネラルウォーターを注ぐ。

ガチャッ

ドアを開けてのぞきこむ。

「すう・・・すう・・・」

隣は寝息をたてていた。

「・・・っ」

変に意識してしまう自分が情けない。

好きな女が無防備に横たわってて　しかもここは自分の部屋

両親はいない

隣だって家に両親いないから泊まってっただっていい。

「・・・って　バカじゃねえの俺」

それでも制服のスカートから伸びる長くて細くて白い足。

「・・・風邪ひくだろ」

そう言って布団をかけてやる。

「・・・ん・・・ん？」

燐が目を覚ます。

「燐 水・・・飲むか？」

「んー・・・飛鳥ア？」

「うん 俺だよ。ホラ 起きて水飲め」

ゆっくり燐が起き上がる。

まだ寝ぼけてる瞳

乱れた頭と服

ピクンとのどが動く。

すぐに燐は水を飲み干してコップを俺に渡す。

「ありがとう・・・」

「うん まだいる？」

「ん・・・いい・・・ここ どこお？」

燐はまだ寝ぼけた目でキョロキョロと辺りを見回す。

「俺の部屋」

「・・・飛鳥の部屋あ？こんなだったっけ？」

「こんなだよ・・・こないだ来ただろ やっぱ寝ぼけてんな」

「ふぁ・・・」

隣が小さくあくびをする。

「今日は泊まってくか？明日は学校休みだし・・・今日親いないからさ」

って 親いないのに女泊めてく気が俺は・・・

まあ、いくら隣でも泊まってくことは・・・

「ん・・・そうするう」

「・・・へ？」

「泊まってってい？」

寝ぼけたままの目で俺に言う。

そりゃ・・・言いだしっぺ俺だし・・・やっぱ無理 なんていえるわけないよなあ・・・

「うん いいよ。パジャマとか俺のでい？」

「ん・・・全然いい・・・」

「そつか そんな寝たら夜寝れないからもう寝るなよ」

「うん．．．」

えーと．．．夕飯はもう食べてきたようなもんだな．．．俺腹い
っぱいだし．．．

「風呂．．．寝起きじゃ無理か 少ししたら入れよ」

「うん．．．」

風呂．．．．．

少し危ういことを考えて慌てて首をふる。

バツバカ!!

誰も覗いてしまおうかとか考えてたわけじゃねえぞ!!？

だっだって そんなことして嫌われたくねえし!!

第60話 お泊り2

・・・泊まれ　なんて言うんじゃないかったああああ・・・
すでに後悔と罪悪感でいっぱいな胸。

罪悪感・・・まあ、罪悪感。

余計なこと口走っちまったっていうか・・・

うつわー・・・ホント　どうしょ・・・

「燐　水飲む？」

「ん・・・いい　お風呂入らせてー」

「あ？ああ・・・パジャマ　洗面所置いとくよ」

「ん・・・」

フラフラと燐が風呂のほうへ歩く。

あ、そっか　昔も泊まったことあるから場所わかんだったっけか・・・

って　俺・・・燐が入った後の風呂入んの！？

とはいえ・・・俺が先に入るのはいやだし・・・

シャツ

シャワーの音がする。

何も考えないように 新一とか克哉とかのこと考えながら洗面所に
昨日洗ったパジャマを置く。

あ、下着・・・まあいいや

ふーっとため息をついて洗面所を出る。

「あ、ねえ 飛鳥アー」

「・・・何？」

シャワーの音が途切れる。

「湯船って 入っていいの？」

入っていいの・・・って・・・

聞くなよ・・・

「え？別にいいけど・・・」

「んーわかったー」

ぽちゃんつと湯船の音。

あーなんかやだ・・・あー変な感じ

またふーっと息をついて洗面所を出た。

・・・とつと寝て とつと朝になってほしい・・・

はーっとため息をついて天井を見る。

・・・ああ やばい・・・

布団・・・どうしよう・・・

母さんと父さんの分はクリーニングに出してるし・・・

うつわ・・・漫画とか小説のお約束・・・!?

おいおいおいおい 待てよ・・・

高校生の男と女が!? ふざけんな!!

「なんか・・・なんかかわりとかねえのかよ!？」

寝袋・・・あるわけねえだろ!!

毛布・・・1年中家は布団派だ!!

どうすんだよ・・・

「うつわ・・・最悪・・・」

何?俺にこのさっむい中床と布団なしのパジャマで寝ろってのか!
?ええ!?!神様って奴は残酷だなあ おい!!!

・・・外を見る　真っ暗　寒い　おまけに酔っ払いがうつついてやがる。

こんな中・・・いまさら帰れなんていえないしなあ・・・

とはいえ　やっぱ・・・無理だなあ　一緒に寝るとかってのは）
お約束のパターン）

・・・しょうがねえ　真冬用の上着着て寝るしかねえな・・・

第61話 お泊り3

「飛鳥ー！出たよぉ」

「え？あ、うんー！」

「パジャマありがと おつきいけどあったかいよー」

「え、う、うん・・・」

俺のパジャマはぶかぶかで 肩幅があってなくて 手が出てなくて
足も見えなくなってる。

これまた漫画のお約束・・・だよなあ・・・

「んじゃ俺入るからー寒かったら布団敷いてるから。」

「うん ありがとー」

パタン・・・

洗面所のドアを閉める。

うわぁ・・・どうすんだよ・・・

隣の後だとか 色々考える暇もないよう俺は急いで風呂に入ってます
ぐに出た。

「・・・すっげー疲れる」

ため息をついて部屋に戻ると燐は床に寝転がってすーすー寝息をたてていた。

「・・・はー」

人の悩みも知らずにこの子はまったくもう・・・

「燐？ 燐 寝るな！ 起きろ！ 床に寝たら風邪ひくだろ？」

「ん・・・」

もぞもぞと燐が動く。

いや、可愛いんだけど・・・うん いつもと状況違うから・・・なんか複雑なんだよね

「・・・ホント 俺のこと男としてみてんのかなあ」

そんなことを思ってしまう。

たまにああ、前とは変わっちゃったんだ って感じるけど・・・

やっぱり こういうとき不安になる。

俺は 男として見られているのだろうか？ イマイチ不安だ。

「ん・・・飛鳥・・・」

「ホラ起きろよ 髪も乾かさないと！ 風邪ひかれたらたまんねーし・

・
」

「ん……頭痛……」

「ハイハイ ホラ！洗面所の棚の上から2段目にドライヤーあるし
！」

「はあい……」

フラフラしながら隣は洗面所へ向かう。

俺はごしごしとタオルで髪をふく。

ゴ……

ドライヤーの音

しばらくすると隣がまだ眠そうな顔で俺のところに来た。

「……乾かしたあ」

「ん えーと……」

時計を見るとすでに10時をわずかに過ぎていた。

「もう寝るか。ベッド使えよ」

「ん……飛鳥は？」

「俺もすぐ近くで寝るから平気」

燐は1人で寝ることが難しいらしい。

いつも寝る時は音楽を聴いてないと眠れない。

その理由は・・・やっぱり親がいつもいないからかもしれない。

燐はベッドに座る。

俺はすぐしたの床に座って上着を着込む。

「・・・飛鳥 床？」

「ん 一応マットとかひくけどね」

「・・・風邪ひくよ？」

「大丈夫だよ」

眠そうな やわらかい甘い声。

「もう寝ろよ」

頭をなでると燐は目をとろんとさせた。

どっかの捨て猫かお前は・・・

なんとなく 昔飼ってた猫を思い出した。

どこかへ行ってしまったけど。

猫は死ぬ時 姿を見せないとか言う。

猫は死ぬ時が自分でわかる

人間にも わかってしまえばいいのに。

・・・って 燐の眠そうな顔から なんか変な話に・・・

「おやすみ」

「・・・おやすみい」

すると燐はすぐに寝息をたててしまった。

眠ってからもすぐそばに好きな女の子はいて

女の子は眠ってて 夢をみてるかもしれない

それに 俺が出るとしたら とか 色々考えてしまったらなんだ
かおかしな気分になる。

眠って 意識がなくなつて

それからも 一緒にいられる

なんだか やっぱりおかしな気分。

ボーッと色々考えてたら燐が寝返りをうった。

「・・・燐」

名前を呼んだけど 返事はなくて。

寝息だけが静かな部屋に響いてた。

ふーっと息をついて俺も眠ってしまった。

第62話 お泊り4

顔に何かがあたって意識が戻る。

「ん．．．」

よく寝た 目の奥がじんわりとした。

目を開けると視界には線が何本がある。

髪．．．？

俺 髪の毛長くないからこんなところじゃないのに．．．

つまんで離す。

横を見ると燐がすうすう寝息をたてていた。

「．．．燐？」

「ん．．．」

燐は一瞬眉間にしわを寄せたがすぐにまた寝息をたてた。

「．．．ベッドから落ちたのか」

くすりと笑って頭をなでる。

長いまつげ 色白 綺麗な髪 細い体

改めて見ると本当に綺麗な体をしていて

その子のことが好きで　ましてその子も俺のことが好きだとか考え
ると口元が緩んだ。

半開きの唇に近づくと燐がまた眉間にしわを寄せた。

「んん・・・」

その反応と声にビクッとして慌ててもとの体制に戻る。

いや・・・別に　つきあってんだし・・・悪いことしてるわけじゃ
ねえんだけどさ・・・

「・・・ははははは」

これじゃ　寝てる女の子に何かやましいことしようとしてる男みた
いじゃないか・・・って　実際そうなんだけどさ！！

「・・・やめよ」

なんだか自分が本当にバカに思えてため息まじりに一言吐く。

携帯に手を伸ばし時間を確認すると7時過ぎてた。

横を見ると燐はまだ熟睡中で起きそうになかった。

燐の手を握る。

細くて 乾いた手

俺の手よりも小さい手

起きないかなーと思いながら寝顔を眺める。

「ん・・・」

やっと燐が目を覚ました。

「おはよ」

につこりと笑って言う。燐はすぐにいきおいよく起き上がった。

「な、なんで！？なんで私飛鳥と一緒に寝てるの！？え！？手つないで・・・ええ！？」

寝起きで何がなんだかわからないみたいで燐はキョロキョロしてる。

「え！？え！？なんで！？」

「アハハッ どうしたの？」

俺も起き上がって燐の頭をなでる。

「え？え？どーしよ・・・覚えてないんだけど・・・」

「え？昨日のこと 覚えてないの？」

「お酒飲んで・・・あれ？」

ああ、そうか 酔っ払ってたんだけ？

「覚えてないんだ？」

「え？何が？」

きよんとしてる燐が可愛くて 俺の頭に悪魔の角が生える。

「昨日燐酔っ払ってさーホント困ったよー」

「え？え？何が？」

「何がって 色々 いやーホント 大変だったなー酔って眠ってさー俺しょうがなく家に連れ込んで・・・あーもーそれから大変だったよー」

うそは1つも言っていないしね

「え？え？え？な・・・何！？私何したの！？」

「えー？なんだったっけえ？」

「は・・・齒軋り！？いびき！？寝相！？思い当たることがありますぎて・・・」

燐が泣きそうな顔になる。

ああ、この辺でやめとこう

「うそだよ なんもない」

「へ？」

「ちょっとからかったただだよー 酔って寝ちゃったのはホントだけど、家には俺が勝手に連れ込んだの。」

「ホントに？」

「うん ちゃんと風呂も入ったのに 記憶ないの？」

くすくすと笑うと燐は顔を真っ赤にした。

「だっだって・・・ホントに覚えてなくて・・・」

「気にしなくていいよ・・・クククッ」

まったく 可愛いなあ・・・

まだ納得できないように思いつととしてる燐を見ながら幸せなため息をついた。

第63話 お泊り5

「どうする？帰る？」

「んー・・・おなかすいた」

「ああ そつか忘れてた・・・適当なんでいい？」

「うん」

・・・頭痛いなあ

ぼーっとしてると部屋は飛鳥のにおいでいっぱいまた眠くなる。

って あれ？

普通ここって 女の子が料理とかして女らしさをアピールするのは！？

うっわ！！？

「あ 飛鳥！！私がやるよ！泊めてもらっただんし！！」

包丁をウィンナーに向けたまま飛鳥が「え？」とこちらを向く。

「私がするよ！」

「え、いいよ座って・・・」

「いーの！かして！」

飛鳥の手から包丁を離そうとして 指が痛む。

「・・・ッ！」

無理矢理離そうとしたから指を切ってしまった。

ぽたっ

白いまな板に赤い水玉が浮かび上がる。

「隣・・・バカか！！」

ビクッ

飛鳥の怒鳴り声に体が跳ね上がる。

「ったく・・・」

ため息まじりにいって飛鳥はどうかどか乱暴にどこかへ歩いていってしまった。

「う・・・」

痛みとかで泣きそうになる。

絶対 飛鳥あきれた・・・

慌ててしすぎた・・・

これじゃ 女らしさも何もないじゃんかぁ・・・

じわあっと涙が浮かぶと頬があたたかくなる。

「おい？何 痛いのか？」

飛鳥が私の顔を覗き込む。

「ん・・・ちよつと・・・」

「かして」

飛鳥がまだ少し怒った口調で私の怪我した指を水道の蛇口へ向ける。

ジャー・・・

冷たい水が触れてジンジンと怪我した部分がゆがむ。

「・・・っ」

「我慢しろよ」

「・・・はい」

指をそつとふくと飛鳥は持ってきた絆創膏を貼ってくれた。

「ハイ もういいよ。俺がするから」

「・・・ごめんなさい」

「なんで謝んの？」

「だ・・・って 私・・・飛鳥怒らせようとしたんじゃないくて・・・」

言ってるうちに自分のバカさとか アホさとか くだらなさとか

いろんなものをいっぺんに感じて 涙があふれた。

「だって・・・こういうのって女の子がしたほうがいいのかもって
気づいたら・・・それで・・・」

涙が急にぼろぼろ流れ出す。

「隣？」

「ふえ・・・だ・・・って・・・ずっと なんもできてないんだもん」

いつも してもらってるのは私のほうだ

酔っ払ったりなんかして 世話やかせちゃったのも私

こうして 困らせてるのも私

いつも私ばかりだめで

「ごめんなさい・・・」

寝起きの頭はぼーっとしてて

何がなんだかわかんなかった。

飛鳥が私を抱きしめる。

「バツカかお前は 正真正銘のバカだろお前 あほだろお前」

「な・・・なんでえ！？あやまつてるのに！ひどい！」

「なんでわかんないかなあ？」

「何が・・・さ・・・」

「俺が隣に何かしてもらいたいつて いつ言ったんだよ。好きだからそばにいたってだけじゃん？」

「で・・・でも・・・」

「でもないだろーが いいんだよ。何かさせたはさせたでこうなるんだから」

ぎゅっと飛鳥が怪我した指を握る。

指から手へ激痛が走った。

「な？そばにいのに 傷ついたらたまんないし 別に、できることでいいんだよ？隣のそういうところは知ってて好きになったんだ

から。」

「・・・私の そーゆーとこって?」

「ドジで不器用で常に無防備でボーツとしてて・・・」

「わー!!悪いことばっかじゃん!」

「そいですっげー可愛いの」

「・・・っ」

かあぁと顔が赤くなるのがわかる。

なんで なんで飛鳥はそういうことさっさとと言えるの?

そんな人だっ たっ け?

「アハハッ 耳まで真っ赤だ」

「な・・・だっ だっ て・・・」

ニヤニヤした顔の飛鳥の顔が無表情になる。

「・・・っ」

ぎゅっと目をつむると予想通り 唇にやわらかいものが当たる。

「ん・・・っ」

いつも されるのは私のほうで

声をあげちゃうのも私のほう

でも 自分からするのなんて恥ずかしいし・・・

なんかしたいよなあ・・・私から・・・なんか・・・

料理は・・・できないことはないけどよく怪我するし・・・やけどとかも・・・

洗濯は・・・洗濯物よく風で飛ばされて汚れちゃうんだよねえ・・・

なんか なんもできないなあ 私・・・

第64話 お泊り最終回

結局私はずっと椅子に座って待ってた。

「ねえ そういえば9月に秋祭りあるね」

「んー？ああ、そうだなあ・・・祭り多すぎ」

「・・・一緒に行く？」

「えー？秋祭り・・・なんか祭りってみんな一緒だし 行かなくてもよくないか？」

そういえば飛鳥は毎年祭りに関して積極的じゃないし 決定しても乗り気じゃない。

「・・・んー」

「祭り行かなくてもさー どうか行けばいいじゃん。」

「うん それでも別にいいけど・・・」

「祭りじゃなくても一緒にいりゃいいだろ？」

なんか そういう言い方は腹立つ・・・

事実だけど そんな『そうすりゃいいだろ』みたいな言い方 いい加減っばいし・・・

心の中でぐちぐち言ってる机にゆげを放つご飯と納豆の白いパツク わかめの味噌汁と玉子焼きと油でつやつやしたウィンナーが置かれる。

「ハイ ウィンナーあるから納豆無理に食べなくていいよ」

私は納豆が嫌い・・・

「ん・・・ありがと・・・」

ぼーっとした頭の中もごもごと食べだす。

「味噌汁 熱いからさま・・・って」

「あつっ！」

飛鳥がいい終わらないうちに私は味噌汁に口をつけていて、舌に熱い味噌汁が触れる。

「熱い・・・」

「だから言おうとしたのに・・・」

「うう・・・舌ひりひりするよう・・・」

「大丈夫大丈夫 ホラお茶！」

飛鳥が慌てて冷蔵庫からお茶を出す。

「うん・・・アリガト」

しみるゝ！

なんかひりひりするしゝ！

そしてその後 私は飛鳥と手をつないで家へ戻った。

結局秋祭りは行かないことになってしまつて。

そして 休みも明け 学校・・・

「・・・ねえ こんなこと言つのはなんなんだけどさあ」

教室に入つての私の第一声。

「なあに？」

夢乃がにこやかに言う。

「そこにいるうつざつたーい！ 生き物は何？」

そこには克哉が夢乃のそばにいるくせに背を向けて体操座りしてる。

何がしたいのか・・・

「さあ？私には見えないんだけどねー」

夢乃は明らかな作り笑顔で言う。

「隣！俺の話聞いてくれるか！？」

克哉が急に立ち上がって私に言う。

「はー？聞きたくないんですけどー」

「聞いてくれえええ！！」

「ハイハイ・・・で？何があったわけ？」

克哉の話によると

克哉は朝っぱらから夢乃に告白

「夢乃！好きだ！本気で好きだ！俺とつきあえ！」

夢乃はキツパリと

「無理 いやだ 絶対いやだ」

しかし克哉は？

「つきあってくれなきゃ死んでやる！」

さすがの夢乃もこれには少しくるかな？とか思ってた克哉に夢乃は・
・

「あつそ 死ねば？」

冷たい・・・

「ひでえ！本当に死んでやる！死んで化けて出てやる！！」

克哉は筆箱からはさみをだして手首に当てようとすると・・・

「バカね それぐらいじゃ死なないわよ。そのはさみ 昔から使ってるやつでしょう？さびてるじゃない。それで死ねるとでも思ってるの？」

「へ・・・？」

「本気で死ぬ気なら そこから飛び降りなさいよ」

そう言つて夢乃は窓を指差したそうです

「ひどくない！？本当に死ぬよ！」

「そりゃ・・・アンタが死んでやるつつたんがいけなかったんじゃないの？」

「夢乃おおお！！！！」

「・・・うるさいわねえ」

ため息をついて夢乃が立ち上がる。

そしてくるりと回れ右をして克哉を見下ろした。

「あのね 私はアンタのことなんてぜんぜん！好きじゃないし、つきあう気なんてさらっさらない！つきまとわれてもウザイだけの。消えろ」

夢乃はあくまでにっこりと微笑みながら言う。

「そっそんな だって俺・・・」

「まだ言う？」

夢乃が無表情でそういうと克哉は黙る。

「アンタなんてね ウザイし諦め悪いからね 私、大ッッ嫌いなもの。」

夢乃は無表情のまま 克哉を見下ろしてハッキリと言った。

大嫌い

それは 私でさえも夢乃から聞いた 初めての言葉だった。

夢乃が嫌いというものは人ごみだったり教科だったり 食べ物だったりするわけで。

こんな風に人に それも面と向かって冗談も一切なしで言うことなんて 初めてだった。

第64話 無理難問

「あんさー克哉 そろそろ諦めたら？」

いまだ暗い雰囲気の中にいる克哉に声をかける。

「諦める・・・って 簡単に言うなよおお」

「夢乃がウザイ生き物ほど嫌いな の あんたも知ってるでしょ？」

夢乃はセールスマンだとか 学祭で近寄ってくる人達が嫌いでいつも冷めてる。

声をかけられても完璧シカトでそのまま通り過ぎてしまう。

そりゃあ 克哉の気持ちはまったくいいほど想像できないわけじゃない。

ずっと ずっと大好きで隠し続けてたのに ちょっと？表に出しただけでここまで冷たくされるなんて。

きつとすごくショックで悲しいだろう。

だけど こんな風になるまでもなくても・・・いいんじゃないかなあ とか思ってしまう。

「なああ 夢乃おー つきあってくんなくていいからさあーもう少しやさしく接してくれても・・・」

「うるさい 黙れ 死ぬんじゃないの？早くしなさいよ」

「うわあああああああ！！！！！！」

まあ、こつも冷たく人でなしのごとく突き放せる夢乃もすごいけどね

「あのさー・・・克哉の問題はさー」

「あ、克哉君！今日の放課後カラオケ行かない？」

「行く行く！！！！」

「・・・その 言ってることとすることが違うところだと思つよ」

私が言っていると克哉はため息をつく。

「だってさー夢乃が相手してくれないなら他の子といるしかないじゃん！」

「アンタみたいな女好き・・・夢乃とあうわけないじゃん！」

「けどさー好きなのは夢乃！女の子達はあくまで遊びだよ！」

「その！遊びがだめなの！わかんないかなあ！？」

「わっかんないね！女の子ってみんな可愛いじゃん！その子等と遊んで何が悪い！夢乃と両思いになったら大事にするけどさ」

こんにやろっ・・・

夢乃は冷たい目で私と克哉を眺める。

クラスのみんなはグループで話したり やっぱりまだ外に行こうとする人がいる。

やっぱり みんな関わりたくないらしい。

このままじゃ・・・まずいよねえ やっぱりさすがに。

「だってさ 夢乃。」

「じゃあ・・・」

カタンッ

夢乃が克哉を見て立ち上がる。

克哉は夢乃を見上げた。

その瞬間 教室中が静かになった。

「これから言うことをすべて達成できたら 考えてあげるよ」

「な 何！？夢乃のためならなんでもするぞ！」

夢乃が言ったのは 克哉には無理じゃないの？という条件だった。

女の子と喋らない 触らない メールしない（１ヶ月間）

毎朝ジョギング１０ｋｍ（１ヶ月間）

次の試験で全教科７０点以上とる

明美の飛び蹴り１０発連続でくらい、その後１０秒以内に立ち上がる

「これができたら 考えてあげる」

その時全員が思ったはずだった。

『絶対無理だ』

『ありえない』

『克哉にできるわけがない』

って。

でも克哉はぱあつと明るい顔をしてみせた。

「本当か！？これができたらつきあってくれんのか！？」

「つきあうとは言っていない。ただ・・・まあ、いい返事をできるだけだそうってことよ」

すると克哉は狂喜の悲鳴を発しながら教室を飛び出した。

「・・・おい夢乃　いくらアイツがウザイからって・・・無理難問すぎるだろ」

新一が夢乃の頭を撫でて言う。

「・・・無理？」

夢乃はくすりと笑った。

「無理でいいのよ。私がアイツとつきあうことが無理なんだから。」

確かに

無理な条件を克哉に押し付けても克哉はきつとそれに挑戦するだろう。

けどそれはあくまで『無理な条件』だから、克哉はきつと達成できない。

しかし　達成できなくとも克哉は夢乃を諦めることはない。

だって　条件ができなかったら一生チャンスはない　と夢乃が言ったわけじゃないから。

それに　それで諦めたら『所詮その程度』と思われるも仕方ない。

そうなければ必ず克哉は諦めずに夢乃につきまとう。

そして夢乃がまた無理な条件を押し付け・・・

その繰り返しだ。

それは間違っていないと思う。

きつと克哉はへらへら笑ってするだろうし　みんなも黙ってそれを見る。

克哉は達成できなくても夢乃は条件を出すからきつと自分が意中にあると思うだろう。

そうなれば　表向き　傷つく人はもう出てこない。

けど　へらへら笑ってる克哉

それを　夢乃はどんな気持ちで眺めるんだろう？

どんな気持ちで　無理な条件を言っただろう？

それは私にとっても想像できない感情でしかなかった。

第66話 無理難問2

無理だとはわかりきっていても みんな興味津々に克哉を見ていた。

その日克哉は不気味なほどおとなしかった。

授業もマジメに受け 休み時間は予習復習

もちろん1度も女の子と喋ってはいないし女の子が近くを通ればぶつからないように失礼なほど避けていた。

当然普段から遊んでた女の子達は『ばかなことしないでいいじゃない』だとか話しかけたりしたけど克哉は全部無視してた。

そのおかしな変化にみんな驚いた。

「ねえ夢乃 克哉本気だよ？」

いつもなら廊下に出てしまふ華穂が5時間目の後の休み時間 珍しく夢乃に話しかける。

「・・・あつそ」

夢乃は無表情のまま そっけなく答えた。

その横顔からじゃ夢乃の感情は読み取れなかった。

「なあ克哉 本気か？」

要がどうしてもよさそうな顔で言う。

「んー？何が」

一瞬要を確認して克哉はまたノートを見る。

「お前がテストで70点以上なんてとれるわけねえじゃん。しかも次の試験つつたら期末だろ？」

期末試験は全教科の試験。

おまけに克哉は毎回成績は平均ギリギリ。

中学でも9教科のうち6教科 平均以下をとったことがある。

そんな克哉が全部70以上？高校の試験で？

ありえない

そりゃあ・・・本ツツツ気でがんばればなんとかなる可能性はないわけじゃないだろうけど・・・

今まで見てきた私にしてみればゼロに近いと思ってしまっ。

「・・・・・・・・」

克哉は黙ってシャーペンを動かす。

「ホラここ違う。なんで500×2xが5200xになる？高校どころか中学　つーかこれ間違ってるのかけ算だから小学生が間違えるレベルじゃねえか」

「うるせえな　ちよつと間違えただけだよ」

克哉がため息混じりに言う。

その可愛げのない態度に要は力チンときたらしくため息について新一のところにへ行ってしまう。

「アイツ　よく中学で数学平均点保てたな」

ボソリと要が言う。

「まー・・・一応あれは本当にちよこつと間違ってたってだけってことじゃねえの？」

新一は楽しそうににこにこしながら眺めてる。

「・・・無理に1000円」

「んー・・・成績以外の条件なら達成に1000円」

すでにかけてる要と新一。

しかも　2人共無理に　じゃん。それって。

「ねえ飛鳥 どう思う?。」

克哉の光景を1人で眺めてた飛鳥の服をぐいぐいひっぱる。

「んー・・・?俺?まだ賭けるとこまでいってないと思う」

「賭けの話じゃなくて!どうなると 思う?。」

「さあ?どうだろーね 克哉は本気で夢乃のことが好きだし・・・
ありえる話だとは思うよ?。」

「えー!?なんで?だって克哉だよ!?。」

「・・・お前それ失礼だろ」

「だってそうじゃん!。」

「さーね けどいざという時好きな女のこと考えればできない話じゃないかもな 勉強すりゃいいんだし」

「それは・・・飛鳥がそこそ頭いいから言えるんだよ・・・」

ボソリと言うと飛鳥はくすくす笑って私の頭を撫でる。

「どうだろ?俺は燐が別れるって言い出したら試験で全部100点とるって約束できるよ」

「な・・・そっそんな 別れるとか言うわけないじゃん!。」

「・・・お前 ツツコミところそこじゃない・・・俺今かなりくさ

「いこと言っただけど？」

第67話 無理難問3

放課後 いつもなら複数の女の子達と帰る克哉。

でも今日は要と新一と帰っていった。

「隣 帰るぞ」

「あ・・・うん」

飛鳥が私の頭を撫でる。

どうも 子ども扱いだなあ・・・

「ねえ飛鳥 今度の期末なんだけどねー」

「ん？」

「期末の2日目がハロウィンなんだよ」

「あー、うちの学校の期末微妙な時期だよな。」

「うん お菓子用意しててね」

「・・・考えとく」

期末まで後 3週間

教室のドアを開けると克哉はすでに登校していた。

しかも朝から勉強。

すごい気合だなあ・・・

「ねえ夢乃 本当に克哉が全部達成したらつきあつの?」

「・・・考えるとは言ったね」

「・・・ふうん」

今は考えもしないってことかな

「ねー克哉!」

私が克哉の後ろ姿に言つと克哉はこちらを見てすぐにまた机のほうを向いた。

「な・・・無視!?」

「違うよ」

要がくすくすと笑いながら私の横に来る。

「一応憐も『女の子』だろ?」

「あ・・・そつか」

「ありや本気だなー」

ニヤニヤしながら克哉は夢乃を見る。

夢乃は相変わらず無表情。

だけど 目線の先は克哉の背中だった。

もちろんそれは恋する乙女の表情じゃないし 当たり前だけどそれは冷めた視線。

『ばかじゃないの?』とでも言いたげな。

夢乃は 嫌いな人にはとことん冷たい人だから。

「そついえば 早朝マラソンしてるのかな?」

「してるよ」

これに答えたのは今登校してきた明美だった。

「毎朝見かけるよ。道場の前通ってるから。」

「・・・ふうん」

「毎朝汗だけで ぜえぜえ言いながら走ってるよ。」

明美は横目に夢乃を見る。

もちろん夢乃は表情を変えないし何も言わない。

「・・・克哉」

教室中が静かになる。

だって 克哉に話しかけたのは 夢乃だから。

克哉も驚いた顔で夢乃を見る。

「克哉がどんなにがんばっても 私は克哉のこと好きにはならないよ？」

「・・・」

克哉は何も言わない。

女の子と喋らない の条件の女の子に夢乃が入ってるわけじゃないだろうに。

「・・・私は 誰かががんばる姿を信じるような人じゃない」

「信じなくてもいいよ」

ようやく克哉が口を開いた。

教室中にいたみんながそちらに注目する。

「信じなくても別にいいよ。信じたくないのに信じろなんて言わな

い。」

「・・・だったらなんでがんばるの？」

「お前のことが好きだからに決まってるじゃん」

「・・・その言葉が信用できないのよ」

「なんで？」

ようやく夢乃の表情が変わる。

眉間にしわを寄せて 何かを異様に気味悪がってるような顔。

「男の言葉なんて 信じたくない。」

「なんで男限定？」

「・・・じゃあ男じゃなくてもいい。」

「ちゃんと説明しろよ 意味がわからない」

「克哉に説明を聞く権利はないよ。私も話したくない」

「・・・あそ」

克哉はため息をついてまた机のほうを向いた。

夢乃もため息をついて壁によりかかった。

第68話 無理難問4 夢乃

今でも 覚えてるんだ

鮮明に すべてを。

泣き叫ぶ母親 幼い私 困った顔をする父親

2人の間には1枚の紙が置かれていて

あの頃の私には理解できなかった物。

それは離婚届だった。

そんな夜を私は何度も見た。

だけど 男は女の涙に弱い それは本当のことだった。

父親は 離婚の話を持ち出しはするがハンコは押さなかった。

それでも あの日は訪れた。

あのままで続くはずがなかったんだ。

父親も 母親も。

あの家庭が あんなぐちゃぐちゃのまま 外見だけしっかりして

続くわけが。

偶然じゃない 必然。

父親は荷物を持って家を出て行く。

泣き叫ぶ母親

父親はそれにはもう 振り向かない。

泣き落としなどもうきかない。

あの時 言ってやればよかった。

なんでもいいから 私から何か。

子供の私が 何か言えばよかったんだ。

小学生だった私は ただ静かに涙を流すしかなかったけど。

無力なひきとめの言葉でもいい

ただ傷つけるだけの言葉でもいい

子供なら子供らしく 偽善を並べた言葉でもいい

子供なら子供らしく 大声で泣き叫んだってよかったんだ。

だけど 私にはできなかった。

もちろん父親の幸せを願ったりはしていない。

私みたいな子供1人を幸せにする方法すらわからなかった大人の幸せなど 願うわけがない。

母親の不幸を願ったわけでもない。

だって 母親を不幸にして 何になる？

わからない

今でも私にはわからない。

私の心はまだ あの頃のまま 止まってる

だから 男なんて信じない

信じて あの頃みたいになるのは嫌だ

きつと 私は裏切られる

捨てられる

逃げられる

だから 信じないの

克哉のことは信じてもいいかな って思う。

昔から一緒にいて

女好きだけど 男の中では1番まともに信用できたかもしれない。

だけどね 信じられないの。

ガッカリさせられるのは ごめんなの。

またあの頃みたいになるのはもっとごめん。

信じることを あの頃の私が拒否する

これを世の中で ト라우マというのだろうか？

第69話 無理難問5

「ねえ飛鳥 期末・・・何か賭ける？」

「えー？だつて燐が勝つに決まつてんじゃん」

うそばっかし 飛鳥のが入試の成績よかったの 私知ってるんだからね？

「いいじゃん！何かしない？ね？」

「・・・んじゃーお前が勝つたら帰りにアイスでもおごつてやるよ」

「ホントに！？じゃあ飛鳥が買つたら・・・何にする？」

「・・・・・・」

しばらく沈黙が続いた。

不意に飛鳥が顔を真っ赤にした。

「飛鳥？」

「あ・・・いや なんでもない！」

「????」

「・・・あのさ」

「何？早く言いなよー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・キス しちゃだめ？」

「は？」

小さい声で なにやら・・・言っただけど・・・

「いや、なんでもない!!」

飛鳥はくるりと私に背中を向けた。

「何さ 別に試験で賭けなくったってしてもいいのに」

私がかくすりと笑って言うのと飛鳥はこちらを向いて私の顔をじっと見る。

「・・・・・・・・何？」

「・・・・・・・・俺からじゃなくてさ」

「へ？」

「お前から。したことないじゃん」

「・・・・・・・・えええええ!!?」

私からキス!? やだよ! そんなの恥ずかしいもん!!

「い いや!!」

「じゃあ お前が勝った時の物ももう少し高いのにしてもいい」

「・・・じゃあねーアイス1週間毎日1個買ってよ」

「んー・・・まあいいけど？1週間で毎日1個ならな。」

「やった 負けないからね！勉強しよ！！」

「俺も勉強しよー」

飛鳥がご機嫌に言う。

「あ、お前言いそうだから今言っとくけど『やっぱなし』はだめだからな。そしたら罰ゲーム」

「う・・・言いそうだなあ・・・」

「言ってもなしにはしないからな」

「はいはい・・・」

私がため息をつくと服を誰かにひっぱられる。

そちらを見るとそこにいたのは華穂。

「華穂？どうかした？」

「あのねー克哉がすごいことになったよー」

「へ？」

克哉の席のほうを見ると克哉はいなくなってた。

おかしいな・・・勉強してたんじゃないの？

「すごいことって？」

「あのねー明美のところに行っただの」

華穂がにっこりと微笑むから、すぐに克哉がどうなったのかわかった。

「・・・バカだねえ　アイツも。」

横で飛鳥があきれたようにつぶやいた。

「ね　飛鳥は私のためなら明美に殴られてもいい？」

飛鳥に言つと飛鳥はきよとした後

「当たり前じゃん　で？克哉は？」

さらつと言っただけ　飛鳥の顔が赤いのはわかった。

「んとなー保健室」

華穂がくすくす笑いながら言った。

私は飛鳥と華穂の手を握る。

「んじゃ 保健室行こ！」

そう言つて2人の手をひいて 私は教室を出た。

「ちょ・・・燐！離せ！」

後ろで飛鳥の声がしてぱつと手を離す。

「あ、ごめんごめん つい・・・」

「いや 謝ることねえけど・・・」

飛鳥が顔を赤くしたまま言う。

「あー 飛鳥照れてるー」

華穂が飛鳥を指差して笑つた。

「失礼します・・・先生 克哉は？」

保健室の先生に言うと先生は困つたような顔をしてベッドを指差した。

そこには顔をゆがませた克哉が横たわっていた。

「克哉 大丈夫？」

私が言っていると克哉は目を開けたが黙ったまま。

まだ『女の子と喋らない』を貫いてる。

・・・とすると

もしかして 明美のけりをくらった後に 立ち上がった・・・の？

「・・・オイ 克哉 大丈夫か？」

飛鳥が言っていると克哉は口を開く。

「大丈夫じゃねえよ・・・あの野郎 ようしやねえな・・・」

「当たり前だ。明美だぞ？んで どうだったんだ？結果は」

「・・・・・・4秒」

克哉は小さな声でぼそりと言う。

4秒で・・・立ち上がった？

『あの』明美の飛び蹴りをくらって!？

「すごいじゃん！克哉!!」

「よかったな。んで 夢乃は？」

飛鳥がキヨロリと保健室を見るが夢乃はいない。

「・・・蹴られる前 呼び出して・・・目の前でやったんだけど・・・俺が保健室に運ばれてる時にどっか行った・・・」

あーあ・・・夢乃・・・

「ま、これで条件1つは完璧クリアだろ？じゅんばんだろ」

「・・・試験とランニングと・・・女・・・最悪」

「お前 本当に女好きだったのか？」

「本当についていうか・・・夢乃まではいかないけどさ やっぱ女って可愛いじゃん」

「そうかなあ？」

「・・・テメエにや憐がいるからだろうが 全然振り向かない好きな女と黙ってても近寄ってくる好きではないが可愛い女 どっちのが楽で楽しいと思う？」

克哉が震えた声で言う。

そりゃあ・・・夢乃見てたらそう思っちゃうよねえ・・・

「まあ・・・なあ そりゃあ・・・思うよなあ」

飛鳥も諦めたようにそうつ。

「お前は憐がすぐに振り向いたから運がよかったよ。俺なんてずっと好きだったのにこの有様だよ」

ゆっくりと克哉が起き上がる。

「・・・っ・・・」

苦しそうに顔をゆがませる。

「・・・こんなんで朝走ったりなんかできやしねえ・・・」

「大丈夫か？お前・・・」

「大丈夫なもんか 全身痛エよ。特に腰と肩を思い切りやられたからな・・・痛すぎ・・・」

「明美も容赦ねえな」

打撲痕を見て飛鳥が言う。

「まさか明美もお前が4秒で立ち上がれるとは思ってなかったんじやねえの？」

「・・・女の友情ってのは恐ろしいな」

克哉が力なく言う。

「は？」

「明美が本気で俺を殴るなんて 夢乃のためだろ？」

「まあ・・・そりゃあ・・・」

「そんなに俺 信用ねえのかな」

明美は 自分に言い寄ってくる男や明らかに悪いことをしてる人ぐらしいか本気で殴らない。

後は試合とか・・・練習とかで。

なのに 特に悪いこともしてない克哉をこんなに殴るっていうことは 夢乃のため。

簡単に言えば 明美は夢乃と克哉がつきあうことに反対なんだ。

そりゃあ 私だって・・・っと これはいえないんだけど・・・。

克哉みたいな女好き 夢乃がだめなパターンだよ。

若い女と逃げた父親

そんな父親とかぶったってしょうがないと思う。

浮気なんてされた日には どんな男とも関わらなくなってしまうか

もしれない。

そう思うと 私だっ
て.....

第70話 ト라우マの溶ける音 夢乃

「克哉 明美の蹴り受けて4秒で立ち上がったってよ」

噂を聞いてすぐに報告に来たらしい。

奈央がニヤニヤしながら私に言った。

「ふう……ん……」

「どうすんの？アイツ 全部できちゃうかもよ？」

「知らないよ」

「知らない……って できたらつきあうんじゃないの？」

「つきあうとは言っていないよ？考えるって言っただけ」

「……それ ずるいだろ。」

奈央があきれたように言う。

ずるくて何が悪い？

この程度 たいしたことないでしょう？

人を平気で裏切るほうがずっとズルイ。

「……別に」

「まあ、夢乃がそういう風に考えてることぐらい 克哉にだってわかってるはずだけどね」

それでも 頑張る意味がわからない

言っただけ そんなに頑張っても私はつきあう気はないと。

それでも 頑張ってる克哉が理解できない

愛は見返りを求めない？

そんなのふざけてる

人間 損得なしに動くわけがない

そついうこと言っただけは偽善者でしかない

冷めた考えかもしれないけど それは事実。

克哉はあんなになって 何を求めているの？

私が貴方を信じるわけがないでしょう？

それとも何 周りから同情でもされたいの？

それでまた 女の子からの人気を集める気でのいるの？

どうであれ ふざけてる

明美の蹴りなんて 下手したら病院行きだつてのに・・・

第一・・・・・・・・

私はくるりと奈央に背を向けて 保健室へ向かった。

奈央がついてきていないのを確認して 私は保健室に入る。

そこには先生の姿がなくて 燐と飛鳥と華穂 それからベッドに克哉がいた。

4人共驚いた顔でこちらを見る。

まったく そんな顔されてもすました顔してる私の身にもなつてよね。

「大丈夫なの？」

私が言うと克哉は小さく頷いた。

「これぐらいなら 治る」

「・・・あつそ」

近くにあつた小さな椅子に座る。

「なんでそこまでするわけ？」

私が聞くと克哉はまたきょとした。

「前にも聞かなかったか？それ」

「・・・・・・」

「夢乃のこと好きだからーつつたよなあ？」

克哉が燐達に同意を求める。

燐達は困ったように笑ってごまかそうとしている。

「それが信用できないんじゃない」

「・・・・なんで？」

「私のどこを言ってるのか理解できない。私 アンタに好かれるよ
うなことした覚えはないよ？」

「・・・・それを聞かれると俺は正直困る」

困る？

それは いえないってこと？

なんだ やっぱりその程度か

どうせ・・・・

「だって 俺だつてわかんないんだし」

「は？」

「あのなあ 俺はモテるんだぞ？黙つてたつて女は寄ってくる！夢乃ほどじゃなくともいい女なんていくらでもいるんだ！好みの女なんかいっぱいいる！」

開き直り？意味わかんないし・・・

バツカみたい・・・私 何聞いてんだろ

「・・・なのに お前じゃなきゃだめなんだから困るんだよ」

「・・・はあ？」

「何人女と一緒にいたつて 女とどこいったつて 何したつて どうも満足しない どうも疲れる」

「・・・・・・」

「そうなるとどうしてもお前の顔が浮かぶんだよ」

・・・それは 結局迷惑な話よねえ

「俺だつて お前以外の女でいいならとっくにお前なんてほつてよ」

ギシッ

克哉がベッドから起き上がって私の顔をじつと見る。

「お前以外の女なんていらねえんだよ お前しかいない」

「・・・っ」

勝手に 私の許可なく

私の目から涙が流れた。

克哉が驚く。

克哉だけじゃない 他の3人もぎよつとしてる。

「ゆ 夢乃！？な なんだよ！俺なんか悪い言っただけ！？なあ飛鳥！え！？え！？夢乃！？」

「・・・バツカじゃないの？」

目をこしこしとこする。

それでも涙は止まらない

「ゆ 夢乃？」

隣も心配そうに私の顔を覗き込む。

「・・・いつか 捨てるんでしょ！？」

「へ？」

「どうせいつか私のことなんて捨てて 他の女のところに行くに決まってるのに・・・なんでそんな無責任なこといえるの!？」

「はあ？」

克哉のマヌケな声

「だって そうじゃない！」

「なんで俺がお前のこと捨てんの？」

「男なんて・・・そんなんじゃないの!？」

「夢乃!!」

克哉の怒った声が響く。

驚いて克哉を見るとやっぱり怒った顔してる。

「ふざけんな!いつまで父親ひきずってんだよ!！」

「だ・・・って・・・」

「俺とお前の親父は別の人間なんだよ!同じじゃねえ!あんな奴と
同じなわけねえだろ!！」

克哉と お父さんは違う

どこかでわかってた

だけど 昔の私がそれを拒否した

また 傷つきたくなくて

同じ思いをしたくはなくて

全部 無理矢理遠ざけようとしてた

「頼むから・・・ひきずんのやめてくれよ・・・」

「・・・っっ」

「俺とお前の父親は違う だからさ 信じてくれよ」

克哉の手が私の顔をつつむ。

大きな手

あの頃のお父さんも 同じように私を宥めた

だけど違う

手の感触も 顔にかかる息も 瞳も

全部 お父さんとは違った

「・・・ごめん・・・なさい・・・」

涙が床に落ちた。

ポタッ

それと同時に　トラウマの氷は溶けてなくなった。

あの頃から考えると　私は初めて男という生き物に対して『信じよう』と思い

その人に対して　謝った。

第71話 華穂と要と階段

朝 私は軽やかな気分で教室のドアを開けた。

「おはよー!!」

が しかし

「あ・・・あれ？」

克哉はまた教室の隅でいじけてる。

それを夢乃達はあきれたように眺めてる。

「ゆ 夢乃？あれは・・・」

「いや 燐 ほつといたほうがいいぞ」

飛鳥が言う。

「え？どういうこと？」

「夢乃のバカ！期待させやがってえええ!!!!」

克哉が叫ぶ。

「うるさいわねえ 勝手に期待しないでよ気持ち悪い・・・」

「だって！夢乃が人前で泣いて謝ったんだぞ！？普通期待するだろ

「!!」

克哉が新一に同意を求めると新一はシカト。

・ まあ、確かにあれはなんか・・・期待させる雰囲気ではあったし・・・

「・・・1ヶ月 頑張りなさいよ」

夢乃がボソリとつぶやくと克哉は嬉しげに笑った。

夢乃が 克哉への接し方を変えたのは みんな気づいた。

夢乃は夢乃なりに 何かに納得したのかもしれないし
もしかしたら

克哉を信じ始めたのかもしれない。

「隣！要と華穂が怪我して保健室にいるんだってさ!!」

休み時間 私に大きな声で知らせに来たのは 奈央だった。

「・・・へ？怪我？」

「なんか要が華穂をかばったとかで・・・」

私と奈央は保健室へ向かった。

「失礼します・・・要と華穂・・・いますか？」

保健室の先生はいなくて そこには2人で長いすに座ってる華穂と要だった。

「おーどうしたよ2人して」

要が平然と言う。

「へ？怪我・・・したって聞いて来た・・・んだけど・・・？」

「ああ、たいしたことねえよ！」

要が笑いながら立ち上がろうとすると華穂が腕をつかむ。

「つてええ！！！！？」

要が急に大きな声を出すから私と奈央はビクリとして後ずさり。

「歩いちゃだめ!!」

華穂は涙目で要に言う。

要はため息をついてまた椅子に座った。

「何があつたわけ？」

私が聞くと華穂は急に泣き出した。

「ごめんなさい・・・」

「か・・・華穂が謝ることじゃねえよ!」

要が華穂の頭を撫でる。

「え?何?どうしたわけ?」

奈央が聞くと要がこちらを向く。

「いや・・・一緒に教室に戻ってただけど・・・途中で華穂が上級生にぶつかってバランス崩してさ。俺が支えようとしたんだけど・・・それで俺までぶつかってバランス崩しちゃってさ」

要があははっと大きな声で笑う。

「はあ・・・それで?」

「結局2人して階段から落ちちゃったってわけ」

「しかも要バカだから私かばって落ちたんだよね・・・」

「や、あれはたまたまだって・・・」

つまり話をまとめて箇条書きにすると・・・

華穂が上級生とぶつかる（バランスとくずす）

華穂を支えようとして要が手を伸ばす

その直後要も上級生にぶつかりバランスを崩す

要は女の子の華穂をかばおうと自分が下になり2人でごろごろ転がりながら落下

2人共打撲・ねんざなどの怪我（要のがひどい）

「要・・・大丈夫なの？」

私が聞くと要はごまかすように笑った。

「あー、まあ・・・右手がちよい怪しいかも・・・後全身打ってさ結構痛い・・・」

「だから！なんでかばったりするのかつつてんの！バカ！？」

「あのなあ 俺だって咄嗟のことだったからさあ・・・もう過ぎたこと言っなよ」

「・・・・・・・・」

華穂がごしごしと目をこする。

「・・・・・・・・いたそー」

私が要の頬に触れる。

頬はすでに赤くはれ上がっていた。

「あ、ちよつとうつたみたいだな あんまし痛くねえんだけど・・・」

「

ガラッ

保健室の先生が入ってくる。

「要君と・・・一応華穂さんも。病院行きましょう。」

先生が私達なんて見てない みたいな表情で要と華穂をまっすぐ見る。

「え？先生 大丈夫だって・・・病院なんて・・・」

「貴方のほうが重病なの。保護者には後で電話するから・・・」

「電話なんてしないで!!」

声を急に荒げたのは 華穂だった。

「華穂・・・？」

要が心配げに華穂を見下ろす。

「あ・・・ち 違・・・そうじゃなくて！そこまでおおげさじゃな
いっていうか・・・」

あ

違う

うそついてる顔。

何か ある顔。

「・・・とにかく 病院に来なさい」

華穂と要は病院へ連れて行かれた。

第72話 華穂とレントゲン室（要）

病院のにおい

初めて見る人間の顔

じつと俺の目ばかり見る医者

病院っていうのは 大嫌いだった。

「・・・だから たいしたことねえってば」

「いいから レントゲン撮ろう？な？」

医者が俺を宥めるように言う。

一緒にいた先生と華穂が笑い出す。

「まったく 笑い事じゃねえし・・・」

「じゃあ・・・江田さんからにしましょうか」

医者がにつこりと愛想笑いで華穂に言う。

「はい」

華穂はにつこりと微笑んでレントゲン室へ向かっていった。

「だから！たいしたことねえから！レントゲンとか金かかんじゃん

「！」

「お金の問題じゃないだろう？」

「金かけてレントゲン撮って？なんともなくて？んなの医者的好都合だろ！」

俺は医者というものが嫌いだった

小さい頃から

病院のおいも 初めて見る人間の顔も 注射で泣き叫ぶやかましいガキも 話しかけてくるじいさんばあさんも

みんな嫌いだった。

でも 医者が1番嫌いだ。

だって・・・

「とにかく！華穂のが終わったら俺は一緒に帰る！」

「コラコラ 悪あがきはやめなさい」

子供でも宥めるような医者の顔に余計イラだつ。

「ったく わかったよ！レントゲンとりやいいんだろが！」

どうせなんともねえんだ！！

俺はずかずかとレントゲン室へ向かった。

レントゲン室がどこかなんて聞かなくてもわかる。

最近の病院つてのは金かかっているとこもあればかかってないところもあつて。

この病院は・・・かかってんな　そこそこ。

で、なんでわかるのかつつたら

頭上には小さな看板。

ここは病院だつつのにデパートのトイレの場所案内みたいな看板がある。

ここはどこだ！！

俺は買い物しに来たわけでもトイレに行くんでもねえ！！

「めんどくせ・・・」

ぼそぼそ言いながらレントゲン室としっかり書かれた部屋を開ける。

ガチャツ

「あ」

-
-
-
- h*
- ?

華穂のにこった声が耳についた。

顔をあげるとそこには

「か・・・なめ？」

顔のひきつった

下着姿の華穂。

「……な……ふえんうい f ペ w じよ p っ え じよ p ! ! ?」

ボタン!!!!!!!!!!!!!!

声にならない悲鳴をあげて俺はレントゲン室のドアを閉めた。

・
・
・
はあ！？

な　なんで！？なんで下着！？華穂！？え！？！！？

頭がこんがらがってそのうち俺は冷えた秋の床に座り込んだ。

それでも心臓だけはやかましく暴れてて

や、心臓だけ　じゃなくて

体全体が沸騰したように熱くて　心臓のようにバクバクしてた。

ため息をついてそのまま下を向いた。

しばらくすると　顔を赤くした華穂がレントゲン室から出てきた。

「か　要の番・・・だ　だよ・・・」

華穂は俺の顔なんて見ないで床ばかり見つめてた。

「あ・・・ああ・・・」

なんだか俺まで顔が赤くなってきた。

「そ・・・その・・・ゴメン　華穂がまだき・・・着替え中とは思わなくて・・・」

そうだ レントゲン・・・だし

着替えるのは当たり前なんだった・・・

バカなことした・・・!!

「え、あ・・・いや・・・だ 大丈夫だよ！べ・・・別に・・・」

「あ・・・ああ ゴメン・・・んじゃ・・・」

思い切り動揺したまま俺はレントゲン室へ入る。

制服のボタンを外しはじめる。

華穂も・・・平気とか言ってたけど一応傷ついたよなあ・・・

奴も一応女だし・・・

ん？

一応？

一応ってなんだ 一応って。

ずっと一緒だったし・・・小学生の低学年の頃なんて素っ裸だっ
て見たことあるわけだし・・・

いまさらって気もするけどさあ・・・

その なんていうか・・・やっぱ昔とは違うわけなんだよなあ・・・

バカか俺は

何目に焼き付けてんだ 華穂の下着姿なんて！！

かあぁとまた体が熱くなってきて俺はすぐに制服を脱いだ。

第73話 公園（要）

「ったく・・・なんだよ 結局たいしたことなかったじゃねえか・・・」

冬みtainな風が吹く中 華穂の隣で俺がつぶやく。

学校に途中で戻るのもめんどくて

『ちゃんと帰る』と適当なことを言って保健の先生には先に帰らせた。

俺と華穂は公園のベンチに座ってる。

「あはは いいじゃん！骨にひびとかあったら後々めんどいし・・・」

「俺はレントゲンって好きじゃねえんだよ・・・病院もだけどさ。」

「あー、まあ・・・私も男の先生の前で脱いだりすんのはいやだ・・・し・・・」

言った後で思い出したらしい。

華穂は顔を赤らめて下を向いた。

「い いや・・・その・・・」

「別に 俺は気にしてないからさ」

「・・・うん そーだよね！」

「・・・何 どうかした？」

「え？ いや、なんでもない！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・だったら なんで泣きそうなの？」

「！！！」

華穂はいつそう顔を赤らめて立ち上がった。

「なんでもない！！」

華穂は涙目で立ち上がる。

「・・・何怒ってんの？意味わかんないんだけど？」

「ベ・・・別に なんでもないつつてんでしょ！」

なんなんだコイツ・・・

意味わかんねえ 何がしたいんだ？

「わ 私！先に帰るから！」

華穂はそう言って走り出そうとする。

その腕を慌ててつかむと華穂は心底いやそうな顔をする。

「・・・走るなよ お前だつて怪我・・・してんだろ？」

「別に 走れないわけじゃない」

「あのなあ！なんだよ急に！可愛くねえな！！」

「な・・・っ 可愛くなくつたつていいよ！！」

「意味わかんねえんだよ！急に泣きそうになって！聞けば逆切れ！
！意味わかんねえ！！」

「わ わかんなくていい！！」

華穂はそう怒鳴つてまた下を向く。

見ると華穂の足元がだんだん濡れていく。

泣いた

それがわかった瞬間なんだか気がぬけてしまって 俺はため息をついた。

泣かして しまった

なぜだかは知らないが

目の前で華穂が泣いてる

「お　おい・・・なんなんだよ？おい？どこか痛いのか？」

心配になって肩に触れようとすると華穂はすぐに後ずさりした。

「もういい！！触らないで！！じゃあね！！」

華穂は結局　走って学校へ戻っていった。

第74話 公園（華穂）

「ったく・・・なんだよ 結局たいしたことなかったじゃねえか・・・」

冬みたいな風が吹く中 私の隣で要がつぶやいた。

「あはは！いいじゃん 骨とか折れてたら後々めんどいし・・・」

「俺はレントゲンって好きじゃねえんだよ・・・病院もだけどさ。」

「あー、まあ・・・私も男の先生の前で脱いだりすんのはいやだ・・・し・・・」

脱いだり・・・？

さっきのことを思い出すと急に体温が上がった気がした。

ヤバ 要・・・思い出すじゃん！

思わずうつむく。

なんとなく 要のことを意識してしまってる。

階段で かばってくれた時から。

そつだ 男の子なんだった みたいな感じ。

失礼かもしれないけど　なんとなく　そう思った。

要は？

私のこと　女の子だって　思ってるの？

「別に　俺は気にしてないからさ」

気をつかってる　ともとれるその言葉。

だけど私には

気にしてない？

それ・・・は　どうでもいっていいこと？

別に　なんとも思っていないってこと？

それって・・・

「・・・うん　そーだよね！」

わざわざらしく明るく言う。

「・・・何 どうかした？」

「え？ いや、なんでもない！！」

あれ？ 変・・・だなあ・・・

泣いちゃいそう・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・.. だったら なんで泣きそうなわけ？」

「！..」

気づいてほしくないのに

意識してないくせに

気にしてないくせに

どうでもいいくせに

なんで こういうことは気づくの？

ねえ

私が 要のこと意識してるってことには気づいてないでしょ？

なのに

なんで？

ああ 本当に泣いてしまいそうだ

慌てて立ち上がる。

「なんでもない！！」

泣きそう

泣きそう

もう少し 我慢・・・

「・・・何怒ってんの？意味わかんないんだけど？」

「べ・・・別に なんでもないつつてんでしょ！」

「わ 私！先に帰るから！」

気まずくなつて 走ろうとする。

すると腕をつかまれた。

「・・・走るなよ お前だって怪我・・・してんだろ？」

「別に 走れないわけじゃない」

「あのなあ！なんだよ急に！可愛くねえな！！」

可愛くない・・・！？

「な・・・っ 可愛くなくったっていいよ！！」

「意味わかんねえんだよ！急に泣きそうになって！聞けば逆切れ！
！意味わかんねえ！！」

「わ わかんなくていい！！」

わかんなくていいよ

わかってほしくない

わからないで？

だめだ

もう 泣く・・・

「お おい・・・なんなんだよ？おい？どこか痛いのか？」

心配そうな要の声と 肩に近づく気配

慌てて後ずさりする。

「もついい！！触らないで！！じゃあね！！」

そう言っ て 私は学校へ向かった。

要から 逃げ出した

なんで泣いてしまったんだろう？

なんで今も すごく胸が重苦しいんだろう？

体が 全部が 重い

怪我のせい？

違う そんなじゃない

だって1番痛いのは・・・

しばらく走って立ち止まる。

痛む 胸をおさえる。

「は・・・はあ・・・ッ」

痛い 痛い 痛い 痛い

涙がまたあふれだす。

意味わかんねえ

意味なんて 私が1番わかんない

なんであんなこといったのか したのか
なんでこんな傷ついてるのか
わかんないよ

第75話 要 異変

次の日 俺が教室に入るのがたまらなく嫌だったのはわかるだろう？

けど アイツが逆ギレすんだってどうなんだって話なわけで・・・

もやもや教室のドアの前で考えていると後ろから肩をたたかれる。

「要？」

後ろを見ると心配げにこちらを見る隣。

もちろん横には飛鳥がいた。

「・・・お おはよう・・・」

「何お前 教室の前で立ち止まって・・・怪我とか 大丈夫なのか？」

「あ、ああ・・・怪我はなんともない。」

「ふうん？なんともなくつてよかったね」

何も知らない いや、知らなくてもいいんだけど・・・

隣がにこりと微笑む。

その幼げな顔が華穂とだぶって なんとなく恥ずかしい。

そんな俺を飛鳥はきよとした顔で見てる。

燐はどこか華穂に似てるもんだから俺は燐を直視できないでいたんだ。

「おはよー!」

明るい 小さい子供みたいな声と口調でこちらに来たのは 顔を見ないでもわかる 華穂だった。

俺はふりむくことができてなくて 飛鳥の足元ばかり見ていた。

「おはよう華穂」

燐の声。

「うん!燐と飛鳥と・・・」

華穂の声が止まる。

俺に気がついて 昨日のことを思い出したのか

それとも俺だと気づいていないのか。

「・・・要?」

燐が俺の異変にようやく気づき 声をかける。

動くことができなかった。

華穂の顔を見たら 何かが起こる気がした。

それが何かまでは思いつかなかったけど

今 華穂の顔を見ちゃいけない気がしたから。

ガラッ

教室のドアが開く。

飛鳥が腕を伸ばしてあけたらしい。

燐が俺をぬいて中に入る。

手をつないでいた飛鳥もそれに続く。

「・・・・・・・・」

少し間があって 俺も重い足を教室へ入れた。

後ろで華穂の ぼてぼてという効果音の似合う足音が聞こえた。

「あ あのね 要！」

華穂が俺の服をつかむ。

「へ？」

思わず振り向いて 後悔する。

俺を見上げる華穂の顔

目があった瞬間 顔に血液が集まってきた。

「あ・・・」

慌てて目をそらす。

その様子を新一や飛鳥が見ているのにも気づく。

「き 昨日は急に帰ってゴメン！」

「ああ・・・うん 別に・・・」

目をそらしたまま適当に相槌。

ヤバイ なんで俺顔赤くしてんだろ？

華穂の顔見れね・・・

「えーと・・・」

華穂もしばらく黙る。

俺はとにかくこの場から逃げ出たくて、なんとなく飛鳥たちのほうへ目をやる。

飛鳥と目があう。

必死に『助けてくれ』と目で訴えるが飛鳥は気づいていないのか黙って見てるだけ。

おいおいおいおい・・・

「華穂！話終わった？トイレ行かない？」

燐がにっこりと微笑みながら華穂に言う。

ナイス燐！！

俺の異変に気づいてかどうかは知らないが俺は心の中で燐に拍手した。

「あ・・・うん」

華穂は燐と教室を出た。

「はあ・・・」

ため息をついてかばんをおろして机に置く。

すると飛鳥がこちらに寄ってきた。

「何 華穂となんかあったのか？」

「はあ！？な なんで！！」

「様子がおかしい・・・というか・・・」

すると新一がニヤリと笑って言う。

「なんか恋愛がらみっぽいしな」

「な・・・!!」

顔が真っ赤になったのに気づく。

教室内の数名がこちらをチラチラ見てくるし・・・

「んなわけねえだろ！」

「けど 飛鳥と燐のケースもあるし？」

新一はまたニヤニヤ笑う。

「べ 別に・・・昨日下着姿見たからちょっと意識しちゃってるだけで恋愛どころなんて・・・!!!!」

言い終わってから口を手でおさえる。

「下着・・・」

「すがたあ!!!？」

2人が目を丸くする。

口がすべった・・・

ガリガリと頭をかいてうつむく。

きっと今俺はみつともない顔をしてるはずだ。

耳まで赤くて たぶん相当カッコ悪い。

「どういうことだ！なんで！？なんで下着！？」

年頃の女の下着姿

そのキーワードに興奮した新一が俺に質問せめてくる。

「べ 別に好きで見たわけじゃねえ！！ただレントゲンの時に間違えて入っちゃまって・・・」

「へええ・・・」

「華穂の」

「「下着姿」」

2人がわざと声をそろえて言う。

「うるせえ！！思い出させるなよ！！」

ああもう 最悪だ！！

第76話 無意識 拒否 夢乃

朝 教室に入ると燐とかはいなくて。

確か明美は今日サボるって言ってたような・・・

奈央は結構ギリギリに来るからまだ来るはずない。

キヨロリと見渡すと新一 要 飛鳥が窓際にいた。

「ねえ 燐は？」

飛鳥に聞くと新一と飛鳥はくすくす笑いながら

「トイレにいると思うよ。」

という。

「何かあったわけ？」

「いや！なんでもねえ！！！」

明らかに何かあった という態度で要が言う。

バレバレ・・・

鼻でため息をついて私は女子トイレへ向かった。

「・・・燐 と・・・華穂？」

燐とその横に小さな影。

覗き込むとやっぱり華穂だった。

「要とかさ」

私がそういうと華穂の肩がピクリと動く。

「・・・華穂と何かあったわけ？」

華穂は気まずそうな顔で私を見た。

それから私と燐の腕をつかんで泣きそうな顔で言う。

「どうすればいいの？何か変なの！おかしいの・・・違うの・・・」

軽くパニックになっているようで華穂は目をぐるぐる回しながら高い弱い声で言った。

「何？何が？」

私が頭を撫でると華穂はふるふると頭を横にふった。

「いつもと違うの 要・・・違うの・・・」

なんとなく 何が起きてしまったのかがわかった。

過剰反応もいいところだ とかすかに思っ て目をそらす。

いつかこうなるとわかっていた。

なんの感情もない者達がずっとそばにいて 守りあって

そんな都合のいい話 ないだろうと

わかっていたのに

いざこうなると 自分のことじゃなくても泣きそうになる。

「華穂 落ち着いて 何かあったの？」

燐が華穂の手を握る。

「き 昨日階段でかばってくれた時から・・・なんか顔見るの恥ずかしくて・・・ッなんかもうよくわかんない・・・」

身に覚えがあるはずの燐は黙った。

「・・・保健室行ってくる」

華穂はそう言っ て燐の手を離した。

「え・・・どうしたの？」

「おなか痛い」

華穂はぼそぼそ喋ってトイレを出た。

ボタン・・・

華穂がいなくなると急にトイレの異臭が気になった。

「燐 出よ？」

私が言うと燐はコクンと頷いた。

「華穂のこと・・・どう思う？」

ドアを開けてぼそりと言う。

「要のこと・・・好き っぱいね」

『要』と『好き』の単語はかなり小さく言う。

「・・・まったく」

どんなにつなぎとめておきたいと私1人が思っても しょうがなかった。

「ねえ 燐・・・」

絶対に燐には顔が見えないように 背を向けて言う。

「なんで こうなっちゃったんだろ？」

燐の返事はなかった。

どうしてだろう？

なんでだろう？

わかっていたことでも やっぱり動揺してしまう。誰かに問いかけてしまいたかった。

答えを私は知っていたし どうするべきなのかもわかってた。
だけど したくなかった。

なんで？どうして？

どうして あのまんま 『みんな仲良し』でいられなかったんだろ
う？

燐と飛鳥

克哉は私

華穂と要

みんなこうやって離れてく

だけどやっぱり いつからか気づいていたことだった。

いつかはこうして誰かしら離れていくと

それまでは笑っていけるだろうと

どこかでわかってた。

それでも 無意識のうちにそれをわかりきってしまうことを拒否していた。

第77話 無題（前書き）

すいません……サブタイトル思いつきませんでした……

第77話 無題

夢乃と2人で教室に戻るとクラスの人たちはほとんどそろっていて、奈央もいた。

「燐と夢乃 どこ行つてたんだよ？」

「んー トイレ」

私が言つと奈央は「ふーん？」とだけ言つ。

すると飛鳥が私の腕を握つて無言でぐいぐいひっぱる。

「へ？飛鳥？」

慌ててそちらへ歩きだすと逆の腕を克哉につかまれる。

「まーまー飛鳥 いいじゃん別にー」

克哉はにっこりと微笑んで飛鳥に言つ。

「え？え？何？何かあつたの？」

「なんでもねえ！燐 来い！」

飛鳥がイラついた声で言つ。

「なんでもない感じじゃないんですけど」

私が言うと克哉は嬉しそうに

「だろー？ホラ燐　ちよつと来て」

克哉はそう言つて私を窓際へ連れて行くとする。

「燐　行くなよ！ろくでもねえことさせられるぞ！」

飛鳥は私を廊下へ連れ出そうとする。

「えーとえーとえーと！？説明してよ！どっちがいいのかわかんないし！」

「いいから！来い！」

飛鳥が私の腕をひっぱる。

「ちょ・・・待って！！！！！」

ドンッ　ゴンッ！！

「・・・へ？」

今の　にぶい音は・・・・・・もしや？

見ると飛鳥が後頭部をドアにぶつけていた。

私が思わず突き飛ばしてしまったから。

「ひゃあ！！飛鳥！？大丈夫！？」

「つてええ・・・」

「ああ、こりや大変　燐！飛鳥を保健室につれてってやりなよ」

克哉がにっこりと微笑む。

「え・・・うん」

「テメ・・・克哉・・・」

「ホラホラおとなしくして！」

克哉が飛鳥の背中を軽くたたく。

私は飛鳥の腕をつかんで保健室へ連れて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9461a/>

気持ちのカタチ

2010年10月9日01時40分発行